

あれ? これって『ラブライブ!』だ
よね

片桐 奏斗

不慮の事故に遭い亡くなってしまった主人公『片桐光』。神様や輪廻転生といったものを一切信じていなかった光だが、気が付くと彼は『ラブライブ！』の世界にいた。

死ぬ直前まで『ラブライブ！』のことを考えていた自分の夢を神様は叶えてくれたのだと、神様からの送り物だと喜んでいた主人公だったが、この世界では自身を含め主要メンバーが全員性別が逆転していた。

「あれ？ これって『ラブライブ！』の世界だよね」

——自身の知っている『ラブライブ！』と違うことに戸惑う主人公『片桐光』
改め『片桐光莉』の青春ラブコメディー。

※主人公含め『μ's』『A·R·I·S·E』といったスクールアイドルや女子高の生徒などが性転換しています。性転換ものが苦手な方はプラウザバックをよろしくお

ねがいします。チャレンジ精神がある方は是非ウエルカムです!!

目次

改稿前

プロローグ	1
第1話 マネージャー	9
第2話 転入生として	20
第3話 生徒会長	32
第4話 不協和音	42
第5話 状況整理	53
第6話 にこりんばな	61
第7話 練習開始	71
第8話 START・DASH!	78
第9話 まきりんばな	94

第10話	心の温度	108
第11話	東條希	120
第12話	恐怖症	129
第13話	トラウマ	140
第14話	もうひとりじゃないよ	150
第15話	後始末	160
第16話	ひかり	174
第17話	Hesitation of small birds	187
第18話	こころとからだ	193
第19話	矢澤にこ	206
第20話	アイドル研究部	215
第21話	部活動紹介	228
第22話	リーダーの素質	242

第23話	リーダー決定戦……………	253
第24話	ラブライブ?……………	263
第25話	狼狽……………	270
第26話	一縷の希……………	279
第27話	産みの親……………	285
改稿後		295
プロローグ	……………	295
第1話	マネージャー……………	305

改稿前

プロローグ

——俺は今、絶賛後悔している。

俺こと『片桐光』かたぎりひかるは若干十五歳にして、交通事故に巻き込まれて死亡してしまっ
た。

死因である交通事故だが、それも信号が変わる際にブレーキを掛けようとしたト
ラックが、何故か操作不可な状態に陥り、横断中の少女に突進しようとしているの
を目の当たりにしてしまい体が勝手に動いてしまったのだ。その少女を庇うように
突き飛ばし、彼女が大きな怪我をしていないことを確認し、俺の意識は無くなった
——。

そんな理不尽な死を突き付けられた俺だったが当然、納得出来るわけがなく、まだ生きていたかった。俺が大好きな『ラブライブ！』をもっともっと堪能したかった。死ぬなんて嫌だよ。

この願いを神様が聞き届けてくれたのか。何故なのかは知らないが、気付けば俺は再度生き返っていた。

トラックに当たってグチャグチャになったであろう五体は、充分に動かすことが出来るし、ちゃんと景色も見えるし、嗅覚も、味覚もしっかりとしている。

ただ……一つだけ。

——何故か、俺は女になっていた。



「初めまして。今日からこの音ノ木坂学院に転入してきました『片桐光莉』かたぎりひかりです。

よろしく願いますね」

俺、『片桐光』改め、『片桐光莉』は音ノ木坂学院にやって来た。

この世界が『ラブライブ!』の世界だと分かった瞬間の俺の行動は早かった。今までいた学校を辞め、ここに転入してきた。世間が狭いのか良くわからないけれど、俺の母親がここ音ノ木坂学院の母親と旧友で、音ノ木坂学院の理事長と話を付けることで俺の転入が認められたというわけだ。

そして、理事長から送られてきた制服のデザイン表に目を通したり、オーダーメイドで制服を注文したりと慌ただしい日常を送っていたら、あっという間に転入の日付になってしまい現在に至る。

——うん。やっぱり、後悔するね。

教壇の前に担任の教師と一緒に立つ俺だったが、後悔をしている理由は一つ。

ここ音ノ木坂学院は男子校で、生徒は男子のみということ。

（ここって本当に音ノ木坂学院で、『ラブライブ！』の世界で合ってるんだよね……。
恨むよ、神様）

「この子は音ノ木坂学院の新しい試みということに通ってもらおう試験生だ。可愛いのはわかるが、粗相のないようにしろよ。……片桐、お前の席はあそこだ」

そういつて担任の教師が指差したのは、アッシュ色の髪を携えたかなりの美少年の隣の席。

何となく俺はこの美少年が誰なのか、把握してしまった。

自分の席までの道程を歩こうとした際、担任に腕を握られ引き留められた。

「ま、そんなわけだが、色恋に積極的なお前らのことだ。この美少女に質問したいだろう？ ってことで、今の時間から一時間目終了までは、転入生への質問コーナーとする」

別に一時間目は私の授業だし、いけるだろう。と樂觀的に言い放った担任だったが、俺からすれば冗談じゃない。

どんな質問が投げかけられるのかも、女の子らしい答えも何もかも理解してない

のに、適切な回答なんて出来ないんだからやめてよ。

『はいはい!!』

教師の一言によって、教室中の男子生徒の手が挙げられた。

「そうだな。じゃあ、最初は高坂からいこうか」

……高坂。この音ノ木坂学院で、二年生でありつつ、高坂という苗字を持つ人は俺は一人しか知らない。

『ラブライブ!』で本人は皆がリーダーでセンターと言っているが、メンバー全員がリーダーと認める『μ's』のリーダー。

「俺、高坂穂乃果^{こうさか かの}ね」

そういつて席を立った橙色に寄っているような茶髪を短く切り揃えている美少年が声をあげた。

やはり『μ's』のリーダーで発起人である高坂穂乃果なんだね。てか、前世の俺よりもイケメンでちょっと泣きそう。この世界に置ける俺は、今の自分が言うのはなんかナルシストっぽく聞こえるから嫌なんだけど、結構可愛い容姿をしている。

だから、別に気にしてはないんだけど。ちょっと、前世と比べちゃうからやだな。穂乃果でこの容姿なのだから、他の『μs』のメンバーもそうなのだろう。

穂乃果からあまり視線を逸らさないように、少しだけ教室内を見回すと、肩口まで綺麗な黒髪を伸ばしている少年やアッシュ色の髪でシヨタっぽい顔付きの少年がいた。おそらく彼らがそうなんだろうねと納得した俺は再び視線を穂乃果に戻す。「光莉ちゃんはさ、スクールアイドルって興味ある？」

「はい？」

男女逆転でもスクールアイドルがあることにビックリんだけど。というか、初対面で良く名前呼びが出来るよね。……穂乃果だから、仕方がないか。

音楽室で真姫ちゃんと会った後、勧誘している際は西木野さんって呼んでたはずなんだけど、気のせいかな。初対面で女の子を名前呼びって、ちょっとプレイボーイ臭がするね。

「スクールアイドル、ですか？」

「そう。ここらで有名なのは『UTX学院』の『A・R・I・S・E』^{アライズ}っていう男子三人で結成されているグループなんだけど」

やっぱり『A・R・I・S・E』のメンバーも男女逆転に巻き込まれているんだ。

これで俺の予想は当たっている可能性が高くなってきた。ここに転入してくる際に理事長の姿を見たけれど、変わっていなかった。つまりはそういうことなのだろう。

言い方は悪いけれど、理事長は話に関わらない。『音ノ木坂学院』は女子高であったが、男子職員がいないわけではなかった。だけれど、『Love Live』に出場する人は全員女子だった。

この世界では教員などは性別が変わっていないが、女子しか参加していなかった企画に参加していたグループはすべて性別が逆転していると考えられる。

「——光莉ちゃんさえ良かったら、俺達『H・S』のマネージャーになって一緒に廃校を阻止してくれないかな」

※次回の更新は未定です。あまり評判がよろしくなければ一生あげることがないかも知れない作品です。

……ノリで書いただけなので。

でも、『μs』の男性化Verを全員出すまでは書くかも

第1話 マネージャー

「……で、なんで私なの？ 自慢じゃないけど、力仕事は無理だよ」

悪夢の質問タイムを無事に終え、今日一日のカリキュラムを全てこなした放課後――。

『μs』の現メンバーである『高坂穂乃果^{こうさかほのか}』、『園田海未^{そのだうみ}』、『南ことり^{みなみ}』の三人と一緒にいた。

あっちの『ラブライブ！』でも思ったけど、やっぱり三人一緒にいたらここは花園かって雰囲気があるよな。皆が皆、可愛いつて意味で。

こっちだと、花園は花園でも薔薇が咲き乱れていそうだけどね。

海未やことりも穂乃果と一緒に、髪の色や瞳の色は全く一緒だけど、やっぱり髪型とか長さは変わっていた。あのままの髪型だと確かにおかしいけど、正直こんな

にもカッコイイ人じゃなかったら気付かなかったよ。……キャラ補正って大事だね。うん。

「大丈夫だよ。光莉ちゃんに頼みたい仕事に力仕事はないから」

「……穂乃果。ちゃんと順序を守って丁寧に説明しないと伝わらないよ」

「あはは。まあまあ、海未君、穂乃果君はいつもこんな感じじゃない。光莉ちゃんに頼みたいことっていうのはね。……あ、光莉ちゃんって呼んでよかった？」

「あ、うん。いいよ」

穂乃果のスクールアイドルに対する熱意はわかったけれど、勢いだけで向かってくる穂乃果はやっぱり怖いね。何事に対しても思い付いたら一直線だし。

それを上手いこと制御するのが男子にしては少し長めに切り揃えている黒髪の美少年——園田海未。

そして、どちらに付くわけでもなく中立に立ち、上手くバランスを取っているのがシヨタ顔でアッシュ色の髪をふんわりとヘアースタイルリングしている、これまた美少年が南ことりだ。

「光莉ちゃんに頼みたいのは、もっとこう別のことなんだ」

「別のこと?」

「練習メニューを組んだりとか、衣装のチェックとかお願いしたいんだ。ボクらよ
り女子の視点で見てもらった方がいいかも知れないからね」

女子の視点で見れもらった方がいいかも……ね。

俺は外面でいったら女子だけど、内面は完全に男子なんだが、言わない方がいい
よな。

「……後は作曲家を捕まえて欲しいけど」

「穂乃果。それは図々しいよ。大体、あの西木野の腕前を僕らは知らないんだから、
良いも悪いも判断出来ないですし」

「でも、穂乃果君の言いたいことはわかるよ。あの子が音楽室で聞き覚えのない自
作っぽい曲をピアノで弾きながら歌ってるの結構な人が耳にしているみたいだし」

「でしょでしょ!俺も彼の演奏や歌声を聴いて、『M.S』に入って欲しいって思っ
たし。でも、いきなり入ってくれていうのはあれじゃない? ってことで、作曲
して欲しいってお願いしたんだけどな」

お断りします。とでも断られたのかな。

普段から聴く曲はクラシックとかで、アイドル系の曲は一切聴かないから曲も作れないからって。アイドルの曲は軽くて嫌なんだよ。とか言ってるよだね。こっちの真姫ちゃんは。……ちょっと待て。

「なんで、私が説得役にならなきゃいけないの？ 『μ's』はあなた達のグループでしょ」

原作でも穂乃果がどうにかしてあのツンデレ娘を引き込んだんだから、こっちでも勝手にしてよ。

ぶっちゃけ『ラブライブ！』の世界だったなら率先して協力してたけどさ。なんちゃってなこの世界ではそこまで魅力を感じないんだよね。前の世界の俺と同じ性別を好きになんてならないし。外見的な意味で言ったら男女でピツタリなだけど、精神的な事情で言えば俺は男に属するからね、同性愛を否定はしないが、実際に見たらどう？ と言われたら反射的に「いやだ」と断れる自信がある。

おそらく俺には断られると最初から思っていたんだろう。

穂乃果に対して海未が「ほれみたことか」といった様子で迫っていた。女子が三

人揃ったら姦しいとは良く言うが、男子が三人揃っても姦しいんだな。

非協力的な人に必死に頼むぐらいなら別の人……それこそ男子に頼めば良いという海未だが、穂乃果は一向に引かない。何でここまで俺に拘るのか検討もつかない。二人で言い争いを続けており、ことりが仲裁に入っているがお互いに引く気がないようだ。

「ちよっと来て」

この言い争いは絶対に収まらないと悟ったのか、ことりは強引に俺の腕を引っ張り教室の外へと連れ出される。

「……ねえ、どこまで連れていく気」

廊下を二人で歩いて約五分ぐらい。

擦れ違う男子生徒から怪訝そうな眼差しを向けられ続けて、俺は少しイライラしていた。なんで、何にも悪いことしていない俺がそんな眼差しを向けられないといけないのさ、って。

イライラが限界に達したと悟ったのか、ここが目的地だったのか知らないが、ことりに連れられて来たのは、人気のない屋上だった。

「こんなとこに連れてきて何？」

俺の問いにことりは一切答えずに、ゆっくりと一歩ずつこちらに向かってくる。そんなことりの様子に俺は恐怖を感じ、少しずつ距離を取る。

一歩近付いてきたら二歩下がるといふ行動を何度も行っていると、何かにドンツと背中が当たった感触がした。

「っ!？」

チラツと後ろを確認した俺が目の当たりにしたのは、背中に当たっている飛び降り防止の為の柵と、そこから見える地表までの距離。

高所から下を見下ろしてしまった俺の足は自然と震えてしまい、恐怖のために体が硬直してしまった。

(早く安全な場所に……)

一刻も早く高所から逃げようと扉まで行こうとした俺を止めたのは、紛れもない。同じクラスメイトでここまで一緒に来たことりだ。

このまま突き落とすんじゃないかと思われるぐらいの勢いで、俺はことりに押し倒された。押し倒されたといっても、柵に背が当たったままで、正確に言えば身動

き取れなくされた。

顔のすぐ横には手をつかれ、左にも右にも動けない状態。

しゃがんで避けようと足を開けば、隙間に膝を入れられ、完全に身動きの取れない人形のようなだった。

今の自分に出来るのは、高所から下の景色を見下ろさないように、ことりの顔を睨み付けることぐらい。目を背けようとしたら景色が目映ってしまう。ならば、物凄く近いことりの顔を睨み付けて、絶対に屈しないという気持ちを伝えるしか今の俺には出来ない。

「……離してよ」

「いやだよ。どうしても離して欲しかったら、マネージャーになってよ」

「それも私じゃなくていいじゃない。力仕事が出来る男子の方が絶対にいいと思うよ」

俺は衣装作りが上手いわけでも、作詞作曲の才能があるわけでもない。何も無いんだから。

「ボクは君が良いんだ。君以外の誰かがマネージャーなんて考えられない」

「……っ！」

真っ直ぐ目を見て真剣な顔付きで言い放ったことり。

その想いに嘘偽りが無いことに気付いた俺は、どうしようもなく恥ずかしくなり、ことりから少しだけ視線を逸らす。

(……なんだよ、これ。必要とされたことが嬉しいのかな。凄くドキドキして恥ずかしい)

「光莉ちゃん、お願い」

顔を背けたことで、より近くなった俺の耳に直接ことりが囁くように呟いた。

「……わ、わかったから。『M.S』のマネージャーやるから離れて！」

心臓がバクバクと凄い勢いで脈打ち出し、このままの状態が続けばどうにかなくなっちゃいそうだったので、降参の意を示す言葉を口から漏らす。

俺の許可を得たことりは嬉しそうに「二人に伝えてくる」と言って、屋上から去っていった。

ことりがいつ気付いたのかは定かではないが、高所恐怖症で高い所から下を見下ろすと体の震えが止まらないことを理解したことりは、屋上から去る前に俺を校舎への入り口の壁に凭れ掛けさせてくれた。おまけに自身が羽織っていたブレザーを体に掛けてくれる始末。

気を使って高所から遠ざけてくれたことや、体の震えが寒気の可能性があるかもと自分の上着を掛けてくれたのも嬉しいよ。でもね。その運び方が嫌だった。何が悲しくてお姫様抱っこされなきゃいけないんだよ。生まれて初めての経験だよ。

(……でも、嫌な気がしなかったのはなんでだろ。ドキドキが止まらないし)

自分に掛けられたブレザーをギュッと握り締め、俺は思った。

「暖かいなあ……」

何処まで『μs』のために出来るかわからない。

才能のない自分だけど、ほんの少しでも力になれるのであればなりたいな。とさっきまでの俺なら一切考えないことを思い始めていた。

ことりがしたのはセクハラに当て嵌まる行為だったかも知れない。けど、それもこれも穂乃果や海未が、『μ's』が大好きだから。

大切にしたいと思っっているモノを護るために、仕方のない手段だったのかもと考えると怒りもなくなつた。

「私も、好きになれるのかな」

——この世界の『μ's』を。

——自分自身を。

(書き終えた自分の作品を見て)

……なんだこれW

これはことりじゃないし。面影完全じゃない気がする……けど、なんだこの甘さ。

気のせいだよね。うん、キノセイダヨー

第2話 転入生として

「ねえねえ、これなんてどうかな？ かつこよくない？」

「んー？ えー、確かにかっこいいけど、衣装のシャツに合わせた色のブーツはちよつとねえ。シャツは悪くないんだけど、黄緑や水色のブーツはちよつと……。それなら、こっちの方がいいんじゃない？」

放課後の教室――。

ことりが見せてくれたファーストライブで着用する予定の衣装のデザインを俺に見せてきたので、最初に言われた通りに自分の意見を言った。

全体的に白が多めで、下に着用するシャツが黄緑、薄めの赤色、水色と三色あり、それに合わせたブーツだったので、ブーツの色を白に統一し、白のボトムズにそれぞれの色のワンポイントをつけた。

そのデザインをささっと描きあげて、ことりに見せる。

「光莉ちゃんって、絵も上手なんだね！ うん、この衣装とっても良いよ」

「まあね。一応、美術も得意だし。……あんがと」

少し照れ臭くなって、ことりから視線を逸らしながら礼を言う。

そんな俺らの掛け合いを傍から見ていた穂乃果と海未は、じっとこちらを見ていた。海未はそこまで熱心に見てはいなかったみたいだが、視線を逸らしたり見なかった振りはいなかったもので、絶対に見ていたのだろう。

「……なに？」

「べっつにー。なんか二人、良い空気作ってるなあって」

「別に作ってないよ。ただ単にことりと衣装の意見を出し合ってたただけだよ。高坂君も自分が着る衣装なんだし、かっこいい方がいいでしょ？」

「そう、それだよ!!」

いや、どれなんだよ。

助けを求めようとことりに視線を向けるが、俺が描いたデザインを見ながらあれよこれよと呟いていたので、もう既に作る算段を立てているのだろう。ってことで、ことりは味方になってくれないようだ。

「ことり君は名前で呼んでるのに、俺らは呼んでくれないの?」

「……いや、許可もらってないのに呼ぶのはちょっと、ねえ」

「じゃあ、許可出すから呼んでよ。光莉ちゃん」

ここで許可出されても……。

しかも、この雰囲気は呼ばないといけないような雰囲気だし。密かに海未のちよつとだけ気分がこっちに向いてるみたいだから呼ばないとダメだよな。

「ほ、穂乃果……。海末」

前世の俺なら別に気にせず呼ぶことが出来た気がするが、今は妙に恥ずかしくて呼ぶ際にちよっとだけ緊張した。

「か、可愛いなあ。もう」

「これは……珍しく穂乃果を褒めないとダメだね。こんな可憐な女の子が応援してくれると思うだけで」

「でしょでしょ!!」

穂乃果と海末の二人は何故かテンションが上がっているみたいだけど、俺は相手をするのが面倒になり放置することにした。

可憐とか言うなし。とか何とか思っている俺だが、自然と頬は上がってしまった。女扱いされるのはなんか嫌だけど、外見とか褒められるのはちよっと、本当にちよっとだけ嬉しいかな。

「……あ、そういうえば今日、生徒会に挨拶行こうと思ってたんだっただ」

「生徒会に？ どうして」

「理事長や先生には挨拶回ったんだけど、生徒会の人達には行ってないからしとこ
うかなって。生徒の長なんだから一応、ね」

「そっか。生徒会室は三階だよ」

「わかってるー」

鞆は置いていくから、待っててよ。そうやって俺は教室を出て、階段を駆け上
る。

教室から出た後からずっと、男子生徒の視線を感じて悪寒がしたので、さっさと
生徒会への挨拶を終えようと自然と足は速くなっていた。

早く終わって早く帰ろう。そんな気持ち先走って後先考えずに急いでいたから
だろう。

「あっ……」

階段を踏み外し、前に倒れそうになり体勢を立て直そうと後ろに仰け反った瞬間
――。

前世のように男だったならば、耐えられたのを女になり力が思った以上になかったのが原因かは、わからない。けれど、今の俺の体は後ろに倒れかけていて、踊り場に転倒しかけていた。

(もう、ダメかな。……痛そうだな)

迫る床をチラッと確認してしまった俺は来るべき痛みに備え、目をぎゅっと閉ざす。

(…:…痛いのはやだな)

そう思ったのも束の間。

既に体は床に激突していてもおかしくないのに痛みは来ない。

足が床についている時点で体が床についていないとおかしい。なのに、なんでこんなにも暖かいんだろうか。

恐怖よりも好奇心が勝った俺は、恐る恐る瞼を開ける。

「間にあって良かったなあ。お姫様」

瞳に映ったのは、迫る床でも、白い天井でもなく、少し紫がかった短髪の少年だった。

「あ、ありがと……ごさいます」

「ええよ。それよりも怪我せんでよかったよかった」

ふわりと抱き留められるように体全体を覆われ、暖かく安らぐことが出来る空間であった。……ある一点を除けば。

「……えっと、そろそろ離してもらってもいいですか？ さっきまでは助けてもらったので、体勢なんて気にしてられませんでしたが、今から揉んだりしたらセクハラで訴えますよ？」

「おっと、これは堪忍な。手がそこにあったもんやから、つい、ね」

ついという言葉で許されるなら警察はいらないんだよ。内心そう思わないことも

なかったが、助けてもらったのは事実なので、今回は見逃してあげよう。

別に元男だからそこまで悪く思っていないというのもあるし、かっこいい分類に入る人だったから嫌悪感もなかったし、絶対に報告しなきゃいけないってこともないからね。

「ところで、そんなに急いでどうしたんだい？」

「生徒会室を探してて。でも、この学校の女子って私一人じゃないですか。視線がちょっと……」

「あー、なるほどね。隅々まで見られるような視線が嫌で、急いでたら足を踏み外して転んでもうたと」

「そうなんです。あ、自己紹介がまだでしたね。私は片桐光莉です」

階段の踊り場で横になってたままかっこいい男子に抱えられている可愛い女の子ってのは、第三者からすれば絵面になるかも知れないが、今の自分は抱えられている本人なので、一刻も早く離れたいが故に立ち上がる。そして、真新しい制服に埃やごみがついてはいけないので軽くパンパンと払う。

「光莉ちゃんね。『東條希』とうじょうのぞみよろしく」

「希……。良い名前ですね。希先輩」

生徒会室までの道程をゆっくりと歩きながら二人で話し続ける。

話している最中、注意力が散漫になり、物に躓いたりしないように俺の足下を確認している希先輩が心配り上手でかっこよく思う。

「希先輩？ どうしたんですか」

「ん。いや、特に用事はないよ。あ、もう生徒会室につくよ」

「そうみたいです。希先輩、ここまでありがとうございます！」

実際には希が生徒会副会長であることを知っている俺だったが、こちらでは知らない設定なので別れる前提で話を進める。

「ええよ。ここに用事があるから」

そういって、生徒会室のドアを勢いよく開ける。

「ようこそ、生徒会へ」

……おっかしいなあ。関西住なのに、関西弁の男が書けないぞー(笑)
ってことがあります、完全に執筆が止まってました。

てか、一番悩んでるのが希君の一人称なんですよね……。どうしましょ。

第3話 生徒会長

「ようこそ、生徒会へ」

茶化すように言葉を紡いだ希先輩。

先輩が開けてくれたドアを潜り抜けると、円卓のように囲まれたテーブルがあり、奥のテーブルに一人の青年が書類を睨みつけるように見ながら、声を掛けていた。

「希。いったい今まで何処に行ってたの？」

「ごめんて、エリチ。はい、これエリチの分の飲み物」

希先輩から飲み物……紅茶を受け取ったエリチこと生徒会長は一度、こちらに視線を向けた後、希先輩に戻し口を開いた。

「ありがとう。でも、エリチはやめてって言わなかった？」

「あはは……。そうやったつけ。まあ、ええやん。我ながら可愛いニックネームやと思ってるし」「まったく……。……で、彼女が例の子？」

「そうそう。新しく転入してきた片桐光莉ちゃん。今日、生徒会に挨拶に来たんやって」

紹介されたので生徒会長の前に立ち、自分の口から名前や学年を言い、挨拶に來させてもらった旨を伝えた。

「ふうん……」

今まで行っていた作業を終えたのか、または中断した生徒会長は席を離れて自分の真ん前にやって來た。距離はおよそ数メートル。

相手の顔が至近距離で見えるような距離感だ。

窓から差し込む光が反射し、生徒会長の持ち前の金色の髪が神々しく輝き、動いたことよって短く切り揃えられた髪がサァツとなびく、その光景が俺の瞳に映り込んだ。単純に綺麗でかっこいいと思う見惚れてしまったのかも、一時ですら視線を逸らしたくない。そう思ってしまった。

「生徒会長の『あやせえり 絢瀬絵里』です。よろしくね。光莉ちゃん」

「……かっこいい。あ、いえ。えっと、はい、よろしく願います！」

「褒めてくれてありがとう。でも、君も可愛いよ」

さすが『ラブライブ！』でイケメン枠に入っていただけのことはある。さらりと女の子が照れてしまうようなセリフを言えて、甘いセリフに加えて微笑を浮かべるとか……。女ったらしにも程がある。

原作では男ったらしでもなかったのに、なんでこんなことになってしまったのだろうか。

思わず心は男のくせに絵里先輩に心奪われそうになってしまったことに肩を落としている、絵里先輩はあれ……。というような戸惑いの表情を浮かべていた。

「今度来る転入生には、こういう挨拶した方がええんとちゃうかな。って希に言われたからしてみたのに」

——元凶はアンタか!!

恨みの籠った視線を希先輩に差し向けると、ごめんごめんとのはほんとした様子で会話に入ってきて来た。

会話に入る前にぼそつと言っていた言葉、俺は絶対に聞き逃さなかったからな。「赤面しながら睨み付けてくる光莉ちゃん、可愛い」って言ったの、絶対に忘れないからな。そして、覚えてろよ。

「うちが言ったんやないってゆーてるやん。カードが言うてるんや」

ズボンのポケットから取り出したタロットカードの束から一番上のカードを取り出し、こちらに見せてきた。けれど、俺にはタロットカードの知識はないからまっ

たくわからない。

「……まあ、希に言われたから仕方なく言ったわけじゃないことだけは覚えてて。君は普通に可愛いよ」

「あ、ありがとうございます。そう言ってもらえると嬉しいです。絵里先輩」

満面の笑みで答えると、絵里先輩は「え、絵里先輩？」と呟きながら顔を赤くした。

いきなり名前を呼ばれて怒ってるのかな……。

「え、えと、いけませんか？ 希先輩は希先輩って呼んでるので、絵里先輩も思ってたのですが……い、嫌なら、生徒会長って」

「いえ、構わないよ。ただ、ちょっと照れくさいなって、女の子から先輩呼びされること、もうないかなって思ってたから」

「うちもそれわかるかな。しかも、美少女やし。テンション上がるやんな」

そっか……。

中学校まではわからないけど、高校はここで男子校だもんな。女子から先輩呼びされることは十中八九ないよね。

「……あ、もうそろそろ時間が。じゃあ、私はこの辺りで」

「えー、もう行ってしまおうん？」

「ええ。ごめんなさい。穂乃果達にも呼ばれているので」

「あ、マネージャーになったんやっけ？」

本人ら以外には何も言っていないはずなのに、希先輩は何故知っているのだろうかと思っただが、何を言ってもタロットカードが原因のような気がするので無視をする。

生徒会室から退室しようとドアの方へ歩き出そうとした瞬間。

「え……」

腕を強く引かれ、後ろに引き寄せられる。

そして、手を引っ張った人に力強く抱かれ、身動きが取れない状態に陥った。

「絵里、先輩……？」

「行かせない。あんな夢物語を語っている人らの所に行っても、泣きを見ることになる。だから……」

おそらく絵里先輩の頭の中で浮かんでいるのは、幼少期にやっていたバレイ……じゃなくて、こっちの世界だとダンスになるのかな。で、挫折をしたこと、なのかな。

努力は必ずしも報われるわけじゃない。勿論、報われて欲しいとは思う。けれど、結果的に努力が報われるのは少数数の人のみ。

その少数数に入るにはより沢山の努力をしないと絶対に入れない。ましてや、『μS』は結成して早々だし、動きはまだまだ素人同然。

学校の未来なんて託せない。だから、音ノ木坂学院の名を語ってスクールアイドルはさせないって感じだもんね。

「……離してください」

「光莉、お願いだから聞いて」

「絵里先輩。私は『μS』に入ったの本当は嫌々なんですよ」

「え？」

「でもね。考えたら一直線に突っ走るあの人らを見てかっこいいって思ったんで

す。過去の偉人もそうですけど、成功して名前が残るのはいつもそうやって周りと違う意見を持った人らだし、実行力のある人らであって欲しいと思ってます」

抱き留められている絵里先輩の大きな手に、自分の手を添えるように置く。

今にも壊れそうなくらい小さく震えていた。

音ノ木坂学院の廃校問題をどうにかしたいんだけど、どうにも出来ない。そんな自分が歯痒くて仕方がないのかな。

仮にも自分が否定している『μs』は自分の方向性を見つけて歩みだしているというのに……。

『μs』のメンバーは皆、自分のやりたいことをやって、学校も救おうって考えます。そんな彼らを私はかっこいいと思います。……絵里先輩、正直に言います。今のあなたはかっこ悪いですよ」

腕の拘束が緩くなった瞬間を狙って、俺は絵里先輩の腕の中から抜け出す。

そのままの勢いで生徒会室のドアのところまで向かった。ドアを開け、廊下に一歩出した後、振り向かずに告げる。

「——だから、自分の答えを持って、自分のやりたいことをやって、私を振り向か

せるぐらいかっこいい先輩になってくださいね」

言いたいことをすべて告げた後、俺は生徒会室を後にし、教室に戻るために階段を降りる。

（ちよつとアドバイスし過ぎたかな……。原作、おかしくしちゃったかなあ）

音ノ木坂学院を護らないといけないという生徒会長の義務感だけで、動いている絵里先輩。片や自分のやりたいことをやって、ついでに音ノ木坂学院も護っちゃおうと考えてスクールアイドルという意見を持った穂乃果。

同じ音ノ木坂学院を救いたいという目的を持った二人なのに、どうしてお互いの意見を聞いて最初から協力しないんだらう。絵里先輩が意地っ張りってのはあるんだけど、どうして同じ目的なのに、話し合わないのか。

——『Ms』はやっぱりあの九人じゃないと。

（そういえば、『Ms』って九人の女神を意味してるんだよね。なんで、『Ms』って名前のままなんだろ）

第4話 不協和音

「そういえば、穂乃果が言っていた作曲家予定の西木野君って音楽室にいるのかなあ」生徒会室からの帰り道。ついでに勧誘が出来るのであればしておきたいなと思、俺は音楽室を探すことにした。

道行く度に、擦れ違う少年達からの視線が痛い。

好奇心で見る者、下心剥き出しで見る者、ああいう子を彼女にしたいなという待望の視線を向けてくる者。目立つ行為を率先して実行することを極端に嫌う俺は、足早にこの教室練を抜けて音楽室に向かう。

「……どこにあるんだろう」

数分後——。完璧な迷子になっている俺がいた。

ここに来るまでに何度も話しかけてくる男子がいたから悪いんだ。そんな人らに律儀に返事をしていたから、話しかけたら反応してくれると思ひ込んだ人達が多くこんなにも時間が掛かったとも言えるが。

「今日は諦めて、教室に戻ろうかな」

歩き出す方向を翻し、一步踏み出そうとした瞬間。

何処からか透き通る歌声とピアノの音が耳に入ってきた。

「この声って、もしかして……」

歌に導かれるように足はそちらに向かっていく。

この曲は音楽室から発せられている。ピアノの時点でそれを理解しているし、おそらくこのピアノを弾いている人こそが探している人だという確信もあった。

確かに会って話して『Ms』に入って欲しいとも思っている。が、この足が歩き出したのは自分の意志を介していない。自然と足がそちらに向かっていた。

会って話したいこと、言いたいこと、纏めてから会いたかったのに。歌声に手を引く張られているように一步また一步と近づいている。

早く話したいことを纏めないと。頭の中で思い浮かべようとしているのに、何も浮かばない。頭に入らずに残っているのは曲ばかり……。

『……さあ、大好きだばんざーい♪』

ドアの窓部分から中の様子を見る。すると、そこにいたのは予想通りの人物。

真っ赤な髪と綺麗な、それこそまるで宝石のような紫色の瞳が特徴的な少年が。その少年は周囲の景色が見えていないのか、俺の存在に気付いてないのかわからないけど、頭ん中の余計なものを削ぎ落とすように、一心不乱に歌っていた。

その声は扉一枚という遮蔽物を通してという状況であっても、綺麗に透き通っていた。

(……綺麗)

直接聴きたい。

その想いが次第に強くなり、音を立てないように扉をゆっくり開ける。

「——誰っ!？」

「あっ、ご、ごめんなさい。お邪魔してます」

扉を閉める際に少し物音を立ててしまい、その音に反応した少年が演奏を中断し、こちらを睨み付けるように見てきた。

最初に俺を見た際に驚愕の表情を浮かべたような気がするが、気のせいだよな。

「え、えっと、二年の片桐光莉です。よろしくね。西木野君」

「……名前、誰から聞いたんですか」

「穂乃果……ううん、『MS』から聞いた。私、『MS』のマネージャーになったから」

隠し通して仲良くなってから『MS』に勧誘しようと思っていたけど、そんな騙し討ちみたいな真似をしたくないので、最初から打ち明けることにした。

『MS』の名前を出したことで「あー、やっぱり」といった表情を浮かべるようになったが、このままいくしかない。

「お願い！ 西木野君。あなたの力が必要な、『MS』に入って」

「お断りします。第一、片桐先輩がそこまでする必要はないと思いますけど」

「……そうだけど。やっぱり、諦めきれないよ。あんな綺麗な曲を聴いてしまったのだから」

心の奥底にまで響くような綺麗な歌声。

やっぱり、『MS』には彼の力が絶対に必要だ。

「先輩。どうしても俺に入って欲しいんですか？」

「え、う、うんっ！ 入ってくれるのっ!？」

俺の熱意があのお真姫に届いたのだと、嬉しくて本人もびっくりの速度で真姫の近くまで寄り、手を握ってしまう。

「……ええ。でも、俺が『μs』に入ることでもメリットが欲しいなと」

「メリット？」

楽しい学院生活を保障する。とかじゃダメなのかな。

『μs』は絶対にこの音ノ木坂学院を守る。だから、後輩が出来るし、楽しい高
校生活を送れるようになるし。

「例えば……」

「えっ……。ちょ、ちょっと」

一つ下の後輩であつても、やはり力強い男なんだと思わせるような力で強く抱き
寄せられる。

こんな光景前にもあつたなあ、と他人事のように思ってしまう俺はおそらく女と
してはダメなのだろう。全然、ドキドキもしないし、何より自分の体だと思ってい
ないからかも知れない。俺じゃない『片桐光莉』がこんな目に遭っているそう思っ
ているから、他人事のように感じてしまっているのかも。

「光莉先輩が俺のモノになってくれたり、とか」

だからといって、恥ずかしい目に遭わされて恥ずかしくならないなんてことはない。抵抗出来ないように両手を防がれた挙句、耳元で囁くように言われた台詞に俺の精神はノックアウト寸前になった。

俺の奥底に秘めている『片桐光莉』の部分がココアにスティックタイプの砂糖を五本ぐらい入れたと同等な甘さを持った台詞に反応しているのが手に取るようになる。

「……なんてな。俺は絶対にあの人のグループには入らないよ。例え、君みたいに可愛い子から勧誘されたとしても」

口説かれた過去がない俺は、真姫の妙に慣れた口説き文句や愛でるように頭をなでる手付きに呆けていると、足早に音楽室から出ようとしている音が聞こえ、急いで真姫の手を掴む。

「っ！ま、待って!!」

ギリギリ真姫の制服の袖口を掴むことが出来た俺は真姫の口から言葉が発せられる間もなく、次の言葉を放つ。

「もし、これを見て、ほんの少しでも『M.S』に興味を持ってくれたなら、来て。早朝は『神田明神』で、放課後は基本的に屋上で練習してるから。……待ってる」

歌詞の書かれたメモの切れ端を真姫のポケットに強引に入れ、掴んでいた袖口からすっと手を退けて、颯爽とその場から立ち去る。

年頃の少女のような行為を自分がしてしまった羞恥心と、このチャンスを逃したらもう二度と巡って来ないかもという虚無感がごちゃごちゃになって訳がわからなくなつて、気付いたら体は勝手に動いていた。

「あれ、遅かったんだね。おかえりー」

「……た、ただいま」

二年の教室に戻って来た俺を迎え入れてくれたのは、『M.S』の三人だった。

教室から出た時と今の自分。見比べて色々と相違点があることに気が付いてしまったのか、穂乃果達はお互いを見合い、代表してことりが口を開いた。

「なんか顔赤いよ。どうしたの？」

「あ、えっと、な、何でもないっ！ ささっ、練習しよー！」

追求されないように自分の鞆を持ち、そそくさと教室を飛び出す。

今日の練習場所は『神田明神』の一部を借りて行うことになっているので、穂乃果とことり、海未に捕まらないように一生懸命に逃げ去る。

(……ほんと、どうしたんだろ。俺)



校内の三階――。

校門に向かって走り去る一人の少女と三人の少年を見下ろすように、眺めている少年がいた。

彼の視線に映るのは、たった一人の少女だけ。

あれからずっと頬を赤くしたままなのか、真実は本人以外誰も確認する方法を知らない。けれど、それを見ただけでも少年の心は揺れ動いた。

「本当に可愛いな。光莉先輩は」

今までずっと見ていたメモの切れ端を懐にしまいながら呟く。

普段クラシックやジャズしか聴かないし、弾かない少年だったが、彼女の為だったらアイドル向けの曲を作ってあげても良いかなとメモの切れ端——歌詞を読んでいた。

本人が歌詞を考えたわけではないだろうけど、始まりを告げる歌には心が惹かれつつあった。

この音ノ木坂学院にスクールアイドルを設立して、廃校という暗い未来が待ち受けていたとしても、新しい道を切り開いてみせる。そんな歌——。

「……良いよ。この真姫君が君達に最高の曲をプレゼントしてあげよう」

(けど、惜しかったなあ。あのまま口説いてたら俺のモノになってくれてたかも)

ま、あれが最初で最後のチャンスだったってわけじゃないし、もっと仲良くなつてからにしよう。自宅への道程をゆっくり歩きながら、真姫は微笑を浮かべた。年頃の少女の視界に入っていれば、十人中十人は絶対に見惚れてしまうだろうという優しい微笑み。

『μs』に捧げる最初を告げる曲の構成を考えると同時に、思い浮かべてしまうのはやはり光莉先輩の姿。

今までにないタイプの少女に心奪われていたのは自分の方かも知れないな。と、真姫は思った。

(……最高の曲をプレゼントするよ。光莉先輩)

【問題】不協和音とは、二つ以上の音が同時に出された時、全体が調和しないで不安定な感じを与える和音のことですが、このサブタイの『不協和音』は、何を示すでしょうか？

答えがわかった方もわからなかった方も口を閉ざしてくださいよ。
決して真姫ちゃんが作る曲がこれに関係するとかはないですからね!!

そして、物語の方ですが、いかがでしたでしょうか。

作者推しの真姫が出てきましたが、ちょっとチャラ男っぽいですかねw

μ'sに関わっていく中でメンバー全員が少しずつ変わっていきますので、今はこれでも勘弁してください!!

しゅ、終盤になったらきつと変わりますし……（たぶん）

第5話 状況整理

お知らせ。

作者名を『神無月司』から『片桐奏斗』に変更しました。

理由としましては、この小説らを通して読者の方々とラブライブの話をTwitterでしたいと思いアカウントを新しく作ったからです。

Twitterアカウント ↓ @kanatokatagiri で、検索のほうよろしく願います。作者のページに飛んでいただくとURLを貼っていますので、そちらでも。

小説の執筆状況や更新情報も呟いたりする予定なので、是非ともフォローしてください。ださるとうれしいです。

とまあ、作者の事情を長く語ってしまいました、第5話、ごゆるりとお楽しみください。

「ただいまー」

『神田明神』の境内の一角を借りて練習を行っていた俺らだったが、結構な時間になったので解散して帰宅した。

いつも欠かさず行っている挨拶だけど、正直に言っている意味があるのかと聞かれたら、ないと即答出来る。

俺こと『片桐光莉』は一人暮らしだ。

原作の希もそうだが、高校生という年頃の少女が一人暮らしなんて危険がいっぱいで恐ろしいと思うのだけど、どうなのだろう。慣れてしまったら気楽で、誰の邪魔も入らないで自分の時間は多く取れることは確かだ。

でも、その分、自分がしないといけないことが多くて大変で生活費やらも稼がないといけないし面倒なだけだと思う。

俺の場合、家賃は両親が払ってくれているらしく、生活費として月にいくらか貰っているの、必要なのは夕食などを作る時間や洗濯といった家事をきちんと出来るスキルさえあれば問題はない。

「……はあ」

自室に入った瞬間、鞆を落とすようにその場で手を離し、上着のみをハンガーにかけ、制服のまま、ベッドに寝転がる。

ベッドはポスンという音を立て、俺を包むように丸くなる。

こんなにも疲れている理由は、練習がきつかったからでもなく、マネージャー業に疲れたわけでもない。

理由はたった一つ。

それもこんなに行く先々で起こられると、いくら俺でも精神的に疲れてくる。

転入して直ぐにスクールアイドルのマネージャーに勧誘され、ことりに押し切られマネージャーを引き受けることに始まり。放課後に生徒会室に向かおうとした最中には、周囲の目線を気にして早足で階段を駆け上がる際に転落間際の所を副会長である希先輩に助けられ、セクハラされて。生徒会室では平穏な……時間を送ったっけなあ。絵里先輩に抱き締められた気がするから、ね。

生徒会室からの帰り、穂乃果達に言われた作曲家予定の真姫に会いに行った時は、俺のモノ発言されて少しドキっとした。

「年頃の少女か、っての」

度重なる乙女ゲーム的展開をその身で感じ取って、『片桐光莉』の部分が反応してしまった。というのが、俺の持論で、真相はわからないし、理解したくもない。何時見たのかわからないけど、肉体に精神は引っ張られるという話を目にしたことがある。誰が書いた本だったのか、誰の言葉だったのかは覚えてないが、仮にもし、アレが『片桐光莉』の身体に俺の精神が引っ張られたのだとしたら……。

今までは耐える事が可能ではあったが、これから起こる事、全て耐えられるとは限らない。現に最後の真姫の所では俺の精神はノックアウト寸前だった。

ギブアップという選択肢があったのなら、俺は潔く白旗を振ろう。そんなレベルまで至っていた。

『ボクは君が良いんだ。君以外の誰かがマネージャーなんて考えられない。……光莉ちゃん、お願い』

『間に合って良かったなあ。お姫様』

『行かせない。あんな夢物語を語っている人らの所に行っても、泣きを見ることになる。だから……』

『光莉先輩が俺のモノになってくれたり、とか』

「にゃーっ!! なんて、よりもよって思い出すのがそこなんだよ。俺のバカっ!!」

頭に敷いていた枕で思い出して赤くなってしまった顔を隠す。誰に見られている

わけでもないが、咄嗟に隠してしまった。

今まで男として生活していたのに、こんなにも男相手に動揺するなんて……。

俺はホモじゃない。と念仏のように呟く。

この世界では法律上認められた関係だ。けど、それは相手側や法律上の問題。俺自身の意見を言うならば、精神的には男なだけに、恋人を作るつもりはない。両親には悪いけど、孫の顔なんて見せるつもりは更々ない。

誰が好き好んでホモにならなくちゃいけないんだよ。

「……でも、必要とされるのは嬉しいんだよね」

少女らしい可愛い鏡に映る俺が視界に入る。

枕で少し口角が上がってしまっている口元や、やや赤く染まっている頬を隠している少女。

それが自分でなければ、「可愛いなあ。こいつ」とか思っちゃうだろう。いや、確実に思う。けど、自分だと思ったら、なんで必要とされて照れてるの。と思ってしまうのも、人間の性だろうか。

「嬉しいけど。俺は……」

“紛い物”だから。

誰とも一緒にいてはいけけない。幸せを感じてはいけけない。

俺は精神的には男で、外見は美少女に当たるが所詮は紛い物。外面だけの偽物。

(それに……)

前世であったことが頭に浮かび上がりそうになり、頭をブンブンと勢い良く振り回し、邪念を払う。

今はそんなことを考えている場合じゃない。

「……もう、寝よ。疲れた」

ベッドに横になり、電気を消灯する。

意識が混濁としていき、自然と頭の中は真っ白に染まっていく。何も考えずに入れる唯一安らげる空間に向かった俺は、そのままゆっくりと休息を取った。

地域で起こっている事件を通知設定にしているスマホが勝手に情報を受信し、画

面に映し出されているのに気付かず——。

『神田町にて、現在も不審者が現れております。年齢は中年の男性で、ホームレスらしく、一人住まいの女性のマンションや一軒家に滞在する模様』

※作者へのインタビュー（自演）

Q ラブライブのキャラが一切出てこない件についてどうお考えでしょうか？

A し、仕方ないじゃないですか。繋ぎとしても一話欲しかったんです。……

ほら、主人公可愛いでしょ？ ってことで、許してください（懇願）

第6話 にこりんぱな

「さーて、今日も頑張ろー！ ことり君、海未君」

「穂乃果、学校へは勉強の為に来ているという事だけは頭に入れておいてくださいよ」

「あははは……。さすがに授業をほぼ寝て、練習にだけ力を注ぐのはちょっと、ダメかな」

「ちょっと、所ではありませんよ。ことり」
次の日の放課後。

ほぼ一日の授業カリキュラムを寝て過ごしていた穂乃果を咎める海未、そして、その海未と穂乃果の仲裁というか間に入ろうとすることり。そんないつもの構図を視界の端で捉えつつ俺は準備をする。

穂乃果がスクールアイドルの活動に積極的になっているのも、わからないでもない。あの真姫がたった一日で曲を完成させてくれるなんて思わないのだから。

伊達に作曲の才能が開花している天才。歌詞を見ただけで、作曲してくれるなんて、ね。

「今日ぐらいいいじゃん。それよりさ、皆で聴こうよ。この作曲してくれた曲を」
「うーん。じゃあ、屋上の方がいいよね。音楽聴くのに邪魔もないし」

「そうだね。ボクも早く聴きたくてうずうずしてるから」

「実は僕もです。僕が書いた歌詞でいっただんな曲になってるのか気になりますし」

穂乃果の提案に俺は場所を提示し、皆が納得してくれたので、屋上で真姫が作曲してくれた曲を聴くことになった。

彼らは少し準備や用事で遅れるという事だったので、自分だけが先に屋上へ向かうことになり、教室を出た。

『μ's』の三人が遅れるとあっては、練習しても意味がないという事なので、俺も何処かで時間を潰してから屋上に向かうようにしよう。

「作曲してくれた真姫君にお礼でも言いに行こうかな」

本人は違います、とか言いそうだけど、やっぱり言いたいもんは言いたいから良

いよね。

思い立ったが吉日、俺は一年生の教室へと足を進め、教室に入っていく。

急に入って来た先輩……しかも、この音ノ木坂学院で唯一の女生徒という事実も組み合わさって、注目度が半端なく多かった。

「ごめんなさい。西木野君っています？」

「西木野君ですか？ 彼ならもう帰ったと思います」

正直に言っ、今ここにいる中でかっこいい部類に属する橙色の髪を肩口で揃えている少年が答えてくれた。

おそらく俺の想像が間違っていないければ、この男子が『ほしぞらりん星空凜』で間違いないだろう。隣に『こいずみはなよ小泉花陽』らしき影もあるし。

「ありがとうね。あ、自己紹介がまだだったね。私は片桐光莉。君達は？」

「凜。星空凜です」

「あ、ぼ、ぼくは小泉花陽って言います」

「凜君に花陽君ね。うん、覚えた。じゃあ、またね」

ここに真姫がいなくなれば、ここに俺がい続ける意味もないと颯爽に教室を出

ようとすると、後ろから「待ってください」と声が掛かる。

さっきまで会話していた凛ではないとすれば、声を掛けてきたのは一人しかいない。

「あ、あの、片桐さんは『μs』のマネージャーなんですよね？」

「うん。一応はね」

「頑張ってくださいね。応援しますから」

『μs』という名のスクールアイドルはまだ我が校であつても浸透していないと思っていた。けど、それでも日頃の努力を目の当たりにしている人からは声援が来る。

本当ならこの言葉を直であの人らに聞かせてあげたい所だけど、俺からこんな声明が届いたよと伝えておくことにしよう。穂乃果辺りが積極的に練習だー！なんて声をあげそうな気がするな。

「ありがとう。じゃ、頑張ってくるね」

満面の笑みで返事を返すと、凛と花陽。二人して頬を赤くして絶句した。

俺の何かを受け入れられなかったのだろうか。なんて事を考えながら、足早に退

室することに……。



「まだ、屋上に行くのは早いかなあ」

一年生の教室で応援のメッセージを受けて、少なからずテンションが上がった俺は、階段をゆっくりと上っていた。

慌てて駆け上がって、昨日みたいに転落しそうになるなんてもう嫌だから。それに、誰かに助けられて、落ちる前に抱き留められるなんて少女漫画的展開も正直避けたいし。

「……有名になるには、色んなことしないとダメかな」

『A・R・I・S・E』みたいにイベントでCDジャケットにサインを書いたり、サイン

ボールの受け渡し会とか色々。

彼らのサインボールの受け渡し会は凄かったなあ。流石男子って感じの距離でも届かせるんだから。

「あ、サインボールで思いだした。あのサインボール何処にしまったっけ」

踊り場付近で誰かと擦れ違ったが、特に気しないままに階段を上ろうと足を掛けた時に呟く。

「A・R・I・S・Eのサイン入りだから、ショーケースの中かな」

「あなたっ！」

階段を上ろうとしていた足が声を掛けられた瞬間に止まる。

誰が声を掛けてきたのかと気になって、視線を動かすとさっき擦れ違った黒髪の男子だった。結構、髪は短めに切り揃えられていた。

「今、A・R・I・S・Eのサインボールって言わなかった？」

「あ、はい。言いましたけど」

その少年は間近にまで詰め寄ってきて、俺の手を真剣な面持ちでギュッと力強く握った。

身長がそんなに変わらないだけあって、そんな表情を浮かべながら至近距離まで詰め寄られたら少し照れる。

「お願い！ そのサインボール譲ってくれない」

「……別に構いませんが、今は何処にしまったのかわからないですよ？」

「ああ。見つけたらでいいよ。お願いしてもいい？」

「ええ、良いですよ」

「良かったあ。どうしても外せない用事と重なって入手出来なかつたんだよな」

俺の物ではあるが、俺の物でないサインボールだし、別に渡しても良いよね。

サインボールを受け取ったのもただの偶然で、偶々近くに立ち寄った際にサインボールの投げ渡しが行われていて、手にしたただだから、そんな俺が持っているよりも、ファンの人が持っていた方がサインボールも嬉しいはずだ。

「じゃあ、持ってきたら渡しに行きますね。え、えっと……」

「三年の『矢澤やざわにこ』だ」

「にこ先輩ですね。私は片桐光莉です」

「ん、光莉。持ってきたらオレの所まで来てよ。約束な」

わかりましたと律儀に俺の返事を聞いてから、階段を下りていくにこ先輩の背中を見てから、自分は階段を上がる。

屋上につくと、既に三人が集まっており、パソコンを囲んでいた。

「ほら、光莉ちゃん。早く早く」

「用事があったんじゃないの。もう！」

自分よりも先に誰か一人ぐらいはついてるだろうなとは思っていたが、三人全員が揃っているとは想像も付かなかった。それだけ、全員が全員、スクールアイドルに賭ける想いは違々と行動が示していて、俺は少しだけ嬉しくなった。

だからだろうか。いつもは絶対にしない行為をしてしまったのは。

「ひ、光莉ちゃん？」

「んー？ ほら、早くしよ。穂乃果」

後ろから穂乃果に抱き着くように、出来るだけ近くによって曲を聴きたいと思っ
て行動したのだが、穂乃果は何故か再生ボタンを一向に押そうとはしない。逆に何かに動揺して身動きが取れなくなったみたい。

何に動揺しているのかはわからないけれど、じれったくなった俺は穂乃果の真後ろからノートパソコンを操作して再生ボタンを押す。

場所を動く気にもなれず、穂乃果の肩に顎を乗せる感じのまま静止する。

俺の頭や耳は既に曲の方に意識がいつている。おそらく穂乃果もそうなのだろう。画面を見続けたまま止まっていた。

「これが……」

「ボク達の」

「始まりの歌」

産毛の小鳥を『μ's』に例え、空をスクールアイドル界を現している。スクールアイドルの世界を『μ's』という名の小鳥が飛び立つ。

今はまだ始めたばかりで、小さな翼だけど、実力をつけて場を踏んでいくことで成長し、大きな翼になり、力強く飛んでいく。何処までも……。

「あ、見て！」

曲の途中だけど、ノートパソコンの右下にランキングが表示された。

音ノ木坂学院スクールアイドル、『μ's』に一票が入った。今はまだランキングが最底辺でたった一票しか入っていないスクールアイドルだけど、いつかはきっと名を残すスクールアイドルに――。

第7話 練習開始

「三人ともいくよー！」

階段の一番下に待機している三人に対して、最初に声を出して一拍置いてスタートの笛を吹く。

合図を耳にした瞬間、三人は綺麗なスタートを切り階段を駆け上がる。

早朝の神田明神で俺達は、練習を行っていた。

真姫が作ってくれた曲を聴いて、スクールアイドルのランキングで票が入ったことで、より一層やる気が出たのか三人ともに練習の効率は上がっている。

穂乃果に至っては今までの階段ダッシュよりもタイムが縮まっている。他の二人もタイムは縮まっているし、それでも納得や妥協は一切許さない雰囲気纏い、ストイックに練習に取り組む。

「……よしっ!!」

階段の頂上に到着した穂乃果は、小さく声をあげた。自分でもタイムがさっきよりも縮まっていると自信があるのだろう。そう思い、タイムを見てみると、これまでのタイムはすべて手を抜いていたのではないかと思えるぐらいの記録が出た。

「ほ、穂乃果……。これ」

「んー？」

穂乃果がゴールした今でも階段を駆け上がっている真っ最中の海末とことりを傍目に、穂乃果にタイムを見せる為、タイムウォッチの画面を向ける。

画面が小さいので、必然的に見るのに近づく必要があるのだが、走った後で汗だくなのに、良い匂いを周囲にまき散らかす穂乃果。

そんな彼との距離感にドギマギしながらも、マネージャーとしての業務は捨てない。

「自己新更新した実感はあったけど、ここまですは」

「うん。このままいけば、結構な所まで行くんじゃない？」

「そうだね。陸上部じゃないけど」

彼の一言にくすりと笑っていると、言っている間に海未がゴールし、続いてこともゴールした。

記録は穂乃果程極端に上がってはいないが、それでも少しずつ練習の成果は出ている。

「……穂乃果、早すぎだよ」

「ホント、どんなに早くなるのー。ボク達、陸上部じゃないよ」

一生懸命に自分達なりに穂乃果について行こうと必死に足を動かしたのだろう。階段ダッシュを本気で行った後の二人は体力的にバテて、地面に座り込んでいた。休息を取っていることが放った言葉は偶然にも穂乃果が言っていた台詞とほぼ似ていたので、俺はくすりと口角が上がってしまった。

ただのスクールアイドルが一見陸上部に思えるようなトレーニングをしているなんてね。

「あはは……なんかね。真姫君が曲をくれた瞬間からやる気が溢れてきて、ね」
「だからといって、早くなるわけじゃないんだけどな。理論上では」

やる気イコール結果に繋がることはあまりないケースだ。

穂乃果のようにやるつたらやる。という性格であつても、実際に記録を更新出来るかと聞かれれば、調子が良ければいけるかも知れない。と返すだろう。絶対に出来ます。と答えてしまえば、記録更新しないといけないという使命感に駆られ、自分の力を発揮出来ないし、かといって無理です。と思つてしまえば、気持ちがネガティブになり本来の力が発揮出来ない。あくまでも自論ではあるが。

「それにしても、曲が提供されたなら密かに練習していた振り付けと新規で追加した振り付けを特訓しないとね。振り付けやポジション移動を纏めた紙は常に常備してね。完璧にしてもらうから」

「はいっ！」

「わかりました」

一緒に振り付けを考えてくれたことりはもう新しい振り付けの型は暗記している。彼女今しないといけないことは、微調整だ。ダンスの際に右手の角度は何処まで上げるか等といった調整であり、それは全員で合わせなければわからないもの。「ことり。最初から振り付けを通してみて」

「オッケー」

休憩を終えたことりは立ち上がり二人の前に出る。

曲が始まって最初の振り付けを左右反対で披露して、こちらへ視線が送られてきたので、「反転で踊ればいいの？」という問いかけだろうと考え、頭を横に振る。

「これが一通りの流れになる。ポジション移動とかはある程度こう動くという情報でしかないから、合わせてみないとわからないし変更する可能性が高い。まあ、そういうのは一つずつダンスを覚えてからにしようね」

二人に対して言葉を放ってから一通り踊ってくれたことりにお疲れ様、休む。と声をかける。当然ことりは踊るよと参加の意を示した。

次はここを気をつけたらいいよとアドバイスをを行い、最初の振り付けの練習に入る。

今の彼らには一つ一つの振り付けに時間をかけて完成度を高くする余裕はない。

ライブまで後三日。

曲を作ってもらうまでに時間がかかり過ぎた。別に真姫のことを悪くいうつもりはない。だが、振り付けに使える時間が限られていることは確かだ。

今は完成度を高めるのは後回し。全体を踊れるようにしなければならぬ。

(前日までの時間は徹底的に練習をさせて、前日にライブの宣伝の為にチラシ配り。当日の午前中は最終チェックして、リハーサルもして本番、かな)

アニメでは海未が極度の恥ずかしがり屋であったが、こっちではそこまで酷くないので、チラシ配りに時間を使いまくる必要性はないだろう。

(……例え、結末を知っていたとしても。俺は)

※主人公のネガティヴ度が20%上がった。的な回ではありましたが、特に進展も発展(恋愛的な意味で)もない回でしたね(笑)

次回は時間を進めてライブ本番にする予定です

第8話 START…DASH!

ライブ当日——。

「あー、緊張するー！」

「ホントにね。海未君じゃないけど、心臓バクバクだよ」

「二人とも、僕をバカにしているんですか？」

授業を全て終えて、逸早く教室を飛び出した俺らは校門前の校庭でチラシ配りを開始する。他所では部活動の勧誘が行われていた。

一年生に向けた部活動紹介が行われる日程なのだから、本格的に活動するのは当然。だが、その部活動紹介が終了した後には講堂を借りて、初ライブを実行する。

「本当に衣装合わせとかしなくていいの？ ビラ配りは私一人でもいいよ」

「光莉ちゃん一人に任せられないよ。俺らのライブだし、俺らも手伝いたいんだ」「そうですよ。それに僕も人前になる練習しておきたいですし」

男子校で女子がビラを配ると注目度も高いし、お客さんもより入場してくれると

思うんだよね。だから、原作時のライブは観客は誰もいなかったが、今回はお客さんが入ってくれてもおかしくはないと思うんだよね。

段々と増えてくる『μ's』のメンバーしか客としていなかった。

「……お客さん、いっぱい来てくれるといいなあ」

ことりが呟いた一言が地味に俺の心に突き刺さった。

原作の結果を知っているだけに、自分が何かしらの行動を取らないと絶対に観客は入ってくれない。

そんな重圧と責任感に押し潰されそうになる。

(俺は、μ'sのために何もしてやれないのか……)

未来を知っているが故に、ここでストップをかけて引き返した方が良いんじゃないのかという声が頭の中に響き渡る。

ここが原作と一緒にあれば、スタートからこける。けれど、所々だけ違うパラレルワールドであった場合を考えると動けない。

何が最善なのかわからない……。下手なことをして、取り返しをつかないことになつたらどうしようもない。

「よし、そのためにも今はチラシを全部配ろう！最後まで残った人、ジュース奢りね」

そうやって元気よく駆け出す穂乃果。

勝手なことを言い出して、率先してチラシを配って量を減らしていく。勝負を実行してすぐにセコイ技術を使い始めた穂乃果を軽く罵倒しながら、海未とことりもチラシを配り始めた。

……俺？

俺は話しながらも通りすがりの人に一枚ずつ渡していたよ。誰も気付いてはくれない程、さり気なく、ね。

言い出しっぺが負けるというのは結構面白いことだと思うので、俺はさっさと配り終えてことりと海未の手伝いにでもまわろうかな。

声を出さなくてもニコツと微笑みかけただけで、相手は頬を赤くしてチラシを受け取ってくれるから楽だわ。

穂乃果達の様子を窺ってみるに、ことりが一番早くに配り終えることが出来そう

だな。

どこでそんなにも早くにすべてを配布出来るのか、技術を教授してくれる場があるなら教えて欲しい。

「お疲れ様ー。ほら、後は俺達に任せて」

「みんなはステージ衣装に着替えて、講堂のステージに集合してね。リハーサルするから」

ことりと俺の両名は制限時間以内にすべて配布出来たのだが、穂乃果と海未だけは少し残してしまい、罰ゲームでジュースを買うのは穂乃果と海未になった。

言い出しっぺは負けるの法則だね。ただし、周りを巻き添えにして。

スクールアイドルに協力的なクラスメイトが穂乃果達を呼びに来る。おそらく穂乃果の親友三人組がリハーサルの準備をそそくさと行っていたが完成したのだから。

「……じゃあ、私はこれで。三人ともライブ頑張ってね」

「うん」

「はい」

「じゃあ、光莉ちゃん。またねー」

また、後で。そう一言だけ告げて、俺は校舎の方へ足を進めている三人の背を見送る。

最初に会ったときよりも一段と遅しくなったその背を見て、俺は物語が進んでいくのだと時間を得た。

「みなさん、これから講堂で音ノ木坂学院が発祥のスクールアイドル『M.S』がライブをします。良かったら見て行ってください！ お願いしますっ！」

一年生を対象にチラシを配布しまくってはいるのだが、あまり結果はよろしくない。受け取ってはくれるが、街角のティッシュ配りのような雑さ加減だ。

「お願いしまーす!!」

「あれ、先輩。無茶苦茶可愛いじゃないですか」

チラシを持った俺の手ごと引っ張ってきた男子が一人。

俺は手当り次第にチラシを配って、ライブに来てもらう人を少しでも増やしたいんだ。そのために手っ取り早く、この変な男子を追い払わないと。

「いやっ、離してください!!」

「……いやつて。俺も音ノ木坂学院の生徒なんだけど。不審者みたいな扱いはやめてよ。先輩♪」

勢いよく懐に引き寄せられ、咄嗟に手に持っていたチラシを手放して、男子との距離を作ろうと必死に押し返す。が、所詮女子の力。とても育ち盛りの男子を押し返すには至らなかった。

これから俺と一緒に運動部回ろうよ。それで、マネージャーしてよ。と身勝手な発言をした後輩に付き合うしかないのかと諦めかけたその時――。

「その辺にしときなよ。彼女、嫌がってるじゃん」

「……げっ、西木野」

俺の腕を掴んでいた後輩男子の腕を強く握り、激痛を送ることで解放させた真姫。

フリーになった俺は、後輩男子から一気に離れて真姫の後ろに身を隠す。確かに時間は空いているけれど、アンタに付き合うぐらいなら、真姫に付き合って色々

回った方が絶対に幸せな気がするから。

「なんだよっ！ お前には関係ないだろ。女も金も何不自由ないお前に、俺の気持ちなんてわかんないだろ!!」

「ああ、わかんないよ。でも、だからといって嫌がってる女子に強要すんのはお門違いなんじゃないか？」

真姫はやはり一年生という同じ学年であっても、一目置かれている存在なのね。進んで自分からコミュニケーションを取らないし、家柄もあって憎まれたりするのかもな。

お金持ちイコール出会いの場もたくさんあって、異性と交流出来るもんな。しかも、許嫁がいてもおかしくないレベルだし。

(……許嫁、か。真姫にいるのかな)

原作ではいなかったけど、こっちもないとは確定出来ないもんな。

しかも、こんなにかっこよくて、少女漫画で良くあるような俺様王子様系であっ

たならば、世の中の女子ならキュンとしてもおかしくはない。

それで、西木野総合病院というネームバリユーもあるわけだし。次期医院長もほぼほぼ確定ではあるだろう。そんな彼が、モテないなんてあるわけない。

(でも、なんでかな。真姫に許嫁がいると思うと心が痛い)

心臓に何かが深々と刺さったのじゃないかと錯覚するぐらいに痛みがジンジンとくる。

何らかの病気なのかな……。これがもしも、病気であったならば、真姫は“私”の為に看病してくれるのかな。ちょっと恥ずかしいけど、診察とかも。

(え……??)

——俺は今、何を考えた？

そんなこと、今は考えている暇なんて一切ないのに。

幸せになりたいなんて一回も考えたことないのに。なんで……。

「……光莉？　どうかした」

「あ、い、いや。何でもないよ。それよりもありがとう、助けてくれて」

「気にしないで。それよりも、早く行った方が良いんじゃないか？」

真姫が呟いた一言は俺を駆り立てた。

“一年生の様子をこっそり見てたけど、講堂に向かう人は誰一人としていなかったよ”

「っ!! 真姫、ありがとう!」

一目散に人混みを駆け抜けて、講堂へ向かう。

開演時間まで残り数十分。出来る限りの人を勧誘しようと頑張っていたけど、結果は芳しくないことを真姫から聞いて、穂乃果達の傍に優先することを優先した。

もう今から悪足掻きをしても、観客が増えることはおそらくない。なら、彼らの

心が折れ掛けた時、傍にいて助けてあげるマネージャーでないと。

ライブ会場である講堂についた俺を迎え入れたのは、一切の音が聞こえない無音の空間。

「うそ、でしょ……」

本当に誰一人としていない真っ暗闇な空間。

マネージャーである俺ですら目を疑いたくなるし、辛くて目尻に涙が溢れてきそうになる。あんだだけ頑張って練習もいっぱいしたのに、誰も頑張らずら認めてくれない。

こんなの残酷過ぎるし、絶対に穂乃果達に見せたくない。

ここはパラレルワールドなんだし、原作を変えてでも良いから絶対に中止させ

る。そう思って、舞台上がろうと足を動かした瞬間――。

無残にも舞台のカーテンが開けられる。

観客が誰もいない講堂を見渡して、彼らは絶句する。

満員御礼とまではいかなくても、数人ぐらいいはいてもいいと思っていたのに……。淡い希望が音を立てて崩れていく。

三人とも、見るからに残念で悔しい想いを表に現していた。

「穂乃果、海未、ことり……」

「ごめん。俺らも結構、チラシ配りとか手伝ったんだけど……」

「誰も来てくれなかった」

一緒に手伝ってくれたクラスメイト数人もその場にはいたが、観客ではなくて関係者。

この場に観客は一人すらない。

「……そ、そりゃそうだ。世の中、そんなに甘くない」

明るい声音で言った穂乃果だが、表情は辛そうだ。

ここで崩れてはいけなさと自分を厳しく叱咤しているのがわかる。

どんな手を使ってでも、俺が頑張っていればこんなことにならなかったのに――。

原作通りにいけばこうなることを知っていたのに、何も出来なかった。

「……っ」

本当なら曲を歌って踊る予定だったけど、誰もいないんじゃする意味がないよね。という満場一致な意見で、中止しようと作業をし始めたその時。

講堂の扉が開かれ、一人の少年が入って来た。

「あ、あれ、ライブは？」

「花陽君……」

息を切らしてここまで駆けつけてくれた花陽のおかげで、穂乃果達の表情はやる

気に満ち溢れたものへと変わり、ライブを開始することにした。

「花陽君。まだライブは始まってないから安心して」

「あ、ありがとうございます」

ライブが見やすい特等席へと花陽を誘導し、自らもライブを堪能するために壁に凭れる。

俺は観客ではなくて、マネージャーという立場でここにいる。そういう意思表示のためだ。俺が仮に観客席に座ることになるとすれば、それはマネージメントとしている方ではなく、観客として『μ's』を楽しみたい。そう思った時だ。

『μ's』のスタートの曲が始まり、講堂は暗転し、彼らはスポットライトで照らされる。

真姫が作ってくれた曲を基盤に、海末が書いた歌詞を歌い、ことりが描いた衣装を着て、自分達で考えた振り付けをする。

全部、自作の完全なオリジナルをこれが練習の成果だと言わんばかりに『μ's』は披露していく。それは多少振り付けが間違っていたり、有名なアイドルと比べた

らお粗末なものかも知れない。けど、それらはここにいる全員の心に響いていた。

——純粹にアイドルに憧れている引っ込み思案な少年に。

——アイドルに興味を持っていなかったが、親友を追いやってきて、『μs』引き込まれた少年に。

——素直になれない少年に。

——同志に裏切られた経験を持つ少年に。

——何もかも見透かしているように神様のように『μs』の未来を見守っている少年に。

彼らの活動を潰そうとしている少年にすら、今の『μs』の歌やダンスは心に

くるものがあつた。

「……俺、やるよ。今はゼロからのスタートだけど、もう二度と手抜きはしない」

こんな気持ちに彼らをさせたくない。

俺が手を抜いて、後悔するのが俺だけだったなら別に構わない。けど、俺が手抜きして、結果が『μ.s』に関わるのであれば、もう二度と手は抜かない。何事でも全力でやる。

(——もう、絶対に彼らの表情を曇らせたくはない)

第9話 まきりんばな

「あ、ありがとうございます」

自作の曲を嫌な顔せず歌って踊り切った少年らを迎え入れたのは、数少ない拍手音の発生源は非常に少なく、講堂の席の数と比較すると、数える行為こそが烏滸がましい。そう思われるぐらいの差ではあるが、少年らは喜んだ。練習通りの成果を本番で出来たのだから。

少ないけれど、観客に見てもらうことが出来たから。

やり切った雰囲気を漂わせる穂乃果達の前に、講堂の入り口からゆっくりと歩み寄ってくる生徒が一人――。

「これでわかった？」

「……生徒会長」

緩やかな階段を降りながら、リーダーである穂乃果を見つめながら告げる。

「君らが何をしてしても無駄ってことが。努力をしてても結果が報われなかったら意味がない。それでも、続けていられる？」

「続けます」

「それは、何故？」

「やりたいからです」

生徒会長の問い掛けに寸分迷わず即答してしまう穂乃果の精神の強さに、驚愕を隠しきれない。少しぐらいは迷走してもいいはずなのに、彼は道を決めてしまったから良くも悪くも一直線に進んでしまう。

そんな穂乃果が俺らの手を全力で引っ張ってくれるから、安心して今の活動を続けられるのかも知れない。

物怖じすることなく、ただ純粹に現在いまを楽しむことが出来る。

『μs』に加入したのは半ば強制的にだったけど、普段の活動を見て経験して、ほとんどお客さんはいないけど、初めてのライブを目の当たりにして俺は確信した。

——もう、こんな想いを彼らにさせたくない。

それは何故？

穂乃果に海未、ことりが……『M』が大好きだから。

だから、活動を邪魔するのが生徒会であつても、教員であつても、誰が敵として前に立ち塞がつても、妥協して後悔したくない。

「……思い付きで続けても、後悔するだけだよ」

「それでもっ！」

今までずっと壁を背に預けていた俺は、一步前に踏み出し生徒会長に反論する。

「それでも、私達は続けます！確かに今回は人が集まりませんでした。それは事実です。でも、この失敗を活かして次からはもっともっと努力して、色んな人に見て貰えるようになります」

「……けど、努力をしても見向きされないかも知れない。ですけど、俺は勿論、海未君やことり君ももっと踊りたい歌いたって思っています。だから、俺達は活動を続けます。そして——」

俺の口上の後に穂乃果が続いて言葉を紡ぐ。

加入してからいつも練習を見ていた俺はわかる。彼がその次に告げる言葉を。……事前に穂乃果と打ち合わせをして、こういう台詞を言おうとか話していたわけじゃない。けど、今の俺になら、穂乃果と一緒に台詞を言えるんじゃないかと思ひ、彼と同じタイミングで言葉を紡ぎ出す。

「いつか、この会場を満員にしてみせます!!」

俺らの言葉を聞き届けた生徒会長は、唇を噛み締め「勝手にして」と捨て台詞を吐いて講堂から出ていく。

その影を追うように一人の少年もまた、会場から離れていく。彼は最初からこの

物語を演出していたかのようにほくそ笑んでいた。

「……ついに生徒会長にまで喧嘩売ったわけだけど、覚悟出来てる？」

舞台上に立っている穂乃果達はライブの達成感で気付いていないかも知れないが、これは一種の宣戦布告だ。

その事実を実感させるように真姫が隣に来て呟いた。

「出来てる。確かに喧嘩を売った形になったけど、もう後悔したくないから。……努力すれば出来ること、それをしないで後悔するのって、嫌じゃない？」

原作通りの物語を紡がなくなっちゃいけない。そう決め付けて何もなかった自分との決別の為に、俺は敢えて言葉に現す。これから先、絶対に迷わない。そう決意するように――。

「私はね。欲張りなんだよ」

「えっ？」

急に話題を変更した俺について来れなくなったのか、疑問の声をあげる真姫。

そんな彼を無視してでも、俺は言い分を優先する。脳内で前世の俺が制止の声を

あげているのか、激しい頭痛に襲われるが振り払うように声を出す。

——原作？ そんなものは無視だ。

今誓ったばかりじゃない。

定められた原作という名のレールを迷うことなく歩くなんて真っ平御免だ。そんな人形のようなことをして、彼らに非道な未来を突き付けるぐらいなら、**私**は……。

「真姫君。『MS』に入っ

「……花陽君、凜君。『MS』に入りませんか？」

向こうで何を話していたかわからないけれど、心同じくして穂乃果も勧誘という手に出たようだ。

少しでも原作を守ろうとしていた前世の俺が可哀想ではあったが、穂乃果が言い出したことをキツカケに止めようとしていた頭の中での抵抗がなくなった。

「……え、光莉先輩。何を言って俺は別に『MS』に憧れてなんて」

「そうやって自分に嘘をつけて自分を隠すのはやめよう」

真姫の手を強引に握り締めて、次の言葉を息をするように吐く。

「真姫君はあの西木野総合病院の一人息子だから、継ぐことになるのは決定してるでしょ。病院を経営するためには、たくさんの勉強をしないとダメかも知れない。それもわかってる」

他人の為に自分の夢を見ないふりして、気丈であろうとする一人の少年を見てみると、不意に生暖かい水滴のようなものが頬を伝っていることに気付いた。

「……でも、私はそんな理由で真姫君自身の夢を潰して欲しくない。だって、音楽室で聴いた歌、素敵だったんだもん」

「ひ、光莉……先輩」

「あなたが『μ's』に入ることで、毎日が忙しくなるかも知れない。勉強に、音楽に、アイドルに。毎日、多忙な日々を過ごすかも。でも、絶対に後悔させないから!!」

頬を伝う涙をそっと袖で拭き取って、真姫に宣言する。

彼は自分が病院の一人息子であることに不満を持ってはいない。生まれた環境を悔やんでもいない。けど、だからといって、自分の夢を諦めなくちゃいけないなんてことは絶対ない。

どうしても、そんな未来が待ち受けているのだとしたら……その時は私が必死に勉強をして、この人になら任せてもいいそう思えるような人になって真姫の病院を引き継ぐ。原作の真姫も女子でありながらも、継ごうと頑張っていたんだ。絶対に出来ないことじゃない……はず。

「……ははっ。光莉先輩って本当に凄いですよね。人の心境がわかっているかのようには確かな言葉を言っていて、実際に動いて」

いまだに涙目で目の前の視界が潤んでいる俺だけど、真姫はそっと俺を抱き締めると同時に暖かい真姫の体温が俺を安心させてくれる。久々に感じた本当の意味で暖かい人の温もりを感じ取った俺は、再度泣きそうになった。

「いいよ。光莉先輩に免じて、俺は『μs』に入るよ。——だけど、満足するぐらいの高みに連れて行ってくれないと許さないから」

「……うんっ!! 任せて」

真姫の勧誘に成功した俺は舞台上で花陽と凜の勧誘を頑張っている穂乃果達の援護に回る。

歩き出す前に俺の涙は引っ込んだ。

既に涙として頬を伝っていた水滴は真姫がさり気なく拭き取っており、泣きそうになる事態には陥っていないので涙することは無い。

「……けど、僕は人前で何かをするのに向いてなくて」

「おれもだよ。かっこいい服とか着たいけど、でも、似合わなくて」

花陽は引っ込み思案で人前に行き出るのが苦手な故にアイドル活動に憧れてはいるが実際に自分が『*Ms*』となると抵抗があり、凛は雑誌とかで取り上げられているかっこいい服に憧れてはいるが、女顔のせいで着ても似合わないことにコンプレックスを抱えていると。

「それがどうしたの？ こう見えても彼らはコンプレックスだらけだよ」

舞台へと繋がる道を一步、また一步と階段を降りながらも自然と口が開く。

「海未は緊張しいだし、チラシ配りの際とかも結構きてたし、本番前も本人は隠してたつもりだけど、他の二人と比べてかなり緊張してた」

「み、見てましたっ!？」

「ことりはダンスのステップを間違えることが多々あるし、さっきの本番でも間違えてたし。てか、歌詞も一瞬だけ忘れてたのか知らないけど、自分のパート歌い出しが少し遅れてたし」

「バレてた……」

「穂乃果は凄いいおっちょこちょいで練習に何度か遅れるし、ことり同様ダンスも間違えるし、何をやってもダメダメだよ」

「ちよっと、それは言い過ぎじゃないっ!?!」

海未とことりと比べればコテンパンに言ってしまうのも仕方がないだろ。

穂乃果ほど弄り甲斐のある人はいない気がするし、何より言っていることは間違っていない。

「でも、一途だ。スクールアイドルになろうとしたのも穂乃果が言い出しっぺで、誰よりも努力しているのも知ってる。だからこそ、緊張しいで前に率先して出ない海未も、おっとりしていることりもスクールアイドルになったんだよ」

花陽と凜、二人がライブを見ていた場所についた俺は二人に手を指し延ばす。

一人は憧れはしているけど、中々自分から言い出せずにいた少年。もう一人はアイドルなんて興味はなかったけど、挑戦してみても悪くはないかなと思いついて始める少年。

二人ともアイドルに興味を持ちだした理由は違うけれど、胸に抱えている暖かいものはきっと同じはず。

「プロのアイドルとしてなら、彼らは認められない。けど、資格がいらないうるアイドルだから、やってみよう」その思いだけで出来るんだ。——二人もスクールアイドル、やってみよう？」

少年らはお互いに顔を見合わせた後、暫し迷った。

原作では三人が勧誘してたけど、今回は俺だったから失敗したのかな……。そう思い始めた俺だったが、そこへ現れたのは第三者だった。

二人の背中を押して、自分の手を握るように差し向けた超本人——それは真姫だった。

「迷っているなら、やってみよう？俺もやることにしたし。小泉君の発声練習も、

星空君の容姿に合うファッションも一緒に考えるからさ」

「……そうだね。やってみよ、凜君」

「だねっ。先輩方、迷惑をお掛けするかも知れませんが、よろしくお願いします！」
顔を見合わせて『μ's』に加入することを決断した一年生三人。

これで『μ's』は六人になった。

明日からの練習も厳しくしないと、そう考えて帰路につく俺だった。

ライブ終了の片付けや明日からの予定をザックリと説明した後、解散した俺ら。
一年生三人組は一緒に帰ることにしたみたいで、二年生三人は自分達だけで少し反省会をするといって残っていた。が、最近物騒だからという理由で、女の子は早く帰りなさいと海未に言われて帰宅することにした俺。

そして、今に至る。

「そんなに最近、物騒か？」

しかも、今の時間なんてまだ午後五時だよ。確かに夜中とかだったら怖いけど。
改心して『μ's』の活動に積極的になった瞬間のこれは、少しテンションが下

がってしまおう。

翌日の朝練の際にでも、海未に文句を垂れ流ししてやる。と決意したまま、家の前についた俺だったが、思わず鞆をその場に落としてしまった。

「……え」

なんで……？ 家を出る前、きちんと電気を消したはずなのに。

俺が目当たりにした光景は想像を絶するものだった。

きちんと戸締りをして、電気も消して、きっちり鍵もかけてマンションを出たはずなのに。俺の部屋は煌々と電気が点けられており、部屋を物色しているのか人影が見えてしまった。

原作とは違う一年生組加入の回でしたが、いかがでしたでしょうか？

こんな展開もアリじゃないかなと思いやってみました。

まあ、原作に忠実な作品でもいいかなと思っただのですが、やっぱりアレンジを入れたいと思ってしてみました(笑)

次回

最後に漂わせた不吉な予感に迫ります。

第10話 心の温度

「……はあはあ」

可能性として極めて低かったが、大家さんが俺の部屋に異物を持ち込んでないか確認しているのではないかと危険ではないと自分に言い聞かせるように、鞆を持って恐る恐る自室へと向かったが、自室へと繋がる鍵穴は潰されており、おそらくピッキングか何かで抉じ開けたのだろう。音を立てないようにそっと人影が見えたリピングへ向かう。そこで目にしたのは大家でもなく、知人でもない。ただの他人――。

思わず絶句して呆然としてしまった俺だったが、ふとした瞬間に物音を立ててしまい侵入者と目が合ってしまう。

そいつが何を言っていたのかわからない。

けど、そいつが手にしていた物は見えてしまった。

つい先日、身に着けていた女性物の下着だった。それを見た途端に、頭を過った

のは怒りでも、呆れでもなく。恐怖。

見つかって何をされるかわからない女性にしかわからないう恐怖を感じた。

逃げない——。

そう思ってから行動は早かった。少しでも荷物を減らして逃げれるように、手に持っていた鞆を投げ付けるように侵入者に当てて、全力で逃げる。

財布もその中に入っていたが、自分の身より大切なものなんて何も無い。

「ここまで来れば、大丈夫かな」

こんなところには逃げて来ないだろう、そう思える場所に逃げ込んできたが邪魔になつたりしないかな。走って向かった先は、『神田明神』。『M.S』の練習場所でもあるこの場で物陰となる場所で息を殺す。

人に迷惑を掛けたくないなという思いが頭を駆け巡ったが、とりあえずは逃げ切ることだけを考えることにした。

時間が経つにつれ、一つの足音が近付いて来た。

「……っ」

思わずあげそうになった悲鳴を必死に押し殺し、口元に手を当てて堪える。目尻には水滴が溜まり、今にも漏れ出しそうになったが、我慢する。

すぐ近くまで足音が近付いて来た瞬間――。

急激に天候が悪くなり、雨が降り始めた。

今いるこの場所付近は雨を防ぐものが何もなく、雨曝しになる。思わず追っつけていた侵入者も諦めたのか足音が遠ざかっていく。

けど、今の俺は緊張感が解けて、身動き一つ取れない。

大雨の中、地面に蹲るように座り込んで、数時間が経っただろうか。必死に抑え込もうとした嗚咽が涙がはじめてから何十分が経っただろうか。

自身に当たっていた水滴が突然、なくなったことに気づき、涙か雨かわからないぐらいグシャグシャになった顔をあげる。

「……何してるん？ そんなとこにいたら風邪ひくよ」

「の、希……先輩」

百パーセント善意だけで行ってくれるその行為だけで、私は救われた気分になり感極まって希先輩に抱き着く。

土砂降りの雨で全身濡れたままの私だけど、希先輩は優しく抱き締めてくれた。現在進行形の大雨と比例するかののように、瞳からは永遠に涙が流れ続ける。

精神的に落ち着くまで数十分を要し、安定してから簡単に事情を説明して、希先輩の自宅でゆっくりと落ち着いた空間で話すこととなった。

「……ごめんなさい。さっきも、今もここまでしてもらって」

希先輩の家——私と同じくマンションの一角だけど、通して貰った直後、雨でびしょ濡れになった体を温めなという一言によって、お風呂まで借りさせて貰った。現在もシャワーで体を温めている最中の私だけど、脱衣所で希先輩の気配がしたので懺悔するような声音で呟く。

おそらく今は私が着ていた制服を洗濯してくれているのだろう。

下着類はネットを貸してくれたので、それに入れて自分の手で洗濯機の中に入れた。別に希先輩が実行しても怒らなかつたのに、あんな変態に触られるよりよっぽどマシだ。

「ええよ。あの状態で光莉ちゃんを放置しちゃったら、それこそ自分が許せへんし」

『Ms』のみんなにも怒られるしな。と苦笑交じりに言う希先輩。

「……他人事のように思えるかも知れんけど。ほんま、災難やったな」

「ええ、まあ」

「これからどうするん？あの家に戻るのは嫌やろ」

「……そうですね。取り敢えず、警察に連絡して、引越しすることにします。セキユリティ面が頑丈なところに」

脱衣所で壁に凭れながら話しているのだろうか。

彼は親身になって話を聞いてくれる。たったそれだけで、心は温かくなるし、安心させられる。

階段で転落しかけた時も、『神田明神』でのさっきの出来事の時もだけど。希先輩はそこにいてくれるだけで、安心感を与えてくれる。

「そっか。……光莉ちゃん。もしかしたら、もう男なんて信用出来ないかも知れないけど、光莉ちゃんさえ良ければ、ここにいてもいいよ」

「えっ……」

「こう見えても一人暮らしって結構寂しいんだよね。だから、一緒にいてもええよ。」

まあ、一人暮らししてて恐怖を感じてしまった光莉ちゃんの弱味に付け込んでるみたいやけどね」

最後に一言付け加えたけれど、本当に希先輩がそんなことを考えているはずがない。実際に狙っていることを口に出す行為を行う人はただのバカだ。だけど、希先輩はそこまでバカじゃない。おそらくそういう考え方もあるということだけ言いたかったのだろう。

希先輩はいつも、そうだ。

会話している相手が本能的に欲している言葉を、あったかい言葉をくれる。

「あり、がとう……ごさいます」

「うん。だから、ゆっくりしていつてね。着替え、うちのやけど、ここに置いとくから」

そういつて足早に去っていく希先輩。

きつと今回の件で男性恐怖症になつていかも知れない私のことを氣遣つてその場から離れていつたのだろうと考える。

……あそこまで誠実な人になら、恐怖を感じないんだけどね。

今はまだ希先輩しか知らないけど、下心剥き出しな男じゃなかったら大丈夫だと思う。なんか、そんな気がするんだ。

(希先輩のように包容力のある人になら、自分の全部を曝け出せるんだけど、ね)

「……本当にありがとうございます」

シャワーを終えた私は、希先輩に貸してもらった衣類を着用してリビングに佇んでいた。

さすが男子といったところか、彼の衣類は大きくシャツ一枚でも、太もも辺りまでは隠せるんじゃないかと思ったが、あの事件の後だからかそんなことは出来な

かった。藍色のジャージもきちんと穿かせてもらいましたよ。

希先輩が寛いでいる場所の前の席に座り、口を開く。

「え、えっと、事情は既に簡単に説明させてもらったはずんだけど、詳しくした方がいい……かな」

不審者に追われている所を助けて貰っただけでなく、衣食住まで提供してもらって尚、なんでこんな状況に追い込まれたのか説明しないなんて許されないよね。

机の下で希先輩にバレないように拳を強く握って、苦痛に塗れた表情を出さないように気を張る。

「ええよ。言わんでも」

「えっ？」

「……そんな我慢して、無理して言わんでもええよ。うちは男やけど、一人暮らししてる身やから、そのニュース知ってたし。最初から心配してたぐらいやし」

頬杖をつきながら、少しムスツとした表情で告げる希先輩。

何に對して怒っているのかわからない私は、頭の上にハテナマークが浮かんでいそうなくらい頭がこんがらがっていた。

「はあ……。俺はお前が心配だったんだよ。一人暮らしだって情報は聞いてたし、何より可愛いと思っただお姫様なんだからさ」

急に真剣な顔付きで一人称までも真面目モードに変貌していたので、対策を取っていなかったが故に心がドキッとしてしまった。

守りたい願望が女性全員にある気持ちなのかはわからないけれど、今の私はそう思ってしまった。希先輩なら温かく、そして優しく守ってくれるのではないかと。

「……ありがとう。希」

ずっと気を張っていたからか、安心感を与えられた瞬間。

私の体からすうっと力が抜けていき、瞼が次第に開けられなくなっていた。そして、重力に従うかのように机に突っ伏すようになり、意識は白く濁っていく。

最後の言葉が聞こえてたらどうしようかな。

目を覚ましたら取り敢えず、謝罪しないとね。年上なのに、呼び捨てで呼んでしまっただごめんなさいって。

「お疲れ様。今はゆっくりお休み……。お姫様」

主人公のピンチに颯爽と登場したのは、東條希でした!!

登場とうじょうなだけに……。なんちて(笑)

嘘ですよ。それだけの為に希にしたわけじゃないですからね!!

……。正直に言うと、後書きを書いている際に気付きました。これ、ダジャレじゃないって。

まあ、それはさておき、いかがでしたでしょうか。第10話。

フラグ回収が早いつて？

仕方ないじゃない！ 忘れちゃうんだもの！！

第11話 東條希

作者の一言

穂乃果、誕生部おめでとーっ!!

……尚、この話に穂乃果は出てこない模様
ww

「……ねえ、光莉ちゃん？」

「なーに？」

リビングで二人分の朝食を作っていると、希先輩が呼んできたので、作業を中断し、そちらに意識を向ける。といっても、味噌汁は完成していて、温めるだけなの

で、別にそのまま放置していても良いのだけど。

もしかしたら希先輩の言う話が結構長い話なのかも知れないと思って、どういふ状況になっても対処出来るようにしておきたい。

主食の白米に、お手製味噌汁、冷蔵庫にあった鮭の切り身をムニエル風にしてみた。勿論、ムニエルに付けるタルタルソースは手作りだ。

「別に今日、無視して行かなくてもええんやで？うちから先生に言うておくれ。それに、まだ男に会っても大丈夫かわからないんやろ」

「……うん。でも、『Ms』の人達がいるし」

「彼らは、そんなに自分の身を犠牲にしても大切なんっ!?!」

大きな声をあげる希先輩にドキッとす。決して、キュンキュンする方のドキドキではなく、普段大きな声を出さない「東條希」が今こうして大声を出している事実。

初めて大きな声を出していたのも、親友のため——。

今回大きな声を出しているのも、私のため——。

自分のためではなくて、友達のために怒ることが出来る希先輩はやっぱり優しい。

「希……先輩」

「……ごめんな。大きな声を出して」

「い、いえ。……あの、希先輩。伝言の件お願いします」

私の言葉を聞き届けた希先輩は瞬間的に驚愕の表情を浮かべていたが、すぐに普段通りに不適な笑みを浮かべながら「任せとき」と言った。

こうして臨時で学校が休みになった私だが、何をして一日過ごそうかな。その一言に尽きた。

自分の家になんて帰りたくないし、かといって学校を休んでそこらをぶらつくなんて不良みたいな真似、私には出来ないし。

「でも、そうなる暇になるのよね。何にもすることないから」

「じゃあ、うちの家事をやってくれたらええやん。お帰りなさいってかわいいお出迎えされるのも憧れだし」

「要するに一人暮らしの家事が面倒くさいってことですよね」

「そういうこと」

悪びれることもせず、のらりくらりとしている。

確かに毎日の家事は辛い、一人でいる時間は大切だ。何のために必要か。そんなの決まってる。

プライベートな時間がないと精神的にゆとりがなくなり、荒れてしまうからだ。

「……わかりました。私がしておきますよ」

「ん。ありがとうね」

作り終えた朝食を食卓に並べ、希先輩を呼ぶ。

学校に行かなくていい分、今の自分には時間が有り余っているけれど、希先輩が行く時間はわからないけど、そこまで多いわけではないと思うので、希先輩の昼御飯になる予定の弁当を作ることにした。

弁当箱があるかどうかわからなかったの、朝食を食べている希先輩に聞くと、「普段は学食や購買やったからあるかな」ということだったので、引き出しの中にしまってたあったタッパーを軽く水洗いしてからふきんで水を拭き取り使用することにする。

「なにににー？　うちに弁当作ってくれてるん？」

「そーだよ。あ、弁当箱が見つからなかったからタッパーだけど」

「ええよ。別に気にせーへんし。本当に作ってくれるんや、嬉しいな」

弁当ぐらいで大袈裟だなあ。としみじみと思いながらタッパーにおかずを詰めていく。冷蔵庫の中にあった材料を使って簡単なおかずを作っていく。

彩りを優先してしまったために、希先輩の嫌いな食べ物が入ってるかもしれないけど、あんなにも紳士的な人なら全部食べてくれるでしょう。

タッパーにおかずを詰め終わったので、割り箸を一膳付けてタッパーが入れられる小さめなバッグに綺麗に収めて、希先輩に手渡す。

「ありがとね」

「その台詞は私の台詞だよ。こんなことしか出来ないけど、本当にありがとう」

「……本当、光莉ちゃんは男心をくすぐるよね」

そんなつもりは一切ないけどさ、きっとそれは前世が男だからかな。

男子が想像する女子っていうのは、女子に言わせると九割程幻想である。実態は

もっと酷いというのは女子の談。

そんな幻想的な女子をモデルとして、女の子っぽくしているので、そう思うんだろうね。

「ご馳走様でした」

「はい、お粗末様でした」

食器を片付けようとした希先輩を止めて、自身も朝食を取ることにした。

行く準備を少しずつし始めた希先輩の様子を見ると、自然と笑みがこぼれてしまっていた。

(なんで、笑みがこぼれてるんだらう……。昨日、辛いことがあったばかりなのに)

希先輩が助けてくれたから？

希先輩に必要にされたから？

理由はわからないけど、ほんの少しの羞恥心を感じながらも幸せを実感していた。彼といえる間は私は私であっていいんだと。東條希君と話しているのは前世の私

ではなく、『片桐光莉』なんだって。先輩は絶対に自覚はしてないでしょうね。ただあるがままでいるんだって、そういうと思う。

……そんな暖かい陽だまりのような空間が心地良くて、つつい甘い甘えてしまう。

（もしも、本当にもしもの話だけ……私が本当に女子だったなら、彼のような人に惹かれて恋してたのかな）

柄でもないことを思い浮かべてしまって、思わず苦笑い。

それでも私はきつと、彼以外を選ぶなんて考えられない、かな。

たった一回、助けられただけでこんなにも心が揺らぐなんて、どんなに尻軽なんだよ。と自分の思考回路にツッコミを入れる。これが吊り橋効果ってやつなのかなあ。

「じゃあ、行ってくる。本当に家にいるだけでいいからね？ 昼も冷蔵庫にあるもので勝手に作ってくれてええから。夜はうちが材料買って帰るから買い物にも行か

なくていいし」

「わかってるって。……行ってらっしゃい」

過保護な希先輩を軽くあしらって、さっさとバイトに向かわせる。

着用している服は音ノ木坂学院の制服で間違っではないが、今から彼が向かうのは『神田明神』だ。

朝から『神田明神』に行ってから、学校に向かうというなんともハードスケジュールをこなす希先輩。

そんな彼に合わせて弁当を作ったり、朝食を用意したりする私もだけど、ね。

「さて、掃除とか色々するぞー」

一日休みになってしまったので、暇になった時間をどう有効に使っていいのかなと脳内で何回もシミュレートしてみると、この家の内装をきちんと理解する意味も含めて徹底的に掃除をすると時間も掛けられるし、何処に何があるのかも正しく覚えられるので、後々のことを考えると楽になると脳内シミュレートの結果が出たので、掃除を行うことにした。

それからは希先輩には釘を刺されたけど、買い物に行こうと思う。ついでにあの家も見ておきたいし、何より鞆がないのは不便だ。

「とりあえずは、理事長に事情を説明するのと欠席する旨を教師に伝えて。それから大家さんにも連絡しないと」

大家さんはまだ寝てるかも知れないので、まずは理事長に電話をかけることにした。

家事とかしてる最中かなと考えると申し訳ない気分になりながらも、電話をかける。

「あ、あの、理事長。お話がありますー」

第12話 恐怖症

K o t o r i s i d e

「疲れたー！」

『神田明神』での朝練を終えたボク達は制服に着替えて、ほんの少しだけでも休憩してから学校に行こうと三人で話し合って結果が出た。

なので、建物の影に隠れるような感じで壁に凭れかかる。

全体重を背中の壁に預けて、朝練で疲労した体力の回復に努める。

いつもならそのまま行くところだけど、今日は授業に体育があつて体力を温存しないといけないこともあり休憩を挟むことにした。が、ボク達が本当に休憩を挟んだ理由はこれじゃない。神社で働いている希先輩と話したかったからだ。

「……お疲れ様やね」

「希先輩」

巫女服を着用して、男子にしては比較的長い髪を後ろで一つ結びにしている希先輩の姿がこちらに近づいて来る。

前に神社であった際に何故、巫女服に女装しているのかと質問した。そしたら返答が「神社のバイトってね。女性ぐらいなんだよ。男は少なくとも神職を希望している人しかダメなんだって」と発言していた。

家から近いこと、朝と夕方から入れるバイトといえればここしかなかったみたいだ。時給も中々に良いみたい。

ボクもここでバイトしようかな。色々と衣服の勉強をしつつ喫茶店などを巡ってるけど、良さげな服がないんだよね。

その点、女装には手を出していないので、斬新な発想であり、注目される衣装を作れるかも。

もしかしたら、海未君は嫌がるかもだけど。

「そろそろ話があるんやないかなって思ったんやけど、あるよね」

「……さっきの話ですが、本当の話ですか？」

今だに信じ切れていない海末君が希先輩に問い掛ける。しかし、帰って来たのは望まない嫌な返答だけ。

「あの恐怖を感じる家に帰すよりは、誰かが一緒にいてあげられる空間に彼女を連れていって安心させてあげようって思ったから家にいるけどね」

「え……。てことは、今は希先輩の家に光莉ちゃんが？」

「うん、一つ屋根の下の同じ空間にね」

「いいなあ。光莉ちゃん可愛いし」

彼の言う言葉には理解もしてしまうし、納得してしまう。

光莉ちゃんと一緒に生活できるなんて幸せだ。

……けど、それは相手が正常であれば。

「穂乃果、不謹慎ですよ。彼女は身に危険を感じて男性恐怖症になってるかも知れないのですから。逆に希先輩の立場なら気を使ってしまいますよ？」

「確かにそうだよね」

彼女はとつても可愛くて素敵な女の子だから。決して傷付けたくないし、彼女の泣いた顔は見たくないし、させたくない。

スクールアイドルのマネージャーに誘う際に、ボクが仕出かしてしまった行為に對しても若干後悔していた矢先のこの事件だ。

もしかしたら男性恐怖症になっていてもおかしくはない。もしも、彼女が男性恐怖症になっていたとしたら……ボクは。

「ことり君？」

「え……？ ど、どうしたの？ 穂乃果君」

「どうしたのじゃないよ。急に難しい顔して考え込んでたから」

「あ、あはは……。大丈夫だよ。じゃ、じゃあ、希先輩の家に今日お邪魔してもいいですか？ お見舞いって言ったらおかしいかもですけど」

話を変えようと口から漏れた言葉は、この場にいる人全員にきちんと聞き届けられた。

穂乃果君は「ことり君、ナイスアイデア！ 良いね。希先輩お願いします」とボクの意見に肯定的で、今にでも向かいそうな勢いだったが、反対に。

「僕はやめておいた方が良いと思います」

海末君から返って来たのは否定の言葉だった。

「えー、なんでよ。絶対に盛り上げた方が気が楽だよ」

「確かに気分を明るく持つことは良いことだと思います」

「だよね。だったら……」

「ですが、それはこの場合では適さないと思いますよ。変態に家を弄られて、男性恐怖症になってるかも知れない子のところに男が行くのはどうかと」

それは一般的な人に問い掛けたら絶対に返答されるであろう世間の声だとボクは捉えていた。

十人に聞けば十人がそう答える予想も出来てしまう。極当然且つ当たり前な意見。

仮にもし、彼女がボクらを拒絶してしまったら、ボクらは明日から平気な振りして学校に来れるだろうか？ —— 否、少なからずボクは無理だし、きつと穂乃果君

も精神的にダメージを負うことになると思う。

だって、本人は隠しているつもりかも知れないけど、転入生として彼女が紹介された時からずっと、穂乃果君は彼女に見惚れていた。だから、きっと、穂乃果君も彼女のことが……。

「それでも……。だからって、はいそうですか。ってわけにはいかないよ！ だって、光莉ちゃんは俺らのマネージャーで絶対に関わらないわけじゃない。なら、今のうちにハッキリさせておきたい。線を引くべきなのか、今まで通りで良いのか」

「穂乃果……」

「穂乃果君」

ボクらは穂乃果君のことを勘違いしていたのかも知れない。

彼はきっとボク達以上に光莉ちゃんのことを想って行動しようとしていたのかも。彼女がボクらを拒絶して自分の世界に閉じ籠ったなら、ボク達は彼女から距離を取り、マネージャーの仕事もさせないようにする。今まで通りで良いのであれば、通常通り一緒に練習して、一緒に学校生活を謳歌する。

ボク達なら確実に距離を取って、彼女の気持ちを受け止めないで突き放す。
それが最善だと信じて——。

でも、穂乃果君は違った。

一見、自己中な思考だと思ふし、バカにされても文句は言えない。けど、一度決めたらその道を通つて走る穂乃果君だから出来ることだし、相手のことをきちんと思ひ遣っている心に感動した。

「……例え、それが俺らに取っては好まない結果に繋がったとしても、俺達は素直に受け止めないといけない。きつと、棘の道なんだからと思う。けどね。可愛い女の子を傷付ける男子ってかっこ悪いじゃない？」

あつげらかんと言つてしまう穂乃果君に思わず笑みを堪え切れなくなり、ボクと海未君は表情に出してしまった。

「まったく……。また思い付きで言ったのかと思いましたが、きちんと考えているのなら、僕は文句ありません」

「ボクもね。穂乃果君がそこまで考えているとは思わなかった」

「そこまで彼女のことを考えて想っているのなら、うちには止められへんな」

穂乃果君やボクと海未君の気持ちを決んでくれたのか、本当に彼女のことを心配で彼女のことを想っているのか試していたのかわからないけど、希先輩は自分の住所を教えてください。

そこで初めて希先輩が一人暮らしだと知った。光莉ちゃんは被害に受けたという希先輩からの話で頭の片隅には情報として記録していたけども、まさか希先輩もだったなんて。

「……ほな。また放課後にね」

そういつて自分の情報を告げた後、バイトに戻っていく希先輩の後ろ姿を見ながら、穂乃果君は言った。

「本当に希先輩には感謝しないとね」

「……穂乃果？」

「彼がその場にいなかったら、光莉ちゃんがどうなっていたかって、考えるとね」
自身の拳を強く握り締める穂乃果君の横顔をチラッと視界に入れる。

ボクの瞳に映った穂乃果君は、唇を噛み、力になれなかったと悔いているのが直ぐにわかってしまった。

——何故、一人で帰ってしまったのだと。

後に悔いる。本当にその通りだと思った。

ここにいる三人のうち、誰か一人でも彼女と一緒に帰っていたら被害は防げなかったとしても、彼女の力になってあげていたかも知れない。希先輩に出会うまで、逃げ回っていたみたいだし、その際に測り知れない恐怖を味わったと思う。

誰か一人でも……気を使って帰宅してたら。

穂乃果君の悔しい思いが隣に座っているボク達にも伝わってくる。

「……守りたいな。強くなって」

「その為には練習しないといけないんじゃないですか。僕達がもっと上手くなれば、マネージャーの彼女も早く帰れますし、一緒に帰って守ることも出来ます」

「そうだよ。だから、一緒にがんばろー！」

しみじみと呟く穂乃果君の台詞に海末君が反応し、上手く練習への流れにしていたので、ボクもそれに便乗し、穂乃果君の気分を乗せることにした。

「そう、だね。……よし、明日も朝練がんばろー!!」

「明日の朝練から練習開始するよってメール入れとくね」

昨日、教えてもらった一年生三人に一斉送信でメールを送る。

その際にふと気付いてしまったことを口に出してみる。

「あれ、ところで穂乃果君。なんで一年生には今日から朝練だって言っていないの？」

┌

「あ、あははは……。ごめん。完全に忘れてた」

顔の前で手を合わせて謝罪する穂乃果君。

その姿を視界に捉えた瞬間、ボクと海末君は理解せざるを得なくなつた。

（うん。やっぱり、穂乃果君は穂乃果君だね。今日の放課後にこんなミスをしない

と良いけど)

今日の放課後までに、ボクはちゃんと立ち直れるかな。

穂乃果君みたいにボクはきちんと割り切れないから、大好きな彼女に拒絶されたら、ボクはきつと——。

第13話 トラウマ

※作者曰くシリアス展開に突入します。

「死」という単語が何回も出てくると思われますが、ご了承ください。
おそらく今回の話だけだと思いますが……。

「本当に何もなくて、よかった……」

時間は夕方の午後五時。

朝に理事長に電話を行ったのが随分昔に思えるが、たった数時間しか経っていない。

午前中のうちに、被害にあった家の方へ行き、大家さんと会話した後、これからどうするかなどの話をして、こっちの希先輩の家に当分居候させてもらおうと話をつけてきた。なので、必然的に今月から家賃を支払う必要はないとも。

今回、こんな事態になってしまったのも、言ってしまうえばマンションのセキュリティが甘かったが故に起こった事件なのだから。

経営している自分にも非がある。そう大家さん本人も考えているのだろう。

自分が使っていた家から使えそうな物を持ってきた鞆に、侵入者に投げつけた鞆に入れていた。

投げた鞆に入っていた物は何一つ欠品や欠損がなく、あの後すぐに逃げたのだからと推測出来る。

服や下着類もほとんどは手が付けられていることはない。なので、タンズやクローゼットの奥底から衣服や下着を手に取り、鞆に詰めていった。

冷蔵庫には偶然にも物が入っていることはなくて、持っていく物はない。

大きい家具もそのまま置いておいていいよと大家さんに言われたので、そのまま

にする。

あらかた持っていくものを鞆に詰め終えたら、最後に触られた形跡のある下着類を黒のゴミ袋に入れて、ゴミ捨て場に捨てる。敢えて、生ゴミと一緒に捨てたので、漁るような行為は誰もしないでしよう。

「思っていた以上に持って来れる物あったね」

一度、希先輩の家に帰宅し、持ってきた衣服は貸してもらっているダンスに入れていく。

本当なら色々と持って来たかったけれど、何を触られているかわからない以上、あまり触りたくないというのが、私の気持ちだ。

「……でも、やっぱり冷蔵庫の中に作り置きしてたおかずがあったはずなんだけどな」

おそらく食べ物が目当てで忍び込んだのかな、あの変態さんは。

食欲に睡眠欲に、性欲を満たせる場所として女性の移住空間に侵入して欲望を満たすと。

「もし、本当にそうなら最低ね」

元々は男子であつた私だけでも、あの男の行為は許されない。

誰が許しても、被害にあつた私だけは絶対に許さない。

そんな思いが強くなり、あんな変態ちつくな男に対する嫌悪感で心が支配されていく。

その否定的な思考回路は、元男子としてのプライドなのか、女子として生理的に受け付けないのかはわからない。

けれど、一つだけわかることがある。この胸を徐々に黒く染めていくドス黒い感情に名前をつけるとすれば、それはきつと『怒り』なのだろう。

欲望に忠実な男の姿をこの目に見せ付けられて、その欲望の矛先となって、正直どうしていいのかわからなかったし、頭の中を掻き混ぜられたようにぐちゃぐちゃになって、何がなんだか理解出来なかった。

少なからず男子が持っていると思われる欲望を否定するわけじゃない。私も元々は男だったし、そんな気持ちをまったく抱かなかつたかと問われれば元気良く少しも抱かないわけじゃないと答える。

自分にはない物ばかりを持っている異性なんだ。興味の対象とならないのはおかしいと思う。別に興味を持って接するのも、悪くはない。

「……けどさ、あんな犯罪に手を出すなんておかしいと思わない!？」

誰に問い掛けたわけでもないけど、思わず声に出してしまうぐらいに今の私は荒れているのかな。しかも、今までに出したことのないような大声で。

一度、火が点いてしまったら消火までに時間が掛かってしまうような女子かよ。とツツコミを自分自身に入れそうになるけど、女子だったという言葉が何処からか返ってきたそうだし、何より一人でツツコミを入れて、冷静に捌さばくのもシールドで嫌だなと思いき口を閉ざす。

「ホント、怖いね……」

侵入者事件の日。つまり昨日のことを思い出していると、帰宅した際に目の当たりにしてしまった、欲望に染まった男の目、追い掛けられた際の恐怖が不意に脳裏を過よぎり、四肢は勝手に小さく動き出す。

「あ、あれ……。おっかしいね」

体の震えが止まらない——。

必死に鎮めようと頭を横に振って思い出さないように、強く振り切る。

頭を抱えながら、何も考えないように。真っ白な空間にいる自分を想像して。

何をしてても手足の震えは止まらない。

(お願い……。止まって!!)

リビングのソファに深く腰を掛け、強く念じながら体を抱え込むようにして小さく蹲うずくまるる。

自身を安心させるために取っていた体勢だったけれども、それが奇しくも追い掛けてきた侵入者から身を隠す際の体勢と非常に類似していたことを想起してしまい、震えを促進してしまった。

あの時は希先輩が偶々バイトの最中に見かけてくれたから、一緒にいてくれた。けれど、今は違う。ここにはいない。

私が自分自身の力で恐怖を克服しないと、ダメなんだと自分を奮い立たせる。

(……ダメ)

震えを止めようと努力すればするほど、悪化する。

行き場を見失った『恐怖』という名の感情は、体内を這いずり回るかのように、徐々に体を蝕むしばんでいく。

指に、手に、足に。……そして、目頭にも影響が現れ始めていた。

止め処なく流れ続けようとする涙。

(こんな状態になるなら、いっその事悲劇のヒロイン面して考えなければよかつた……)

どうしようもなく、ただ恐怖から逃げ回るように生活を送るしかないのかと。こ

れが幸せを感じてしまった『片桐光莉』への罰なの？

……前世で不幸にしてしまった少女らに対する贖罪。

それは私自身が罰則を受けるべきだと考えているし、それに対して反抗もしていない。

——私は絶対に幸せになつてはいけないと。

あの時、見殺しにしてしまった少女を差し置いて幸せになるべきではない。

私はいるだけで、誰かを不幸にしてしまう。こんな私に生きている資格はあるのかな。

前世で死んでしまったのは、確かに不幸な出来事かも知れない。——けど、本当は嬉しかったんだ。

人はこれを狂喜って例えると思う。

死んで良かったなんて考えるなんて正気の沙汰じゃないと。

……でも、私はもう楽になれると思った。

一人の少女を見殺しにしてしまっただけから、私はずっと後悔していたし、負のスパイラルに陥っていた。

そんな生きているのかわからない生活を過ごしているぐらいなら、いっその事楽になりたいと。

——神様は残酷だね。

生きている意味や価値を失った私にもう一度、『生』を与えるのだから。

「……ホント、この世界は残酷だよね」

誰か助けてよ。この抜け出せない真っ暗闇から。

どうせ誰にも聞こえない。どうせ誰も引っ張り出してくれない。そう高を括りな

がら心の奥底で呟いた言葉に、そっと差し延ばした手に、呼応するかの如く、一人の少年の手の感触がした。

「光莉ちゃんっ!!」

暖かい陽だまりのような声と共に――。

第14話 もうひとりじゃないよ

今日はもう、更新がないと思いましたが？

残念でした。もう一話あるんだなあ。これが
ww

と、見てくださっている読者様を煽るような発言をしましたが、ノリだと思って
ください。

「……はあはあ」

一日の授業をすべて終えた俺らは、一年生には自主練だと連絡を入れて即座に希先輩の下へと向かう。

学年が違う一年生にも話が行き届いていたのか、理由は聞かずに納得してくれた。おそらく光莉ちゃんが関与していなかったら、三人共聞いてくれてなかったんだろうなどと頭の片隅で考えていた。

素直じゃない真姫君も光莉ちゃんのお蔭で少しずつだけど、自ら率先して人と接するようになってきたし。凜君も花陽君も、彼女のお蔭で後押しされて『MS』に入ってくれた。

今の『MS』があるのは『光莉』^{ひかり}があったから。

彼女の明るい光に照らされているから、俺らは頑張れるんだ。

スクールアイドルを、『MS』をやって廃校を阻止しようと思いを出して行動し

始めたのは俺で、ことり君と海未君も加入した。そこで、転入生として彼女が現れた。

何から手を付けて良いのか全く何もわかっていない俺らで、どうしようかと路頭に迷っていた。そんな時に現れた……正しく『光』だと思ったよ。

彼女が示す道ひかりを共に歩んでいたら、見たことのない世界へ連れてってくれるんじゃないかと、そんな期待が心を占めた。

だから、『M.S』のマネージャーは彼女じゃないとダメだし。彼女以外は考えられない。

そんな彼女に不穏な影が差していると朝に希先輩から聞いた瞬間から居ても立っても居られない状態が続いた。

早く授業が終わって欲しかったし、彼女の無事な顔を見ないと心の底から安心出来なかったから。

「希先輩っ！」

ことり君と海未君がちゃんとついて来ているかを確認することなく、前だけを見つめて一目散に走って来た。

日々のランニングで培った体力をこんな時に使うとは思わなかったけど、結果的には力になっていたので良かった。

三年生の希先輩が所属している教室の扉をガラッと勢いよく開けて、希先輩の姿を確認する。

「……早いなあ。そんなに彼女のことか心配なん？」

「ええ。彼女は大切な人ですから」

『μ's』にとっても、俺にとっても。

「本当に一直線で羨ましいわ。……穂乃果君。住所は教えるし、鍵も貸すから。君達だけで先に行ってくれへん？」

「希先輩……？」

「うちも用事を済ませたらすぐに行くから」

ズボンのポケットにカードをしまつて、代わりに自宅の鍵を俺に手渡す。

他人なのに鍵を託しても良いんですかと質問が口から出そうになったが、寸前の所で留まる。

希先輩の顔付きがいつもよりも厳しく変わっていたからだ。

いつもはこんなに難しい表情をしない印象だったのに、なんで……。

「……っ！ わかりました。直ぐに向かいます」

「ん。彼女をお願いするわ」

そういつて住所をサッと走り書きで書き記したメモを俺のポケットに入れて、希先輩は急いで教室を出ていく。

俺は彼の後ろ姿やさっきの表情を目の当たりにして、嫌な予感がした。

彼があんなにも真剣な眼差しをしていたのを目にしたのは、ほぼ皆無と言っても良い。……今朝を除いて。

そして、そんな険しい表情を浮かべていた今朝の話題は、不法侵入者の話。被害者は光莉ちゃん自身。

いくらバカと称され続けている俺でも、理解してしまった。

「はあはあ、待ってよ。穂乃果君。置いていくなんて酷いなあ」

「……どうしたの。穂乃果」

「光莉ちゃんが危ない！」

数分遅れて、ことり君と海未君が到着するも、俺はとっても簡単に理解してもらえるように簡潔に内容を纏めて、二人も一緒に急がせる。

家主である希先輩から光莉ちゃんを頼まれたんだ。

彼女が無事であることを祈りながら、全速力でメモに書かれている家へと向かう。

「穂乃果！ 光莉が危ないというのはどういことですか！」

「言葉通りの意味だよ。朝に海未君は言ったよね。男性恐怖症になってるかもって」

「ええ、言いましたけど」

「……それって、俺らも当て嵌まるんだけどさ。彼女の脳裏に残っている男性にも当て嵌まるよね」

ましてや昨日の今日で、あの出来事を忘れるなんて不可能だと思おう。

希先輩から今朝に聞いた話だと、下着類も物色されていたみたいだし、思わず逃

げた光莉ちゃんを追い掛けていたこともあって、きっと恐怖を感じていただろう。恐怖を感じた相手を忘れるなんて、出来ない。

「……何らかの拍子で思い出してしまって、精神的に不安定になっているかも、と？」

「そう。……ことり君には無茶を言うかも知れないけど、急ぐよ」

「大丈夫。そういうことなら急ぐべきだと思うから」

今まで朝練で出したこともないような速度で俺らは走りきり、階段を一気に駆け上がって、希先輩から借り受けた鍵を使って家の中へ入る。

中の様子を窺っただけでも、異常だとわかるような静寂。

当たって欲しくなかった予想が当たってしまったと、内心で舌打ちをしながら中へ入っていく。

廊下を突き進み、扉を開けると、そこは――。

「光莉ちゃんっ!!」

「ほ、のか……?」

リビングだろうか一回り大きい部屋のソファアーの上で蹲るように小さくなり、涙でぐしょぐしょになった瞳をこちらに向ける光莉ちゃんがいた。

体は小刻みに震え、困惑した眼差しを浮かべる彼女の姿を見て、考えていた悪い予感的中し、精神的に悪化していると悟った俺は、彼女にゆっくりと歩み寄って、優しく抱き締める。

「い、いやあっ!! 離して!!」

本気で嫌がっているのだろう。

本能で男を嫌っているのだろう。

——無理もない。変態おじさんに家に侵入されて、追いつけられて、男に恐怖を感じないわけがない。

彼女の腕には思っていた以上の力が籠っていて、当たり前が悪かったら俺が怪我をするかも知れない。それでも、俺は絶対に彼女を離さない。

「……ごめん。俺がもっと君の傍にいたら、こんなことにならなかったのに」

ファーストライブを終えた日――。

反省会を行うにしても、彼女を含めた四人で行うべきだった。

そして、俺らの誰か一人でも彼女と一緒に帰るべきだったんだ。

「いくらでも傷付けてくれていいよ。そんなことで償えるとは思ってないけど、いくらでも貸すから」

自分が今行っていることを脳が正常に理解したのか、彼女の動きが急に止まり、俺の顔を見た途端に号泣した。

彼女が拒絶の為に殴った俺の頬は赤く腫れ、外部から見たらかっこ悪いかも知れないなと思いつつも、彼女を救えた実感を得た俺は、背中にある彼女の暖かい手の感触を感じながら、彼女が泣き止むのを待つ。

「……俺さ、絶対に君を一人にしないよ。だから、安心して」

俺の話聞いてくれていてかわからないけれど、泣きじゃくる彼女を優しく撫でながら、俺は誓うよ。

「もうひとりじゃないよ。君を護るから」

何を代償にしても、俺は君を護る。

君は『MS』を明るく照らす光で、俺にとっての『太陽』だから。

今回のサブタイトルは主人公っぷりを披露した穂乃果のソロ曲から取りました。

……やっぱり、主人公は主人公でないとね。

第15話 後始末

おはようございます！

今日はちょっと早めに目が覚めて、仕事に行くまでに時間があつたので書きあげて完成しました。なので投稿してから行くことにします(笑)

※修正しました。指摘の方がありがとうございました。

「……ごめんなさい、穂乃果」

すっかり落ち着いた私は殴ってしまった穂乃果の頬を優しく撫でながら、謝り続

ける。殴ってしまった時の記憶は残ってる。殴った感触もある。手が赤くなってるし、痛かった。

何より心に深く突き刺さるものがあった。

自分の身すらも犠牲にして、あんなにも優しくしてくれたのに、私は過剰なまでに拒絶してしまった。穂乃果の頬を殴ってまで……。

「やっぱり、私は……」

幸せになるべきじゃないんだよ。だから、『M.S』のマネージャーも辞める。そう言い掛けたのだが、声に出すことは叶わなかった。

涙で濡れた私の目には、間近にまで迫った穂乃果の顔しか視界に広がっていない。今までにない至近距離で『男』の顔を見ているのに、何故か彼のことは恐怖の対象ではなかった。

きっと、下心のない真っ白な心のままに私のことを大切にしようと考えているかなのかな。それか、暴力を振るってでも避けようとしていたのに、強引にだけ光の下へと引っ張り出そうとする彼には安心しても良いと思ったのかな。

——本当に彼は強引だよ。

「んっ!？」

違和感に気付いたのは、その行為をされてから数分を催した。

今までにない程の至近距離、言葉にしようと声を発したつもりなのに出不かった言葉、現在進行形で口に広がる違和感。

穂乃果の予想外な行動に、頭が更に混乱し、それを理解するのにも時間が掛かった。

(……私、穂乃果にキスされてるんだ)

何故、そんな強引な手段に出たのかはわからないし、理解しようとしたくないけど、優しく包まれているような気分になって気持ち良かった。

キスをして何分経ったのか気にしていなかったが、穂乃果の後ろで佇んでいたこ

とりと海末が呆然としていたのだけ視界の端っこに映り込んだ。海末はいきなりな穂乃果の行動に驚きを隠せないのだろうけど、ことりは……違う気がした。

なんでそう思ったのか不思議で仕方がないんだけど、何か別の感情が渦巻いているんじゃないかってそう思ったんだ。

「……光莉ちゃん。俺はね。君が好きなんだ」

「えっ？」

数分間もの間、キスをした後、穂乃果が口にしたのは突然の告白だった。

「でもね。今はその返事を聞きたくもないし、聞く気もない。……けど、自分の感情を我慢して、辞めようとする君の姿は正直、嫌いだよ」

「……穂乃果」

「君はその名の通り、『M.S』を明るく照らす『光』^{ひかり}なんだからさ。君が暗くなっってしまったら俺らはきつとダメになる。だから、俺は絶対に君を離さない。言ったでしょ？君は一人じゃないって」

穂乃果の心のうちを聞き終えた私は、やっと涙腺が止まり落ち着いたと思ったけれど、また泣きそうになる。

そこまで考えてくれてたなんて夢にも思わなかったから。

「ありがとう、穂乃果……」

「おう。何度だって力になってやるから、辞めるなんて言うなよ。俺もことり君も海末君も、真姫君も凜君も花陽君も。誰もが悲しむ未来なんて嫌だから」

勿論、光莉ちゃんもね。

付け加えるように呟いたその一言だけで、どんなに救われるか。

私はずっと幸せになってはいけないと思ってた。不幸にしてしまった少女の償いはしないとイケない。

それでも、穂乃果はきつとそんな私を叱るでしょうね。決してその悩みは口に出さないけど、穂乃果ならどんな言葉を言うのか安易に想像がつく。

「……うん。ごめんね。変なことって」

「別にいいよ。俺の大事な人の悩みはいつだって聞いてあげたい、力になりたいと思ってるから。また、いつでも言ってよ」

見る者すべてを安心させるような笑みを浮かべた穂乃果。

さっきのセリフも合っただけか、物凄く照れ臭くって、穂乃果から目を逸らす。穂乃

果が気付いているかどうかはわからないけれど、個人的には気付かないでいて欲しい。……こんなにも頬がカーッと赤く染まっている私の姿なんて。

「あ、そうだ。ことり君」

「……な、なにかな。光莉ちゃん」

「手出してみて」

私の突然の言葉に驚いたものの、ことりは私の言った通りに恐る恐るだけど手はこちらに向けて差し出してくる。

それをギュッと握り締めて、確認を取ってみる。

「ひ、光莉ちゃん!？」

「ほら、海末君も手を出して」

ことりの件もあって、海末は何をするかわかっているようなので、素直に何も疑問を感じずに差し出す。

海末の手も握ってみるけれど、拒絶反応は出てこない。

さっきまでは穂乃果ですら拒絶反応を示してしまったのだけど、今は出てこない。

私自身の精神状態が結果に影響が出ているのか、穂乃果のお蔭で平気になったのか。どちらにせよ、ことりと海未は大丈夫なことがわかったので一安心だね。

「……ところで、三人はどうやってここへ？ 希先輩しか鍵を持ってなかった気がするけど」

居候である私は希先輩から合鍵をもらっていたので、カウントしない。私以外の人でならって意味ね。

脳裏に浮かび上がるのは、彼らもまた、侵入してきたのかなと最悪な展開だった。考えることはしないでおう。そう思っていたのに、どうしてかな。やっぱり頭に浮かんでしまう。

「希先輩から借りてきたんだよ。……最も、希先輩は難しい顔して、どこかへ行ったけど」

のらりくらりとしている彼がそんな表情を浮かべながら何処かへ行ってしまったのなら、十中八九何かしらが起きたのかも知れない。けど、今の私が出歩いてても邪魔にしかならないと思うので、やめておくことにする。

階段で落ちた際に希先輩に抱き締められるように支えられたけど、あのときに感じた体の感触からすれば、不良に喧嘩売られても百パーセント希先輩が勝つと言えるぐらい遅しい体付きをしたので、安心出来た。

「本当に何処へ行ったのでしょうね。希先輩」

「無茶をしてないと良いけど」

——希先輩。早く帰って来てくれないと夜、ずっと泣いてやりますからね。それが嫌なら、元気な姿を早く見せてください。

二年生組の台詞が妙に真剣味を帯びていて、本当に事件か何かに巻き込まれていたらどうしようという一抹の不安が過る。



「……エリチ、ごめんな。突合せちゃってさ」

「別に希の頼みだし、気にしないでよ」

目の前には抵抗する意思を挫かれた中年の男性が後ろ手に手錠を掛けられ、路地裏に転がっていた。

抵抗する意思を刈り取ったのは、意外なことにエリチで、手錠を掛けたのがうちだ。

この男は連続侵入者事件の実行犯で、今回も実行しようと思っていたらしい所を現行犯逮捕したっていうわけだ。

うちの持っている連絡網とエリチが持っている連絡網に、この男の特徴を伝えて一斉送信したら、今回偶々ヒットした感じだ。

「それにしても、良くこの男が犯人だってわかったよね」

「んー？ 昨日ね。あの子が急いで神社に入っていたから何かあったんかなって思いながら近くに寄ったらね。あの子をこの人が血相を変えて追ってたから特徴は覚えてたんだよ」

最近、世の中物騒だし覚えておいた方がええかな思って。と付け加えるように言うのと、エリチはふーんと声をあげる。

「じゃあ、それは納得したけど。なんで手錠なんて持ってるの」

「エリチと初めて会った頃、うち……」東條希が転勤族って話はしたやんな？」
「したね」

「うちが転勤族なんって、父親が凄腕の警察官なんよ。だから、色んな地方に行かないといけなくなってるね。手錠は新しい支部に行く際に最初は持参してたんだけど、どうせ新しい地方に行く際に支給されるんだから置いていくわって言ったのを聞いてパクッてたんよ」

同時に近くに誰もいないか確認をし、エリチにだけわかるように指で合図を出す。彼と一緒にいる時間が一番多いため、言葉を発せずとも意思疎通が出来るようになってきた。今回、エリチに出した合図は『今のは嘘だから』という意味。

こんな嘘を付いても通じるかどうかは微妙だったけれども、警察官の『東條』といえ、結構有名なので、今回は使わせてもらった。

犯人から事情聴取した際にそんな話が出たらごめんな。と内心、父親に謝りながらも、父親と大好きな彼女。どちらを取るかなんて決まってる。

彼女がこちらを見る可能性は限りなくゼロに近いかも知れない。けど、自分を見てくれないからと言って見過ごすわけにはいかない。

うちは笑ってる彼女が好きで、彼女の泣いた顔はもう見たくない。

『神田明神』で彼女の方泣した姿を目の当たりにして、うちは胸が苦しくなって、彼女をこんなにも泣かせた奴を捕まえて、滅してやろうかとも思った。

彼女から笑顔を消す要因はなくしたい。

そう思って、色んな人に協力を求めて今に至る。

現在進行形でエリチが警察に連絡を入れていた。

これはエリチから聞いた話だけど、うちの父親の友人らしき人がこの支部にいるらしく、すぐに向かいますと連絡をいただいた。

その際に警察官の方には、おもちゃの手錠ですが捕まえていますので、よろしくお願いしますと告げている。

これで一件落着けども、警官が来るまでに時間がかかってしまう。

しきりに携帯を見て時間を確認してしまう。嫌な予感がして仕方がない。穂乃果

君らに任せただけれど、やっぱり自分が行きたい。行って彼女を安心させたい。

「……行って来たら」

「え？」

話を聞き終えたエリチは小さな声でそう呟いた。

「あの子が心配なんですよ。行って来てもいいよ。事情聴取があったのなら、こっちでそう説明しておくし。もしかしたら、希の名前を借りることになるかも知れないけど」

「ありがとう。じゃあ、任せるわ。……今度、ご飯でも奢るわ」

「ハラショー！ 楽しみに待ってるよ」

満面の笑みを浮かべながらうちを送り出してくれる親友の心温かい気遣いに、とても感謝している。

一刻も早く彼女にあって安心したい。安心させたい。その思いが溢れ出たのかな。警察官がつくのを今か今かと待ち望んでいた。——結果、エリチにまでバレる始末。

「ほんま、光莉ちゃんには責任取ってもらわないとなあ」

こんなにも人の心を奪っておいて、自分一人のうのうと生活を送っているのはちよつと納得できへんな。

穂乃果君らが男性恐怖症をなんとかしてたら、キスの一つでも強請ってみてもえかかも知れへんな。

原因となった侵入者は捕まえて事件は解決したし、色々と頑張ったうちにご褒美の一つや二つあってもええよな。

——光莉ちゃん。うちな、どうしようもなく君のことが好きになってしまったよ。

この事件が解決したら。そして、『*M S*』の抱えている問題を解決したら、この気持ちも伝えようと思う。

でも、やっぱり侵入者騒動は解決したのだから、キスは強請ってもええかな。

ついに主人公がキスを……ハラショー!!

これは穂乃果ルートかな（フラグ）

第16話 ひかり

まず最初に前話を修正しました。

それに伴って物語に変更はありませんが、何処を修正したのだろうと気になった方は是非w

「……光莉ちゃんっ!!」

穂乃果、海未、ことりの三人と談笑しながら、家主を待っているといきなり家の扉が開き、希先輩の焦ったような声が耳に入る。

「希先輩？」

「良かった。無事で……」

目が合った瞬間に、希先輩は私を力強く抱き締める。

それでも、私は拒絶しなかった。いきなり強く抱き締められて困惑はしたけれど、別段痛くもなかったし、何より優しかったから。

「……いきなりどうしたんですか。希先輩」

「ごめんな。うち、めっちゃ心配してて、一刻も早く光莉ちゃんと会いたくて」

さらりと甘い台詞を息を吐くように言ってしまう希先輩に照れて、顔を見合わせないように視線を逸らす。

逸らした先に偶然テレビがあり、そこに映し出されていた映像に目を盗まれてしまった。

テレビに映し出されていたのは、私が最近、恐怖を感じた相手であり、その相手が警官によって連行されている姿。

当然、モザイクなどの処理はされているが、着用している服、顔のつくりなどの情報から特定するなんて被害者からすれば造作もない。

「えっ……」

それでも、いくらなんでも特定が早すぎる。

私が被害を受ける前に何回か事件が起こっていたとしても、警察の対応が早すぎる、まるで協力者がいたかのよう。

「おー、捕まったんやね。良かったな、光莉ちゃん」

——嘘だ。

犯人があっさりと逮捕されたことを嘘だと疑っているわけじゃない。けど、警官だけで犯人を特定し逮捕まで至ったわけじゃないはず。

それに、さっきテレビで不法侵入者が連行されている際の映像に見知った金色の髪を見た気がするから。顔までも見る暇はなかったけど、あの人はおそらく……。自分は何も知らないふりして。ずっと、私のために頑張ってくれてたんだね。

「……光莉ちゃん？」

犯人が捕まったというのに、何も反応を返さなかった私を不審に思ったのか、希先輩が顔を覗かせる。

心の奥底では何を考えているかわからないけれども、対価を求めずに、他人のた

めにそこまで努力出来る人はそうそういない。

裏で色々と実行し、表に立つことなんて滅多にない。けれど、必ず誰かのために
なっている。そんな縁の下の力持ち。

(本当に……)

思わず目尻に水滴が溜まり、溢れ出しそうになる。

急に泣き始めた私に動揺し、どうしていいかわからなくアタフタしている希先輩
に微笑みながら、私は彼の頬にキスをする。

「ありがとっ。希先輩」

私はきっと赤くなっているだろう。

鏡を見なくてもわかるし、見たくもない。でも、やっぱりそれだけ頑張ってくれ
たのにご褒美の一つもないのはおかしいと思ったので、衝動的に行動してしまった。

「……光莉ちゃん。ねえ、キスする場所で意味が違うって知ってるん？」

「うるさい……」

そんなの知ってるよ。

知っててそこにしたのだから、黙っててよ。今、色々と言われると恥ずかしくて死んでしまえそう。

「仕方ないな……。ことり君、買い物手伝ってくれへん？ うちの姫様の好きな食べ物でも作ってあげようかなって」

「あ、良いですよ」

そういって希先輩とことりは二人で一緒に買い物に出て行った。

数分が経ち、照れも引いた頃合いを見て、海未が口を開いた。

「先程、希先輩が言っていましたけど、光莉の好物って？」

「あー、そうだね。きつと希先輩のことだから五人分作るつもりだろうし、知っておいた方が嫌いな食べ物がないかとかわかるよね」

あ、いえ、そんなつもりではなかったんですが。と言い出す海未に若干惑いながらも、自分の好物を口に出す。

「洋食系が好きなんですけど、特にグラタンとオムライスが好きだよ」

オムライスは卵が半熟で生クリームを入れてふんわり仕立てにしたやつが美味しいよね。グラタンは特にこだわりはないけど。

「オムライスとグラタンですか……」

考え込むような仕草を取る海未。何か苦手な食べ物でもあったのかな。

心配になって声を掛けたが、返ってきたのは生返事。

「なんか、外見や思考は落ち着いてて大人なのに、好物が子供っぽいよね。光莉ちゃんって」

「いけない？」

穂乃果が茶化すように言ってくるので、意地悪な気持ちで芽生えてしまい困らせてやろうと思つて頬を膨らませながら呟く。

さつき、穂乃果には強引に唇を奪われたことだし、少しならやり返しをしても別に構わないでしょう。

「あ、いや、そういう意味じゃないんだけど。可愛いなって」

「か、かわ……っ。あ、ありがとう？」

返事に困らせて、アタフタさせようと企んで発言した私だったけど、何人もの女子を落とすつもりなのと思えるような笑みを浮かべながら褒め言葉を口にする穂乃果に心が振り子のように揺れ動く。

一度動いてしまった振り子は自然に静止するまでに時間が掛かる。スッと手を差し入れて強制的に止めれば、完全には止められないが、何もしないよりは時間は掛からないし揺れも少ない。

一般的な大ききの胸に手を当てながら私は気を落ち着かせようとゆっくりと息を吸い、そして吐き出す。

穂乃果も自分から言っておきながら少し恥ずかしくなったのか、頬がほんのりと紅潮していた。

（穂乃果はそうやって人のことを可愛いっていうけど、穂乃果も可愛いなあ）

男子に可愛いというのも、良いのか判断しかねるが、当て嵌まる単語がそれなので仕方ないよね。

勿論、私も赤面している。海未の立場から見れば、二人して何をしているんだとツッコミを入れられそうなくらい事態がおかしな方へと走り始めている。

——いつから私はこんなにも乙女思考になっちゃったのだろうか。

別に今更男であることに拘りたいとは思わないし、女であることに嫌悪感を抱いているわけでもないから、良いのだけでも。いつをきっかけにこうなってしまったのか疑問を隠せないでいる。

「……そういえば、このメンバーでいるのは珍しいですよね」

海末が不意に呟いた言葉。

今の雰囲気を変化させたい私と穂乃果は、その話題に勢いよく食らいついた。

「確かに。いつもはここにことり君がいるからね」

「誰か一人が欠けるなんて今まで考えられなかったからね」

ファーストライブまでは海末も弓道部の方を休んで、こっちを優先してくれたし。海末が部活で欠けることがない以上、他の人が欠ける心配はないから、必然的に誰も欠けることはなかった。

私が少し生徒会室に行っていたり、音楽室に行ったりしたけども、それとこれは話が別だ。結局のところ、私がいなくても、元の幼馴染三人はずっと一緒だったの

だから、違和感は何もない。

「……俺さ、最近ずっと思うんだ」

急に穂乃果が真剣な顔付きで語り始める。

それを海未と私の二人はじっと見つめ、耳を傾ける。

「ファーストライブ。観客はほぼいなかったけど、スクールアイドルを初めて良かったって」

「それは誰もが思っているはずです。きつことりも」

スクールアイドルを始めなかったら物語は紡がれないし、何より未来がない。

夢を叶える物語は虚空へと消え去り、消えゆく未来しかない学院生活を送るといふ地獄のような日々を送らなければならぬ。それなら、何でも挑戦して、失敗して。あーあ、やっぱりダメだったかと諦めがつく結末の方がマシだ。

「でも、生徒会長に言った言葉も本音なんだ。……このまま誰にも見向きされないかも知れないって」

「穂乃果……」

初ライブがああの結果だったなら、そう思っても仕方がない。

実際に踊って歌っていた彼らがそう思うんだ。不安もあるだろう。けど、結末はそう悪い方ばかりに動かない。

「本当はことりもいた時に見せたかったんだけどね。これを見て」

家から持ってきたノートパソコンの画面を二人に見せる。ノートパソコンという小さいモニターなので、二人は自然とくつつくような構図になるが、二人とも美少年なので、それはそれで絵になる。

とまあ、雑談はそれぐらいにして。画面に出てきたのは、某有名な動画サイトに投稿されている『μ's』の舞台映像。

『START DASH!!』を少ない観客の前で披露している三人の少年が織り成す始まりの映像。

「これって……」

「僕達の舞台映像。でも、いったい誰が？」

「誰かが気を使って録画してくれたのかもね。でも、気にして欲しいのはそこじゃなくて、ここなんだ」

画面をスクロールし、見せたスクリーンに書かれていたのは閲覧者が自由に書き込めるコメント欄。

そこに書かれているのは決して批判的な言葉ではなく、応援する言葉の数々——。ダンスも下手かも知れない。歌もお世辞にも上手だとは言えない。けれど、そんな彼らを否定する人は誰もいないし、存在させない。

「こんなにも君達を応援してくれる人はいるんだよ。だから、後ろ向きにならないで」

「光莉ちゃん」

「それでも、まだ前を向けなければ、私が精一杯の力で叩いてでも前を向かせてあげるから」

一度ネガティブな思考に捕らわれそうになっていた穂乃果。それにつられてマイナスに向かおうとしていた海未の両名は私の声援を聞いて、少なからず前向きにはなれたようだ。

苦笑交じりに穂乃果は「それは痛そうだから、遠慮しておこうかな。怒ったら海

未君より怖い気がするし」と言い、海未はそれに対して反論もせずに納得しているようだった。

『μs』で一番怒らせたら恐怖を感じる相手を差し置いて私が一番怖いとか酷くない。内心で怒り心頭な私だけけれど、せっかく良くなった空気を自身で潰す行為はしたくないので我慢。

今でも自分達の演技に対する評価をしてきている人らのコメントを見続けている二人の後ろに回り込み、二人の肩に手を掛けて、抱き着く。

「だから、君達は前を見てて。私がずっと付いてて、後押しは全力でするよ」

少しでも廃校問題を防げる望みがあるのなら、仄かな可能性に縋ってでも実行するべき。

『μs』という光が輝きを失いそうになっているのなら、私という光が付き添って輝きを取り戻す。

それが、きっと、私の役目だと思うから――。

主人公絶賛乙女化中なうw

誰がここまで乙女化すると予想していたでしょうか？

作者も予想外です（おいつww

まさか、光莉からキスをするなんて……。

とりあえずブラックコーヒーを飲みながら執筆してましたww

第17話 H e s i t a t i o n o f s m a l l b i r d s

今回の話はかなり短いです。

「……後はこれを買ったらオツケーかな」

「ねえ、希先輩。どうしてボクを連れてきたの。指名までして」

希先輩の家から数十分程歩いた先に点在していたスーパーにいるボクと希先輩の二人。

侵入者騒動が解決した記念に光莉ちゃんの好物を作って、皆で盛り上がろうと考えている希先輩だけど、その買い物に連れていく人選の基準がわからない。

穂乃果君と海未君を光莉ちゃんに付けておきたかったのか、それとも、ボクを一人引き連れることが目的だったのか。ボクとしてはおそらく後者が当たっていると思う。

——それも、きっと光莉ちゃんの件で。

「ことり君は、光莉ちゃんの何処に惹かれたん？」

「何処って。真っ直ぐなところですよ。……穂乃果君とは似て非なる真っ直ぐさですけど、行動力があって、一途って感じがして魅力的に思えましたし、外見も可愛くて」

「あー、もうええよ。うちと大体一緒やったし、穂乃果君や他の人と一緒やな」

穂乃果君が光莉ちゃんに好意を持っていることは知っていたけど、他の人って誰のことだろう。

ボクの目の前にいる人と穂乃果君だけでも手強い人らなのに、他にもいるなんて……。

「でも、だったら尚のこと今のことり君では、諦めた方が無難だと思うよ」

「え……?」

「……カードがそう告げてるんだよ。生半可な想いで接すると、お互いが不幸になるって」

何食わぬ顔で食材をかごに入れていく希先輩を呆然と見つめるしか出来なかった。

カードが告げているとネタのように言っていたけど、生半可な覚悟というワンフレーズのせいでボクの体は硬直してしまった。

彼女が自宅侵入された時、ボクはなんて思った？

——可哀想。

決して彼女を心配するような言葉じゃなかった。彼女を憐れむような思いでいた。

穂乃果君がお見舞いに行こうと言っていた時もそう。

ボクの意見は海未君に寄っていた。男性恐怖症になっているかも知れないから、今はあまり触れない方が良いんじゃないか。ボクが無理やり頼んだ『M.S』のマネージャーも辞めさせるべきじゃないかって。

でも、穂乃果君は辞めなかったし、男性恐怖症に陥り掛けていた光莉ちゃんに殴られつつも体を張ってでも彼女を安心させた。

その時の穂乃果君と光莉ちゃんを見て、ボクはなんて思った？

——羨ましい。

何も自ら率先して動こうとせず安全地帯を歩いていただけのボクに、それだけのチャンスが巡ってくるわけがない。

穂乃果君はいつだってそんなボクを見たことのない世界へ連れ出してくれた。けど、こればかりは彼に頼っていられない。

「……希先輩。やっぱりボクは光莉ちゃんが好きで、諦められないし、諦めたくも

ない」

「うん。知ってる」

「だから、あなたにも負けません。穂乃果君にも、誰にも」

幼少期から穂乃果君にはかなりお世話になっているし、自分一人ではたどり着けない高みへ連れてってくれる憧れの人でもある。そんな彼に対して恩を仇で返す真似はしたくないけど、光莉ちゃんは渡したくない。それ以外なら、どんなことでもなんでもする。

でも、光莉ちゃんだけは絶対に誰にも譲りたくない。

「……良い目になったやん。こりゃあ、うかうかしてられんなあ」

決意を新たにしたボクだけど、今は廃校をどうにかして、音ノ木坂学院を存続させるためにスクールアイドルを頑張ろう。

そして、それが叶ったら……ボクは光莉ちゃんに告白する。

今日から盆休みに入りましたので、執筆祭りじゃー！

……といきたいところですが、連続でイベントが入っているのでまったく書けないのですよねえ。ホント、辛い。

次回更新はおそらく来週ぐらいになると思われます。

そして、次回予告ですが、ここはまだ出ないです（確定
おそらく出番は二・三話後になります。

第18話　こころとからだ

盆休み中は更新しないと次回更新は来週だと今朝は言ったな。だが、嘘だw

さすがにあの文字数じゃあ、少ないなと思ったので急遽更新します。

翌日の朝――。

早朝からいつも通りに『M.S』の朝練を終えた私達は、一緒に音ノ木坂学院へ向かった。

その際に新しくメンバーに加わった、凜と花陽、そして真姫の三人とも一緒に話していたけれど、見事なまでに個性がバラバラであることに気付いて面白かった。

「……そういえば、真姫君」

「何ですか？ 高坂先輩」

「俺が勧誘してた時は『オコトワリシマス！』って断ってたのに、さっくり入ってくれたよね。なんで〜」

通学路を一緒に歩いている最中に、穂乃果が投げ抱えた質問。

それは二年生組全員が疑問に感じていたことだろう。凜と花陽が迷っていた際にも口添えしてくれた真姫。彼の心中にどんな変化があったのか。

「ん。マネージャーが可愛かったからですよ。光莉ちゃんが可愛くおねだりしてくれたので、入ることに決めたんです」

「なっ！ 誰がおねだりしました!? 誰が！」

「え？ だって、最初だって歌詞を俺に渡して可愛い声で『……待ってる』って言うてたじゃないですか。それに、講堂の時でも……」

「歌詞カード渡した時のおねだりじゃなくて、お願いだし。講堂の時は褒めただけだよ。後、私、先輩だからね!？」

いきなり私を弄りだす真姫に、必死になって弁解する。怒りか羞恥心か、もしか

したら両方の気持ちが存在しているからかも知れない。頬を赤く染め、気付かれなように振り払うように大声を出す。

若干照れ隠しが入っていたため、怒鳴るように言ってしまったが、誰一人として気にすることなく聞き流していた。

最近になって私を弄ってくるものが多くなってきた気がする。

「……練習ついて来れそう？」

「え？」

「ほら、私が結果的に強引に誘ったみたいだし、練習について来れそうかなって。勿論、凜君と花陽君もだけど、練習きつくなかった？」

不意に思った疑問を打ち明けるように一年生組に呟くように問い掛ける。

真姫、凜、花陽の三名は互いに顔を見合わせ、同じタイミングで苦笑を浮かべた。人がせっかく心配しているのに、打ち合わせしたように笑うとは……。そんな態度取るなら、もう心配してあげないから。

「大丈夫ですよ。凜は元運動部でしたし。かよちゃんはアイドルに憧れて体作りして

たもんね」

「凜君?!? なんぞ知ってるの。黙ってやってたつもりなんだけど」

「かよちゃんは甘いよー。誰にも気付かせずにやるならもつと徹底的にしないと」

そっか。そういえば、凜は『μs』のファーストライブの日、花陽を陸上部の見学に連れ出そうとしてたっけ。

風貌も運動部系って感じがするし、納得した。

花陽君が練習について来れているのも、憧れから来る意識なら合点がいく。

「真姫君は？」

一年生組で何やら話し合っていた際に、お互いを名前で呼ぶことを決めたのだろうか。凜が真姫を名前で呼び、質問していた。

「俺はまあ、普通ですよ。ハードな練習なら多少はキツイって思うかも知れないですが、今のところは普通ですな」

凜や花陽となら距離が少しだけ縮まったかも知れないけど、やっぱり二年生組とは距離を取っているのか間に壁のようなものが見えた。

彼が本当の意味で『μs』に溶け込める瞬間はいつになるのか。凜は運動部で、

花陽は他のアイドルファンと仲良くした経験でもあったのか、コミュニケーション能力は良かった。

おそらく立場や境遇が影響しているってのは、確かにあるんだけど。距離を保とうとする言動を控えて、積極的にこっちに来てくれたら良いのに。

人付き合いが苦手な今の真姫君には、難しい問題なのかな。まあ、時期に気難しい問題はすべて解決すると思うし、今は放っておいても大丈夫だよな。

ファーストライブの時とは違い、これは時間を掛けてじっくりとやって良い問題なのだから。

「光莉ちゃんもすればいいのに。一緒に練習」

「あー、えっと、一度やってみただけどね……。海未君に断われちゃって」「当然ですっ！」

一緒に練習したいなあと言いつ出した凛に私が練習に参加しない理由を口にしていくと、話の中で名前が出た海未本人が会話に参加してきた。

私が練習に参加しないで練習メニューなどが記されたバインダーや記録表を手

しているかという、これには深い理由わけがあったはず。

「あれは最初の練習日のことだったのですが、四人で一緒にランニングをして着替える際のことです。……僕達がいるにも関わらず、この子は一緒に着替えようとするんですよ!？」

——うん。思っていた以上に深い理由なんてなかったよ。

簡単に言ってしまうと、その当時はまだ女の意識なんてなくて前世と同じような感覚だったんだよね。

今は……うん。

あんな恐怖体験をしたせい、わからなくなっちゃった。

元男だから仕方がない一面もあるのだけど、現女としてはやっぱり男の意識が隙を作ってしまったが故にあんな騒動に巻き込まれたんじゃないかと思って、女らしくして、きちんとガードも強くしようと思っただけだ。

どちらが正解なのか。そもそも正解があるのかすらわからない。

今のまま『片桐光』を隠して、『片桐光莉』の振りをするのが良いのか、『片桐光』

を通した方が最善なのか。

あの不法侵入者の件があるまでは、一人の際自然と『俺』って言えてたのにな。今は意識しないと俺って言えないようになってしまっている。知らない中年の男に追われて、情緒不安定になったからかな。

事件が解決して安らぐ時間があるからこそ、今はこうやって冷静に振り返ってみることが出来る。そう考えると、私って希先輩に助けられてばかりかも。

階段から転落してしまった時から今に至るまでずっと……。

さりげなく胸とか触ってきた事例があるわけだけど。本気で嫌だったわけじゃないし。以前はいきなりのことだったから、びっくりして早く手を離して欲しかったわけで、最初から意識してる今だったら別に……って、何考えているんだらうね。

——でも、やっぱり何度も助けられると、ちょっとね。意識しない方が難しい。この『片桐光莉』に精神が引つ張られてきているのかな。こんなにも希先輩に好

意を抱いているのは。

今も一緒に登校している穂乃果にも、好意を抱いているのもきっとそうなのだろう。

「……光莉ちゃん。何してるのさ」

過去にやらかしてしまった失態を数日経った後、掘り返されるといふ悪魔の所業をしでかした海未を軽く睨み付ける。それから、呆れるような表情を浮かべている真姫に必死に訴える。

隣を歩いているため、必然的に首は上向きになり、少し首が痛い。

「ちよっとうっかりしてたんだよ。最近はそんなことしてないよ。だから、心配しないで」

「別に。心配してるわけじゃないし」

ふふっ。本当に素直じゃないなあ、真姫君は。

見た感じだと少し照れ隠しが入っているみたいだし、満更でもないってところかな。

真姫君もほっとけない感が全身から溢れ出て、好意的になっちゃうかな。

この子、放っておいたら人付き合い関係で問題が出て来そうで、若干怖いんだよね。まあ、穂乃果みたいに目を離れた隙に何かしらトラブルを引っ提げて帰ってきそうなやんちゃっ子じゃない分、まだ扱いは楽だけれども。

七人で一緒に登校し、学校に着いた瞬間。

私は見知った顔を見つける。相手はまだ学校に入る前で、真反対の道をこちらに向かって歩いて来ていた。

約束をしていたので、六人に先に行っておいてと一言残して、私だけ校門から先へ入らずにその人の方へ走っていく。

「おはようございます。先輩」

「あ、アンタは……あの時の」

「これ、約束の物です」

そうやって鞆に大事に保管していた『A・R・I・S・E』のサインボールを渡す。自宅に侵入者がいたので、もしかしたら荒らされていてなくなっているかも知れない

と危惧していたのだが、あって良かったよ。もしも、なかったらにこ先輩に嘔吐き扱ひされて、裏切り者認定されていたかも知れない。

『*μs*』が夢を叶えることこそが私の望み。それなのに、自分でその望みの翼をへし折るなんてミス絶対にしたくない。

廃校問題までに猶予はあまり残されていない。けど、焦りは禁物。一つ一つ物事を慎重に進めなければ。

「……ホントにあったんだな。ありがとう」

「いえいえ。それでは、私はこれで」

鞆のファスナーを閉めて、何故か校門前でこちらを心配そうに見ている六人のもとへと向かおうと踵を翻し、歩き出そうとした瞬間。

真後ろにいるにこ先輩から「なあ」と呼び止める声が聞こえて、足を留める。

「大丈夫なのか？ 部屋……変な奴に侵入されてたんだろ」

「……大丈夫とは言えないよ。今もちょっと男性は怖いし」

「だったら……っ！」

「でもね。やっぱり今は幸せだから」

ほぼ初対面に近いような関係である私のことをここまで心配してくれるにこ先輩は本当に他人想いな人だ。

人一倍努力家で、必死で、ひたむきなこ先輩。

アイドル研究部だって、趣味があった人と一緒にやっていこうと思っていたはずだ。でも、人一倍真剣だったが故に、他の人がついて来れなかった。

「……それは、あいつらがいるから？」

あいつら。それは直感で『μs』のことを指していることは安易に予想できた。だから、私は嘘で塗り固めるような無粋な真似はせずに、首を縦に振る。

男性が苦手になって『μs』をやめそうになっていた私を止めてくれた穂乃果、私を『μs』に誘ってくれたことり、私の悩みを律儀に聞いてくれて適切なアドバイスをくれる海未。

私の言葉を信じて入ってくれた三人がいて、希先輩が助けてくれた。だから、今の私がいる。笑って言えるんだ。

「うん。『μs』が大好きだから！」

私の満面の笑みと共に口から放たれた言葉が心底嫌だったのだろう。ここは少し悔しそうな顔をした後、目線を下に下げ顔を隠したまま校舎へと向かっていく。

『M.S』のメンバーが勢揃いしている横を通る際、「アンタらは絶対に認めない」そう言い残して――。

・作者の脳内

現在、フラグが立っているのは、ことり・真姫・穂乃果・希です。

フラグが立っていないのは、海未・ここ・凜・花陽・絵里となっています。

また、海未のフラグはいまだに立っていません。初期メンバーであるのにこの扱

い……というわけではなくて、フラグを立てる場所は予め決めているのでそれまでは立てる予定はないです。

には次回から本格参戦ですね。

凜・花陽はもしかしたら二期までフラグが立たない可能性が

ww

絵里は……お察しの所までないですね。

とまあ、こんな感じとなっています。若干のネタバラシをしちゃった感がありますが、大体の話は原作に寄せているので問題はない……と思います。

第19話 矢澤にこ

これで正真正銘、打ち止めです。

皆さん、良い盆休みを!!

梅雨入りしたこの日からずっと、雨が続いており屋上での練習が困難になってきて、やっぱり部活として部室が欲しいと思った私と『M.S』のメンバー全員の名前を書いて部活申請の用紙を手に、生徒会室へと向かった。

最初のころは人数が少なくて通らなかつた申請だけど、今は七人もいるんだし、絶対に通る。そう誰もが思っていた。

「アイドル研究部？」

「既にこの学校にはアイドル研究部というアイドルに関係する部活が存在します」

「まあ、部員は一人やけどね」

「え、でも、この前は五人以上必要だって……」

「穂乃果。良く考えてよ」

設立には五人以上必要だけど、存続には人数がいらないんだよ。別に一人になるのが別に構いやしない。人数がいるのはあくまで設立のみだから。

私が事細かく説明したことによって、穂乃果は理解と納得をしたらしい。時間を見計らって、生徒会長である絵里先輩が口を開く。

「ということなので、この話は終わり」

「——にされなくなかったら、アイドル研究部と話をつけてくることやなあ」

「希っ!？」

「二つの部が一つになるなら問題は無いやろ？ 一人ぼっちの部活の問題も解消されるし、これ以上申請を何度も持ってくる可能性もなくなるやろし」

こちらに向けてウインクを一回飛ばしてくる希先輩。

絵里先輩はこっちで説得しとくから、そっちのアイドル研究部での説得は任せるよと視線から読み取ることが出来た。

生徒会長という壁がなくなった以上、不安要素はアイドル研究部であるその生徒との交渉だけになるが。それは簡単に済むだろうか。

「とりあえずアイドル研究部の部室に行ってみようか？」

私の言葉を聞いたメンバー一行は、アイドル研究部の部室へと向かう。

背中越しに、生徒会長が希先輩に対して味方発言を何度もする理由を追求している声を聴き流しながら。



アイドル研究部の部長である『矢澤やざわにこ』と巡り合ったのはただの偶然だった。一度目は偶々出会って、二度目は今日の今朝方にサインポールを渡したあの瞬間だけ。でも、それは私だけの場合らしい。

『μ's』のメンバーはそれ以外に会ってみたいだ。

にこ先輩の姿を見た彼らは、驚愕を隠しきれてはいなかった。

「あなたがアイドル研究部の部長なんですか!？」

一瞬の硬直ではあったものの、彼らが動きを止めた瞬間を見計らってにこ先輩はアイドル研究部に立て籠もる。

中で物凄い音がしているので、先輩がこの出入口を荷物で塞いで時間を稼ぐつもりなのだろう。

「外から回り込むにゃ！」

「私も行く！」

走り込むと暑くなるため、着ていたブレザーをことりに投げ渡し、凜と共に渡り廊下に向かって疾走する。

獲物を追い掛けるというシチュエーションが凜の野生魂にでも火を点けたのか。語尾に自然と「にゃ」と付けており、幻覚だろうか頭の上に猫耳が見えた気がした。でも、男子にしては声が高く、顔も少女寄りなので、違和感がない。言ったら怒られそうだけでも。

外はまだ雨がぱらついているが、一刻も早くにこ先輩を拘束したい私達は構わずアイドル研究部の窓へと一目散に走っていく。

見れば、窓から脱走しようとしているにこ先輩と目が合った。

「待てにゃー!!」

「待てと言われて誰が待つか！」

そりゃあ当然だよね。

追い掛けられるのわかって脱走しているんだし、捕まらないように必死で走
よね。

だけど、走り込みをしている凛の前では先輩の体力はそこまで多くはないよう
で疲れ始めたにこ先輩。それを見逃さずに凛は両腕を使って捕まえていた。

——が、凛が呼吸を整えている一瞬、腕の隙間が出来たのを狙い、にこ先輩は
しゃがむことで、拘束を解き再度逃走を始める。

「……ふふん。こんなところで捕まるオレじゃないんだよ」

当然、最初からこうなるんじゃないかと思っていた私は先回りを開始していた。
おそらくこのままいけばアルパカ小屋近くで捕まえられるんじゃないかとそう

思っていた。

「せ、先輩！前、前っ!!」

呆けていた凜ですら驚きを隠せない状態になった。

後ろにいる凜を警戒するあまり、前を見ずに全力疾走していたにこ先輩は、アルパカ小屋へと一直線。

危ないと思った私も全力で走って、にこ先輩へと近付く。

「や、やばっ!!」

このまま直進すればぶつかり、右方向には木があり、左にしか急に方向を変えられる場所がない。そう考えたにこ先輩は迷わずこっちの道を選んだ――。

「……えっ」

助けようと思って動いた私に向かって――。

思い掛けない出来事に見舞われながらもブレーキを掛けようとしたにこ先輩の瞬発力は凄いと思ったが、既に手遅れ。

私にはこ先輩に押し倒されるように、後ろに一緒に倒れ込む。

にこ先輩が咄嗟に頭を庇ってくれたおかげで頭に衝撃はいかなかった。けれど、

倒れ込んだ場所がいけなかった。水飛沫がバシャッと上がり、全身が隈なくびしょ濡れになってしまった。

「い、いたたた……。大丈夫？ ひか……」

「うん、平気。助けてくれてありがとう」

上に覆い被さっていたにこ先輩が自力で立ち上がり、押し掛かるものがなくなつた私も立ち上がるが、びしょ濡れになった制服が気持ち悪い。

肌に貼り付く感じが不快感を増す。とはいえ、不快感が芽生えたのは、男子に押し倒されたからではなく、制服が肌に貼り付いているからという。男性恐怖症にならなくて本当に良かったと自分に安心した。

「……それ、着てなよ」

にこ先輩は私から視線を背けながら、肩に何かを掛けてくれた。少し水に濡れてしまっているけど、さっきまでにこ先輩が着用していたブレザーだから暖かい。私の肩に掛けられた物を見て、理由を考えた瞬間。そこでやっと気付いてしまった。

今まで私は白の長袖のカッターシャツの姿でいた。

外で雨がぱらついていることを知らなかった私は全力疾走をするからといってブレザーを脱いで、こたりに預けてしまっていたからだ。

水に濡れた白のカッターシャツがどうなるかなんてわかる。

目線を落とした私の目に映ったのは黒の下着……。貸してもらったにこ先輩のブレザーに急いで袖を通し、前のボタンを留める。

同年代の男子に比べたら少し小柄なにこ先輩だけど、私の身長からしたらまだ大きい。若干大きめなブレザーを着ていると、凛がこちらに向かってきていた。

「大丈夫？」

「あ、うん。大丈夫だよ。先輩が庇ってくれたから」

「……まあ、先輩だしな」

結局は逃げた先輩が悪い気がしなくもないけど。と悪気はなかったのだろう凛が言った瞬間に、にこ先輩は若干申し訳ない表情を浮かべたが、私達と一緒に部室に戻ることを承諾してくれた。

私のことを気に掛けてくれていたのだろうか。そしたら、嬉しいな。

……でも、なんでこんなときに限って黒の下着を着けてたのよ。私のバカ。

あれだよね。朝のニュースが悪い。ラッキーカラーが黒だって言うから、気分的に着てみようかなって思っただけだし、ラッキーどころかアンラッキーだよ!!

第20話 アイドル研究部

続けてどーん!!

19話を仕上げてから2時間の突貫作業でした。

……意外と出来るものですねw

アイドル研究部にびしょ濡れなまま戻ると、決まって全員に心配されたけれども、特に酷かったのは海未だ。

穂乃果達はそこまで心配してないのか、海未が過保護過ぎるのかは判断が付き難いが、穂乃果達の意識はアイドル研究部の内装にいていた。

「……光莉、大丈夫？ 寒くないですか？」

「大丈夫だよ。海未君」

薄情だなとは思わないけど、もう少しぐらい心配性になってくれてもいいんじゃないかな。

海未は優しく濡れてしまった私の髪を撫でるように何度も所持していたタオルで拭き取ってくれて、私の鞆に入っていた小振りなドライヤーで乾かしてくれる。

手付きがとても優しく、なんだかお母さんにしてもらっているような雰囲気を感じ取ってしまった。こっちの海未は男子だから、お父さんかな。でも、一つが丁寧で凄く気持ちいいんだよ。

「うわあ〜！ すっごい！」

「A—RISEのポスター!!」

「あっちは福岡のスクールアイドルか」

部室の中は全国の中で特に注目されているスクールアイドルのポスターで埋め尽くされていて、棚の中身もスクールアイドル関係のCDやDVDなどが並べられている。ここだけ見ればスクールアイドルの専門店のような品揃えだ。レンタルシヨッ

プみたい。

校内にこれだけの物を置いていても良いのだろうか。セキュリティ的な意味でも、校則的な意味でも。

誰しも驚きを隠せない中、花陽は別段驚いていた。手には分厚いDVD BOXを持っていた。

「こ……これは伝説のアイドル伝説DVD全巻BOX！ 持っている人に初めて会いました」

「ま、まあね」

素、なんだろうけど。

アイドル関係のグッズを見た際の花陽のアクションだけ、いつもの花陽とはまったく違う気がする。まるで三倍の速度で動いているような錯覚が。

「へえ、そんなに凄いなだな」

「し、知らないんですか!？」

あ、穂乃果が地雷を踏み抜いた気がする。

花陽が熱く語り始めたのをきっかけに、私はそちらから意識を逸らし、海未とこ

とりと会話をしようとしたその時だった。

ことりの視線が一点に集中しているのに気付いた。

「ことり君？ どうしたの？」

「あ、それ。気付いた？ 秋葉の伝説執事ミナリンスキーさんのサイン色紙だ。まあ、オレも会ったことはないんだけど。ネットで手に入れただけだし」

露骨にほっとしたような様子のことり。

あ、こっちでは伝説執事なのね。てか、伝説バトラーの言いやすくして良いような気がするけど、それって私だけなのかな。

「とにかく、この部屋すごいっ！」

早く会話の方向性を変えたいのか、ことりが大きめな声で言い放った。

それを合図に、穂乃果もここへ来た内容を思い出したのか。にこ先輩に対して告げた。

「アイドル研究部さん！」

「にこでいいよ」

「にこ先輩。実は俺達スクールアイドルをやってまして」

「知ってるよ。どうせ希辺りに部にしたいなら話をつけてきいやって言われたんだろ」

「おお。話が早い」

私達は生徒会室からこっちへ直でやって来た。希先輩に先回りする余裕なんて絶対にない。要するに話が早いわけではなくて、以前から言われていたんだろうね。さっきの生徒会でも一人ぼっちの部活がどうのこうのって希先輩が言っていたし、このままズルズルと一人でやっていたら部費の問題とかがあって、生徒会からこっちに話があったのだろう。

その際に希先輩から告げられた話の中に、この話題があったのだろうね。

音ノ木坂学院のスクールアイドルがいて、その団体が部活にしようとしているという話だ。

「お断りする！」

「えっ？」

「お断りだって言ってるんだ！ 言っただろ？ あんたらはアイドルを汚している

んだ！」

「でも、ずっと練習してきたし歌もダンスも……！」

「そういうことじゃなく。あんたら、ちゃんとキャラ作りしてるか？」

「キャラ？」

にこ先輩が言っているキャラの意味がわからないのだろう。

メンバー全員がきょとんという表情を浮かべていた。

「そう、お客さんがアイドルに求めるものはそれは夢のような時間だろ？ だって、それに相応しいキャラってものがあるんだよ！」

確かに夢のような時間ではあるよね。

女性が男性アイドルを追い掛けている時間も夢のようだし、結果的に財布の中身は夢のように儂くなくなっていく未来が見えるけれど。

でも、キャラ作りまでするのは、ちょっとヤラセくさくないかな。

「ったく、しょうがないな。いいか……例えば」

私から距離を取って後ろ向いたにこ先輩。

そして、振り返ったにこ先輩が口を開いた——。

「にっこにっこにー！ あなたのハートににっこににー！ 笑顔届ける矢澤ににっこー！ にこにーって呼んでラブにこ!!」

……これ。どういう反応をしたらいいのかな。

男子になってちよつと変わってたりするのかなと期待してた分、まったくおんなじでどう反応していいのかわからないだけだ……。妙に女顔でハスキーな分、似合っていないとも言えないし、でも、やっぱり男としては何か微妙な感じがして。

「どうよ？」

「これは……キャラというより……」

「俺、ちよつと無理」

「ちよつと寒くないかにゃー」

メンバーからしてもドン引きしているみたいだ。

うん。わかるよ。その気持ち……。実際に前世の自分にやらせてみたらどうなるか想像しただけで、ちよつと気持ち悪かった。

「そのあんた。今寒いって言った？」

「いえいえ。と、とてもかわいかったですよ！」

「あ、でもこういうのも良いかもですね！」

「そうですね。お客様を楽しませる努力は大事です」

可愛かったというのは、男子に対して褒め言葉であるのだろうか。

今の台詞はおそらく可愛さ路線を目指しての台詞だろうから、褒め言葉で良いのかな。

「よし。これくらい俺だって！」

「出てけ！」

「えっ？」

「とにかく話は終わり。とっとと出てけ！」

アイドル研究部の部室から強制的に追い出されたメンバー一同。

私はとりあえず制服が乾くまでいても良いということなのか。私だけは追い出されなかった。

「……遅いんだよ。今更」

「にこ先輩」

一度、裏切られて一人ぼっちになってしまったにこ先輩の悲しみは痛いほどわかる。

スクールアイドルの頂点を目指して共に練習して、共に悲しみも挫折も解り合っ
て、共に喜んで。そんな関係を目指していたのに。自分の高過ぎる目標について来
れなくなったメンバーがいなくなり、一人ぼっちになった。

「にこ先輩は『μ's』が嫌いですか？」

「えっ？」

「確かにパフォーマンスはまだまだで、今でも発展途上でしょう。アイドルとして
の誇りを大事にしているにこ先輩からしたら目の毒かも知れないです。……でも、
ありさまも嫌いですか？」

次第に視線を落とし、じつくりと考え込むにこ先輩。

そんな彼の様子を見て、私は席を立ち、アイドル研究部の部室を後にしようと足
を踏み出す。

「……嫌いじゃ、ないよ」

ほんの小さな声音だったけれど、にこ先輩の本音が漏れた。

「あいつらが人一倍も努力してるのもわかってる。けど、もう遅いんだよ！勝手なものもわかってる。でも、オレは二年前に一人になって、何も出来なくて……。今になってオレの気持ちをわかってくれそうないつらがスクールアイドルをして、楽しそうに、毎日を送っていて。せめてあと一年でも早くしてくれていたらって。思ってもしょうがないだろ!!」

正直に言ったら私や穂乃果達に辛く当たってもしょうがない。

おそらく、にこ先輩にもわかってているはず。それでも、誰かに当たらずにはいけないのはきつと、誰よりもスクールアイドルが大好きで本気だったから。そして、今も――。

一年生の途中でメンバーが次々と辞めていき、一人ぼっちになって約二年間も何も出来なくて。気が付けばもう受験生。アイドルなんて現を抜かしている場合じゃない、か。

……ホント、この人も不器用だよな。

私はもう一人、彼に似た人を知っている。

父親が経営する都内でも屈指の総合病院の一人息子で、一年生ながらに勉学に

励み、一生懸命に後を継ごうと毎日毎日勉強をして、音楽という夢を捨ててまで、そっちの道へ努力し続けた頑張り屋な少年を。

今は音楽と医学。両方を道を得るために、頑張っているみたいだけど。

「……バカですね。にこ先輩。確かに思っても仕方ないですよ。でも、今から始めても遅いなんて誰が決めたんですか！」

「え……」

「確かに先輩は今年度いっぱい卒業します。進路のこともたくさんあるでしょう。でもね。それは、半年以内に廃校問題もどうなるかわからない穂乃果達と似たような境遇なんですよ。でも、彼らは遅いだなんて思っていない。時を巻き戻したなんて思っていない。誰もが今を楽しんでいるんですよ。だから、『μ's』はあんなにも輝かしく見えるんですよ」

思い付きで事態をどうにかしようとするバカなリーダーを筆頭として、彼らが増えて今や六人となった。

スクールアイドルのトップである『A-R-I-S-E』は確かに強大かも知れないし、魅力もあっちの方が格段に上であると断言出来る。けど、『μ's』から目が離

せないのはたぶん、そうせざるを得ない何かがあるから。
それを持っているのはきつと、人を動かせる力がある穂乃果だ。

「だから、にこ先輩。『H.S』に入ってくれませんか」

感情を一気に吐き出してしまったからか、涙ぐんでいるにこ先輩の頭に彼のブレーザーをかけて、私は言う。

「恥ずかしがっている場合じゃない。」

「にっこにこにー!! ですよ。にこ先輩」

「……ぷっ。恥ずかしがるならやらなければ良いじゃん」

「うるさいです」

頬を赤く染めながら羞恥心を抱きながらも実行する私の姿がさぞ滑稽に思えたのか、にこ先輩からやっと笑顔が漏れた。正真正銘、心から笑っている笑顔が。

「……返事、今日じゃなくていいです。明日でも明後日でも良いので、穂乃果にま
でお願いますね。あ、ブレーザーありがとうございますでした」

そういつて鞆を手に、一目散に部室を出ていく私の背中に聞こえた気がした。「気

持ちなんてとっくにアンタらに傾いてるっての」という、にこ先輩の本音が。

明日はきつと、良い日になるだろう。

誰もがにっこりと笑えるようなそんな日が――。

これから複雑な物語にしていく予定ですので、にこ編までは終わらせておこうと思いい投稿しました。

これが正真正銘の打ち止めです。

第21話 部活動紹介

過去最長話となったはずです。

盆休み最終日からちよくちよくと書いていたのを投稿します。後のことは後で考えます
ww

……ストックした方が良かったかな（本音

「……え、えっと、これっていいたい」

「ほら、笑って笑って」

にこ先輩が正式に『μs』に加入した次の日。

アイドル研究部に入部する届けを『μs』全員が提出し、晴れてアイドル研究部の部員兼『μs』として活動する旨を了承せざる得ない状況へ追い込んだ。

否定したい気持ちは少なからずあるだろうが、こうなってしまった以上は認めてしまおうしかない絵里先輩の気持ちはまあ、わからないこともないけど、これも活動を存続させるためには仕方ない。

そんな感じに提出した時のことだ。

希先輩の方から『μs』の練習風景を撮影したり、インタビューをしたいという提案がされたのは。

そして今に至る——。

「でも、なんで私なんですか！ 私は『μs』であってもマネージャーですよ？」

「ええ、いいやん。『μs』の美少女マネージャーってことで」

いや、美少女って……。

てか、インタビューって普通はメンバーにするものじゃないの。って言うと、穂乃果らは揃って「いや、俺ってインタビューとか苦手で、練習風景で許してくれ

るっていうから」と言った。あ、勿論、台詞は一律していないけれど、内容はほぼほぼ似たような感じだ。

その代償として、インタビューは私に一任すると。

「……今日の練習メニュー、倍にしてやる」

練習メニューの管理をしているマネージャーを怒らせたことを後悔するといい。特に今日の練習は撮影してくれるみたいだし、念入りに行わないとねえ。真面目に活動していて、『μs』は本気であることを学校中にアピールして応援してくれる人を増やすことから始めないと。

「そんなに照れ隠ししなくてええやん。相手もうちなんやし気楽にやろ」

「でも、録画したらそれが全部視聴者に伝わるわけじゃないですか」

「まあ、そうやけど。うちは普段通りの光莉ちゃんの言葉で、ありのままにええと思うな。着飾らなくても光莉ちゃんは魅力的だし、きっと『μs』の魅力も伝わるよ」

ありがとう。と短く礼を言って希先輩との対話を終える。

早々に終えないと何を言われるかわからないから、ちょっとでも早く逃げたのかも。このままズルズルと引き摺っていても、希先輩は絶対に折れないことを理解していたからだろうか。私は軽く諦めが入っていた。

自分の意識を通したいという気持ちが半分を占めていて、半分ぐらい諦めが混じっていた。そして、ほんのちよつとの羞恥心。先輩は「やらない」というこの意見を通してくれないと思っていたから。それならきつと、一緒に住みだしたからこそその弊害だろう。

希先輩ならこうするああ言うと言った行動が安易に想像がつくようになってしまった。

——だけど、嬉しかった。

(……あれ、私って元々こんなだったっけ?)

「……そんなお世辞を言っても今日のメニュー一品も増やさないからね」

一緒に住んでいることは二年生組以外には言っていないので、小さな声で希先輩

にしか聞こえないぐらいに眩く。

「えー。って、今日の当番はうちじゃん」

「いいの。今日ぐらい」

「素直じゃないなー」

これ以上喋っても終わりは訪れない可能性が高く、時間を更にかけるわけにはいかない。諦めて取材に応じることにする。

取材は悉く一般的なもので大喜利のように面白いわけもなく、真面目に質問と応答を繰り返していた。

途中で何度かネタを入れたいなという目を希先輩はしていたが、睨みつけるような視線を送ることで止める。それも質疑応答の最初の方だけ。最後の方は真面目に取材をしてくれた。

今覚え、ふざけた態度を取っていたのも私が緊張しないように気を回してくれたのかもと思う。

「……こんな感じかな。良い記事出来そうや」

「それなら良かった」

もしかして希先輩が作るパターンなのかなと思っていたが、実際に部活動紹介として取材記事を纏めて制作するのは、新聞部だそうだ。

新聞部さん、ごめんなさい。上手く纏めてくれると助かります。私って結構、口下手だから内容がわかりにくいかも知れないけど。

——私の取材で『μ's』をきちんと理解してくれたらいいな。

「さてと、私のインタビューが終わったところで、早速練習始めるよ」

インタビューを受けている最中に思いついた少しハードな練習メニューを実行することにしよう。

特に傍からニヤニヤと口角をあげながら見ていた穂乃果の練習は誰よりも辛いものにする。これは絶対だ。

練習が開始される前の軽い打ち合わせから録画するつもりなのか、希先輩はビデオカメラの電源を入れ、録画ボタンを押していた。何故、録画中なのかかったの

かというところ、録画中はランプが光る仕様になっていたので、実際に録っているのかはわからない。レンズをこっちに向けている時点で録画はしていると思うのだけどね。

「準備運動と柔軟は終わってるだろうから、さっそく振り付け練習からいくよー」にこ先輩が加入する前から制作に掛かっていた新曲の振り付けを少しずつ考えていたので、その練習をすることにする。

新しいPVを作る際はその曲でPVを作って、新しいメンバーの紹介をしたいし。歌詞も少しずつ海未が描いていっているみたいだし、作曲の方も順調に進んでいる。衣装は海未と真姫の意見を入れて曲に合わせて随時制作中らしい。ことり曰く『不思議の国のアリス』をモチーフにしてみたい。……何故か、私の衣装まで用意されているみたいで、それだけが少し理解不可能だよ。制作費の無駄遣いでしょ。って思ったんだけど、何でも臨時収入があったらしく、上機嫌で作業していたので止められなかった。ちなみに私の衣装は『アリス』だった。

穂乃果と真姫が帽子屋。花陽と凜がチェシャ猫。にことりが海未が白ウサギをモデルにしている。女子から男子になったことで、配役といいますが衣装のデザ

インが急変したり、誰がどの衣装を着るかがだいぶ変わってしまっている。

「あ、これ、にこ先輩が持っていてね。皆には既に渡してあるやつと一緒だから。余裕があったら練習しててね」

練習を始める前ににこ先輩に手渡した紙は、『これからの S o m e d a y』の振り付けを自己流に纏めているものだ。と言っても、作詞作曲が終わっているところまでなので、途中から書けてない。一応、私は記憶力が良い方に属するのか前世で何度もライブ映像を見ていたおかげで完璧に覚えていたのが幸いした。

「任せてな。今日明日で完璧に踊れるようにしてやるよ」

自慢げに言い放ったにこ先輩に一抹の不安を覚えつつも、練習を開始する。

これ以上、無駄話を増やして、『μ's』の印象が悪くなるのは避けたい。あのツンツン時期の絵里先輩に見られなどでもしたら、火に油を注ぐ結果になるのは明白。「じゃ、いくよ。全員揃ったところからだから、サビからね」

スイッチが入った『μ's』メンバーの顔から“お遊び”等の色は抜け落ち、“真剣”という色に染まっていた。

一度、スイッチが入ると彼らは本気で練習に取り組んでくれる。が、その分、ス

イッチがオフになると彼らは一気にだらける。穂乃果なんて極端に、だよ。「疲れたー」なんていって汗だくなまま私に抱き着いてくるんだし。別に汗臭いから離れろとか引っ付くとか思わないけど、休憩中に真姫が鋭い目付きでこっちを見てくるんだよ。言葉を付けるなら「……何やってるの」って感じかな。しかも、無茶苦茶、機嫌が悪いパターンね。

ことりもなんか様子が変わだし、海末はまたですか……って呆れるし、凜と花陽はいいなあって期待の眼差しで見えてくるんだよ。

振り付けの練習は遅くまで行い、予め設定されていた収録時間いっぱいまで続いた。

途中で何度か休憩は挟んだものの、彼らの披露はピークに達していた。

希先輩が戻る時間になった今では、建物に背を預け、四肢をだらんとさせながら座り込んでいるメンバーがいた。というか、ほぼ全員だった。練習中に何回も叱咤し、他のメンバーよりも厳しく指摘した穂乃果がここまで粘ったのには驚いた。別に個人的な恨みがあったわけではないんだけど、彼にはちょっとしたことでも言っ

た。でも、弱音を一切吐かずに一途に努力し続けた。

（その頑張りに免じて、今日は許してあげようかな……）

「みんな、お疲れ様やね。ちょっとナレーション入れてもたけど、結構良い出来やと思う」

「それなら良かったです。これで少しでも『M.S』の知名度がアップすると万々歳なんですけど」

「……上がるよ。絶対に」

きちんと動画が再生されるかどうか確認した後、ビデオカメラを閉じた希先輩はこう言った。

「カードがそう告げるんや。『M.S』は高みへ昇っていくって」

スピリチュアルな希先輩が言うのなら、絶対にそうなのだろう。

最初から『M.S』が埋もれるなんて思っていたわけではない。けど、やっぱり有名になる以外に廃校を救う方法がない以上、色んな手段を用いても、注目度は

上げておきたい。そんな私の心が、ほんの少しネガティブにさせた。

「じゃ、また後でね。光莉ちゃん」

「うん。また後で」

今から生徒会室に寄って、新聞部に寄ってから家に帰ってくるのだろうなと考えながらも、私にしか出来ない今の仕事をやろうと思う。

希先輩がこの場から去るのを見届けた私は、練習がハードで死屍累々と化している休憩所へと向かう。

私が近付くと条件反射のように穂乃果が抱き着いてきた。動くのしんどいならさっきのまま、壁に凭れていればいいのに。

「光莉ちゃんの鬼畜ー。途中から俺ばっか指摘し出したよね」

「あ、バレてた。てか、重い。立ってよー。あ、姑の如く指摘したのは、インタビューのとき、ニヤニヤしてたのがちょっとイラついちゃって」

仕返ししちゃった。と、下をペロリと出しながら、可愛く言ってあげると、穂乃果は少し照れたのか頬をじんわりと赤く染めていた。

こういう調子で彼らを弄ってあげると面白いかも。いつもラッキースケベ展開で美味しい思いをしている彼らなんだし、これぐらいしても良いよね。

新しい遊びに目覚めつつあると、穂乃果が耳元へ囁くようにこう言った。

「……もう、立てないよ。光莉が激しくするから」

耳元というガードが緩い場所へ、色っぽく囁くように言われた私の体はビクリと大きく震え、心臓が脈打ち始める。

男性恐怖症が再発したわけではない。ただ純粹に、『片桐光莉』の部分が反応しているだけ。

「な、なな、何言ってるの!?! 良いから離れ……って、真姫君は何やってるの!」
変なことを言う穂乃果を強制的に離そうと、手に力を入れて、穂乃果を拒絶するも、男女の力の差は翻らない。そればかりか、ついには真姫までも私に引っ付き出すようになってしまった。

後ろには穂乃果がいて、前からは真姫がしがみつくように抱き着いてくる。

「んー。何でもない。ただ、抱き着いてみたかっただけ」

今までも何度か穂乃果が抱き着いているのを目撃しているので、どんな感じの抱き心地か感じてみたかったんだろうな。

「あー、真姫君。ずるい！ おれも混ざるー！」

「僕も……いいかな」

死体のように凭れ掛かっていたのに、凜が元氣よく私のサイドにきて抱き着いて来た。それに便乗するかのように、花陽も逆サイドへ。

これが所謂、四面楚歌というものか。と、若干ギャグに走らないと自分の中で何が収集がつかないような状態に陥りながらも、私は常に笑っていた。穂乃果に悪戯されたせいで、顔は赤くなっているかも知れないけど。

——こんな日々、いいな。

如何にも青春っぽいこんな学院生活、前世でも送ってたなと不意に思ってしまった。今は前世を振り返ろうと無意味なのに、何故かそう思ってしまったんだ。

第22話 リーダーの素質

「やっぱり、この問題はオレが部長についた瞬間から考え直すべきだったんだよ」
アイドル研究部の部室に緊迫した空気が流れる。

全員が真剣な面持ちになり、にこ先輩の言葉を待った。

彼らが今から話し合おうとしていることは、練習をするよりも、何よりも大切なこと。これからの『μ's』の在り方がどうなっていくのかを左右する重大な問題なのだから。

「ボクは穂乃果君が良いけど……」

にこの言葉を受けたことが一目散に穂乃果を推薦する。

私的にも穂乃果が『μ's』のリーダーになった方が良いと思う。『μ's』を作るキツカケを作ったのは穂乃果だし、穂乃果だからここまでの人数が集まったんだから。

「ダメ。あの後、希と話したことを忘れた？」

「いや、覚えてはいるけど」

インタビューを終えて、生徒会室に戻り、帰り支度を済ませた希先輩とバツタリ会った『μ's』メンバー。

その際に会話した内容が、練習メニューの計画や管理、振り付けや作詞作曲、それに衣装作りは誰がしているのかという話。そして、そのどれにも担当していない現リーダーである穂乃果は何をしているのかという問題に直面した。

その言葉を聞いたにこは誰よりもこの問題を重要視し、今に至るといふわけだ。「リーダーにはまるで向いてないんだよ」

「同意見だ」

穂乃果にはリーダーに適性がないと言い張るにこ先輩の意見に賛同する真姫。

まあ、確かに能力的に言ったら穂乃果が『μ's』の活動に役に立つことは今までもこれからも一切ないかも知れない。

——けど、本当にリーダーが穂乃果でなくてもいいのかな。

「リーダーを決めるんだったら、早く決めた方がいいよね。希先輩から借りるビデオカメラでPVだって録るんだし。勿論、新しいリーダーをセンターにして」

「じゃあ、一体誰が……」

新しいリーダーをセンターにすると、今の曲で合わせることになる。つまり、ポジシヨ的な問題が発生するので早めに決めてもらいたいところだ。

とりあえず今は、穂乃果センターでダンスの振り付けとかを考えているけど。

花陽の問い掛けに待ってましたと言わんばかりのにこ先輩は備え付けのホワイトボードにリーダーとしての在り方と説明文が書かれていた。

「リーダーとは、まず第一に誰よりも熱い情熱をもってみんなを引っ張っていける人で、精神的支柱になれるだけの懐の大きさを持っている人間であること」

……やっぱり穂乃果じゃない？

話を聞いてて思ったんだけど、やっぱり穂乃果で良いと思う。確かにスクールアイドルに対する熱い情熱は今も持っていないかも知れない。これから持つかどうか少し怪しい。けどね。みんなを引っ張っていける人で、精神的支柱になれるだけの懐はあるよ。

「そして、何よりメンバーから尊敬される存在であること。この条件を全て備えたメンバーという……」

にこ先輩はみんなに対して問い掛けていた。

おそらくにこ先輩は「にこ先輩がリーダーに向いてます」とメンバーに言って欲しいのだろうね。だから、部長についた瞬間からなんて言ったんだ。

希先輩から絶妙なパスを受け取って、今がチャンスだと思って言ったわけか。

でも、にこ先輩にみんなを引っ張っていける力があるのかと言われたら微妙な気がする。誰よりも熱い情熱は持っているだろうけど。それに、他のメンバーから尊敬されているのかな？ 年上ではあるから若干の尊敬心はあるだろうけど、まだ親しんでない以上、まだないと思う。

「海未先輩かな？」

「なんでやねーん！」

凜の海未推しなコメントに対して、にこ先輩はやはりツツコミを入れた。
やっぱ私が予想した展開を期待していたのだろう。

「僕ですか？」

「……海未君なら向いてるかも、リーダー！」

「穂乃果はそれで良いんですか？」

「えっ？ なんですさ」

穂乃果も凜の意見に賛同し、海未をリーダーにと推すが、海未は穂乃果に対して問い掛けていた。おそらく海未もわかっているのだろう。

「リーダーの座を奪われようとしているんですよ？」

「……それが？」

「何も感じないのですか？」

「みんなと『μ's』をやっていくのは一緒だろ？」

「でも、センターではなくなるのですよ？」

「あ、そうか」

何度も質問をした後、やっと穂乃果も理解したのか納得はしていた。

「別に良いんじゃない。確かに俺はことり君並みに裁縫が上手いわけでもない。海未君みたいに歌詞も書けない。真姫君のように作曲も出来ない。ダンスの振り付けやポジションの構成だって光莉ちゃんに一任しているし、俺が出来ることは何も無い。それで、リーダーを辞めろって言われるんなら、辞めるよ。みんなと『μ's』をやっていくことに変わりはないんだから」

「穂乃果……」

思っていた以上に穂乃果はスクールアイドル……『μ's』に熱中しているみたいだね。

昔は興味を惹いたものの全部やっではすぐに辞めてっというのを繰り返していた男の子だったのに。今ではこんなな一つのこと集中して――。

（えっ？ なんで、今……）

感慨深い気持ちに陥っていたのだが、不意に思っていたことに驚きを隠せないでいた。

どうして私はそんなことを思い出しているのだろう。

「……光莉はどう思いますか？」

「え？ あ、えっと、正直に言っつて、穂乃果がリーダーじゃないなら、海未とことりは無理だと思うよ。海未はリーダーに期待される能力はあるかも知れないけど、リーダーとしては今一つ。ことりは副リーダーって感じでサポートに向いてるから」

これじゃあ中々リーダーが決まらず平行線なままだよね。

なら、私がいい企画を発案してみようかな。

「ってことで、どうせロクに決まらないと思ったので、簡単にリーダー決定戦を考
えてみました！」

紙に纏めているのは、歌、ダンスと書かれた項目。チラシ配りを入れても良かったのだけど、それはやめておいた。街角で某人気アイドルっぽい風貌の少年らがチラシ配りをしていたら、それこそ凄いことになるんじゃないかと思ったからだ。この世界だとうなるかはわからないけれども。

「歌とダンスで評価が高かった人がリーダーってことで、勿論、それに最適な店もあるよ。ちょっとお高くなるけど……そこは」

視線を赤髪の少年に向ける。

すると、『MS』全員の視線も彼に集まり、各々がなるほどといった表情を浮かべた。

流石、西木野総合病院の一人息子。

お金関係の話題が出たら視線は一人に集中するんだね。私がいっと見ていたから

かも知れないけれど、まあ、許してくれるよね。

「なんでこっち見るんだよ」

「真姫君、お願い!! リーダーを決めるのに必要なことなんだ」

椅子に座ったままの真姫の付近まで行き、真姫の手を両手で包み込むように握り締めて、少し上目遣いにして、原作ことりの必殺技的な感じの甘える声を出して、真姫に縋る。

マネージャーさんは今月色々あったせいで、金銭面に余裕がないのです。

急遽、洋服を買いに走ったりとか、色々と

……ね。部屋に置いていた衣服はあまり着たいと思えなくなっちゃったからね。あんなだけ荒らされて物色された衣服を好んで着れる人はいるのかな。

「……別にいいよ。それくらい」

私から視線を逸らして渋々了承する真姫。そんな彼の姿が微笑ましく思える。

今はまだ私にしか心を開いていない様子が堪らなく嬉しい。まだ、心を開きかけてる途中かも知れないけど。

「やった! ありがとう!。真姫君」

「……良いんですか？ 光莉が無理を言ったみたいですけど」

「いいよ。他の人だったら許さなかったけど、光莉先輩だったら別に」

なんか海未の対応を傍から聞いてたら、穂乃果が何かをやらかした際にサポートに徹する海未の対応とそっくりで、女版穂乃果とでも思われてたりするのかなと心配になってくる。

でも、ね。このセンター決定戦はマネージャー的には絶好のチャンスなんだ。みんなの歌唱力がわかるのも良いことだし、何より全員のダンスのレベルがわかる。おそらく使う台はゲームセンターにある足のステップが主になるあの機械だろうけど。足運びが出来ていたら腕の振りなどはどうにかなる、と思う。実際に自分はそのうだったから。

そんなわけで、マネージャー的にはみんなのレベルが把握出来る良い機会なんですよ。

真姫には悪いことをしたという自覚はあるよ。無理矢理、自分の意見を通そうと思っているのも。でも、やっぱり、この機会は逃したくない。

「まあ、タダで貸すのはちよっとアレだから。今度、うちに二日間ぐらいメイドの

バイトに来てよ」

「考えておきます……」

今でも少し女性服には抵抗がある。

フリフリした服を着るのが少し苦手というか、出来れば着たくないんだ。ボーイッシュな服装や長めのスカートであれば着れる。けど、フリルがついた服は何故か着たいとは思えない。

そのメイドのバイトをした際に着る服もスカートが異様に短かったり、フリフリでなかったら良いな。

「よし、じゃあ、問題も解決したし、さっそく行こう！」

「[[[[おー！]]]]」

「お、おー……」

穂乃果の掛け声に合わせるようにやる気に満ちた返事をする『μ's』メンバー。問題解決って言っても、私が西木野家でメイドをするという条件の下、成り立っているということだけは理解しててね。

『μ's』のために私も体を張っているという事実だけは理解してて欲しい。ただ

単に借りるだけだと嫌な気分になるから、交換条件を出してくれた方が公式の手段を使って手に入れたお金に思えて、まだ気分的にマシだけど。

第23話 リーダー決定戦

「まずはカラオケで歌唱力を競ってもらおうよ！」

リーダー決定戦を行う上で必要な歌とダンスが一ヶ所で競い合えるアミューズメント施設に来たμ's一同は、カラオケボックスを一部屋借りて、決定戦を行うことにした。

歌とダンスの点数を競った後に色んなゲームをしようよと言っていたメンバーがいたが、適当に流してここまで来れた。

何だか知らないうちに、メンバー内でこの施設にある球技を総なめして一位になった人が私を一日自由に出来るなんて賭け事が行われているらしい。

一日自由に出来るって……。本人を除け者にしてそんな変な約束しないでくれま
すかね。

適当な相槌を打っていた際にでも、約束させたのか知らないけど、私はその話全然聞いてないんだけど、誰かが一位になったとしても、反故にしてもいいかな。

私は誰かのモノになんてなりたいと思わないし、思うつもりもないから。

「全員が一曲ずつ歌って、得点が高かった人が歌唱力部門のトップってことで」

「……くつくつく。こんな事もあるうかと高得点の出やすい曲のピックアップは既に済んでいるんだよ。これで、リーダーは確実に!!」

「にこ先輩、なんか黒いものが漏れてますよ」

「う、うるさい！ それじゃ、始めるよ」

ついさっき言い出したばかりなのに、こんな事もあるうかとして、何手先のことまで読んでいるのだろうかにこ先輩は。

アイドルグループのリーダーを決定するための戦いになると、最初に言い出した時点から考えていたのだろうか。

それだとしたら、かなりの策士ってことになるけど。

(潮れなきやいいけど……)

みんなは和気藹々とした様子で、どの曲歌おうかなんて話をしていて。

これがリーダーを決定する戦いだと誰が思うだろうか。十人に見せても十人と、友達と一緒にカラオケに来た普通の客だと答えるはず。

『μs』という名のグループの未来がかけられた一戦をこれから行うだなんて、誰が予想出来るのか。

「アンタら、緊張感なさ過ぎだよ!!」

……にこ先輩だけ見たらわかる気がするんだけどね。

「……歌唱力部門は真姫の勝ちだね」

私自身も聞き惚れた歌声を持つ真姫だから、音感も良いんだろうなと思っていたんだけど、予想以上だったよ。

驚異の99点を叩き出したんだから。最も本人は100点を取りたかったみたいで、悔しそうな表情を浮かべていたけど、歌唱力部門を勝ち取った嬉しさの方が勝ったみたい。

点数が出た直後は悔しさを滲ませていたのに、全員が歌い終わった後にはガッツポーズをこっそりとしていたのだから。

——とはいえ、結構な接戦だった。僅差で敗れた花陽だけど、彼も96点と非常

に優秀な成績を収めていたし、次は海未、穂乃果、ことり、凜と90点以上のメンバーがいた。にこ先輩は……うん。89点だったよ。90点代まであと1点だったんだけど、機械に嫌われたのかな。

本人は妥協したみたいで納得はいかないだろうけども、89点でもかなり良い点数だよ。このカラオケの機種は採点が厳しいって噂だし。

「光莉ちゃんも歌って見たら？」

「えっ？ あー、そうだね。せっかく来たんだから、一曲ぐらい」

光莉ちゃんの歌聴いてみたいと私にマイクを向けてきたことり。彼の手に握られていたマイクを手に取り、歌いたい曲がないか検索する。

歌手名や曲名を入れる欄ではなく、ジャンルという欄をタッチした私の目の前に現れた表のところにネット上ではかなり有名なネットアイドルっぽい少年少女のページがあり、そこへ飛ぶ。

前世では性別とか色々な問題があって、あんまり好き好んで歌ったことはないけど、『M.S』の曲がない以上はそれぐらいかなあと思ったんだよ。

「あ、これにしよう」

童話の白雪姫をモチーフとして作られている曲。

採点モードの時は前世では絶対に歌わなかった曲だ。……それだけど、何故か今回は歌ってみたくなったんだ。

実際に歌ってみると、思っていた以上に喉も辛くないし、自然と高音が出せている気がする。

前はちょっと無理して音程を上げて、頑張っていた自分もいたけど、こういう面では嬉しいな。こっちの世界で『*U.S*』の曲がカラオケにあったら良かったのに。マイクを持ち気持ちよさげに感情を込めつつ熱唱していると、メンバーが全員こちらを凝視していた。

呟くような小さな声音で「うまつ」とか「綺麗」とか聞こえた気がしなくもないので、褒められているのだらう。ちょっとだけ、本当にちょっとだけ嬉しい。



「ふう」

カラオケが終わり、ダンスの勝負も終了した今、みんなの結果を集計していた。ダンスの結果だけど、評価は凜がS、穂乃果、海未、真姫の三人がAで、ことり、にこがB。花陽がCだった。

歌唱力部門は真姫、ダンス部門は凜がトップとなった。

「これ……。それぞれの部門で優劣を付けてみたけど、どう收拾をつけたらいいんだろ」

「みんな平均的に高いもんね。誰がリーダーに相応しいかって言われると迷うよね」
「歌唱力部門とダンス部門の総合優勝者はメンバーじゃないからね」

ちなみに今、真姫が言ったように総合優勝者はH!Sメンバーではなくて、私だった。

カラオケでは思っていた以上に、曲が私の声に合わせていたようで真姫を超えて100点を取ってしまった。ダンスでは持ち前の運動神経やリズム感を最大限に活かしてノーミスのSランククリアだった。凜と同じSランクだけど、私のところはパーフェクトと称されていたので一位になった。……マネージャーだけだね。

「じゃあ、無くてもいいんじゃないか？俺、リーダーらしいリーダーしてなかつ

たじゃん。それでも練習はしてきた。それに歌もしっかり歌ってるし」

「けど、リーダーがいらないグループなんて聞いたことないが……」

「センターはどうするのさ？」

穂乃果の今までの戦いを無に帰すような急な発言に対して、にこ先輩と真姫の二人は疑問を隠しきれないでいた。

確かにリーダーがいるのといないのでは、変わってくる。リーダーが率先してくれるからグループが成り立つし、センターとして活躍出来るのだ。

「別にセンターなんていらんじゃん。みんなで順番に歌えたらさ、カッコイイし、素敵だと思わない？ 作れないかな。そんな曲を——」

「まあ、作れなくはないですが……」

「そういう曲、悪くはないね。Msの仲の良さも理解してもらえらるだろうし」

結構乗り気な真姫に対して、作詞担当の海未は若干戸惑いを見せつつある。けど、心の奥底では思っているのだろう。やはり、穂乃果がリーダーだと。

誰にも縛られない在るがままに、こっちの方が楽しいからと言って実行出来る彼こそがリーダーだとね。

「振り付けはどうか？ 光莉ちゃん」

「お安い御用だよ。穂乃果」

実際にその方が振り付けを考えるの楽しいし、良いと思う。

穂乃果がセンターばかりだと、原作のPVにおける振り付けがチラついて、それにしないとって思ってしまったし、そうなるから、振り付け師としてはそっちのが面白い。……あ、勿論、男子に似合わない振り付けは入れてないよ。

「じゃあ、それが一番いいよ！ みんなで歌って、みんながセンター!!」

穂乃果は両手を大きく上げてそう宣言した。

私もだけど、μ'sメンバーは誰も反論を言わなかった。

「よし、そうと決まれば早速練習を始めようよ！」

我先にと走り出す穂乃果の後ろを付き従うように歩き始める。そして、屋上に向かう階段に差し掛かった時、ことりが徐に言い出した。

「本当にリーダーがいなくて良かったのかな？ センター問題はともかくとして」

「そんなの。もう決まっていますよ」

「不本意だけど……」

ことりの疑問に答える海未と真姫。

海未は当然としても、真姫は言葉上は不本意だと言ってはいるが、顔が微かに緩んでいるので、きちんと理解しちゃっているのだろう。

新しい道を開拓してでもなお、走り続ける穂乃果のリーダー性を。

「いろんな事に怯まず、ただ思うがままに真っ直ぐ突き進んでく。それって、穂乃果にしか出来ないことだよ。私達、誰でも不可能な。彼にしかないリーダー性だと私は思う」

走って階段を駆け上がる穂乃果を見ながら思う。

本当に彼は、μ'sのリーダーで、彼が引っ張ってくれるから私達は私達でいられる。そんな気がするよ。

リーダー決定戦を通じて、彼らはより結束が固まった。

そんな彼らのこれからの未来を描いた楽曲——『これからのSomeday』。

※お知らせ

これから『あれ？これって『ラブライブ』だよね』の更新速度が月一になります。

もしかしたら月二のパターンがあるかも知れませんが、とりあえず身の回りが落ち着くまで暫く間を空けようと思っています。

次回の更新はいつだろうとお楽しみにしてください。下さっている方には申し訳ないので、よろしく願います。

これからの更新は毎月1日を予定しています。

第24話 ラブライブ？

図らずしもジャスト一ヶ月後になってしまった件について……。

本当はもう少し早めに投稿するつもりだったので。

DDONとか仕事とか、スプラトゥーンとかで忙しかったのですよ（自業自得と
いう）

『これからのSomeday』もかなりの視聴数を記録し、『μ's』は少しずつ人気を上げていった。マネージャーである私の特殊な情報網を持ってして感想や評価を仕入れていると、彼らのグループが人気急上昇スクールアイドルとしてピックアップされてるところだってさ。

このままだと、アイドルシヨップに『μ's』のグッズが並ぶ日も近いかも知れない。だけど、何時になるかがわからない。いくら鰻登りで旬な『μ's』であっ

でも、いつまでも勢いだけで上りあがっていけない程、この世界は甘くない。

だったら、今のこの勢いがあるうちにもっと波に乗っていききたい。

そこで私はある一つの方法を思い付いた。

情報収集してる間に耳に入り込んできた単語。前世の記憶がある自分は絶対にこの大会に『μ's』を出したい。そうでなくては『ラブライブ！』でないし、これ無くして『ラブライブ！』は語れない。

「ラブライブ……？」

「そう。わかりやすく例えるとスクールアイドルの甲子園かな。出場可能なグループはランキングの上位二十組のみで、スクールアイドルの頂点を決定付ける大会。今が旬なスクールアイドルで盛り上がる事間違いなしと言われているんだよ」

仕入れた情報を部室に集合しているメンバーに公開する。

アイドルに詳しい花陽とに先輩の二人の食い付きが異常なまでに強かった。マネージャーとして一つの意見としてあげただけなのだが、二人はやろう。と肯定的なスタンスでいた。

「いいんじゃない。にこは悪くないと思う」

「まさにアイドル界に革命を起こす夢のイベントじゃないですか。やりましょう！ チケット販売日はいつでしょうか？ 初日特典は……」

口ではそこまで興味がある振りをしていないにこ先輩だけど、目には闘志が秘められており燃えていた。反対に同じく興味を示している花陽だが、彼はまったく違う方面での興味だった。にこ先輩は出場者として、花陽は観客としての心構えでいた。

「もしかして花陽君、見に行くつもり？」

「当たり前です！ これはアイドル史に残る一大イベントですよ。見逃せません」

「アイドル関係になるとこれだもんな」

「凜はこっちのかよちゃんも好きだけどね」

アイドルのことになると真剣な顔付きになり、キャラがブレまくっている花陽を見ながら呟く一年生組。

真姫は「いつもこんな感じで喋れたら良いのに」と呆れていたが、本当に嫌がってはいないので仲は相変わらずいいのだろう。凜は良すぎる気がしてならないけどね。いつかホモ扱いされても知らないよ。

「なんだ。俺はてっきり皆で頑張って出場しようって言うのかと」

「しゅ、出場!? そ、そんな恐れ多いです」

「キャラ変わりすぎ」

「凛はこっちのかよちんも好きにゃー」

だから、ホモ扱いされ……げふんげふん。何でもないです。

「でも、せっかくスクールアイドルしてるんだったら、目指してみるのも悪くはないんじゃない?」

「ってか、目指さないとダメでしょ!」

「そうは言っても現実には厳しいと思うよ。大体、上には上がいるんだから今から目指してもねえ」

「そう……ですよね」

現在の『μ's』のランキングではラブライブに出場することは不可能であろう。上位二十組なのだからかなりの組は出場出来るじゃんと思うかもしれない。だが、私は知っている。『μ's』に一票が入った最初の頃、ランキングでは999位と表示されていたことを。

要するに999組のスクールアイドルが二十という枠を狙いに掛かるのだ。スクールアイドルのトップ二十がラブライブに出れる。余りにも倍率が高過ぎると思わないこともないが、妥当な線だと思う。ラブライブに出るためにはそれぐらいの実力が必要。ラブライブに出場するための登竜門だと思えば俄然やる気は出る。ただし、狭き門となるけれど。

——でも、私は皆なら叶えられると思っている。

「でもね。『Ms』って今、急上昇ピックアップスクールアイドルに選ばれているんだよ。だから出来ないことはないと思うんだ」

そう言って、ランキング画面を見せる。

順位が三桁から二桁へと変動していた。この調子でいけば二十位どころか一位だって夢じゃないかも知れない。その頂点に立つのは絶対的な王者だけれど。

男にしては長めの真っ黒な髪をたなびかせながら、キレのあるダンスを披露し、低く整った歌声で同性をも魅了する少年——『統堂英玲奈』。

栗色のちよつと天然掛かった髪が特徴的で、言動の節々から癒し系な印象を与え

る男の子。彼——『優木 あんじゅ』の王子様フェイスにやられる少女は多いと聞く。

そして、リーダーの『綺羅 ツバサ』。

彼は『A・R・I・S・E』の中でも別格の才能の持ち主。

液晶越しでしか会った事はないけれど、彼の持つオーラはそんなじよそこらのアイドルにさえ負けない。力強いものを秘めている。

一言でいえば“持っている者”。悪いことを言うようで申し訳ないんだけど、彼を一目でも見た後に他のアイドルを見たら“持っていない者”として評価が出来る。無論、『M・S』の誰であっても。

——けど、諦めたくない。認めたくない。

何より『A・R・I・S・E』に負けたくない。『M・S』が好きで、メンバーが大好きだから。

(それに『A・R・I・S・E』に勝ちたい理由も出来た——)
パソコンのディスプレイには、こう書かれている。

『新しい曲、格好良かったです』

『メンバー七人に増えたんですね。いつも一所懸命さが伝わって大好きです』

『μ's』のこれからを期待してくれているファンを裏切りたくない。だから、一生懸命やるんだ。そんで、『A・R・I・S・E』に笑顔で勝つ。

それが私の……今の夢。

次回は3バカの勉強……ではなく、オリジナル展開を予定しています。

いえ、若干間違えました。

次回からはオリジナル展開+（にこを除く）三年生加入編となっています。

第25話 狼狽

月一更新と言ったな。あれは、嘘だ——。

というわけではありませんが、偶々時間が空いたので少々執筆時間を作り上げて書きあげました。

前話の後書きで記した通り、今話からオリジナル展開です。

「ラブライブ……?」

「はい。全国のスクールアイドルが一同に集まって行う大会です。参加する条件は現在うちのスクールアイドル『μ's』も登録しているサイトで上位二十位以内に入れば参加となります」

『μs』のメンバーと話し合った結果。やはり学園に在籍する生徒の長である生徒会長の承諾を得てから理事長へ行った方が良さだろうということになり、絵里先輩の下へと訪れた私、片桐光莉であった。

彼らの意見は二つに割れて非常に判断が付きにくかった。何度もスクールアイドル関係で申請を通すと否定的な言葉を発して取り付く島もない状態であった生徒会長を避けて理事長へ直訴しようという意見。これまでの実績から行っても「学校の許可？ 認められないな」と門前払いされるのではないかと思ひ。それ以外の未来が見えなかったからだ。

もう一つは穂乃果が率先して言っていた生徒会長を通してから理事長へ。という意見。根っから『μs』を嫌っているわけではないと口にした穂乃果の直感を、個人的な意見で反対しているわけじゃないと会長の誠実さを信じようという派閥に分かれていた。

「なるほどね。優勝は狙えそう？」

「まあ、今のところはトップに君臨しているグループがあるので、なんとも言えませんが、二十位に入るだけの實力はあると思われまます」

「そう……。別に良いよ。ラブライブに出場しても」

「本当ですかっ!?!」

堅苦しいと噂の生徒会長からは想像出来ないぐらい優しい声音で許可を得られたので、驚き半分で聞き返してしまう。

認められない。の一言で遮断されると思っていたので肩透かしの気持ちもありながらも、今更却下されても嫌なので追及はしないようにする。

「でも、優勝は狙いなよ。別に取れとは言わないけど」

「それは勿論ですよ。負けるつもりで出場したいなんて誰一人として思いませんから」

ラブライブ出場を狙うなら、優勝を取る気迫で挑まないと他のグループにも「そんなもんなんだ」と見下されそうな気がする。何より『μ's』が上がることで下がるグループもあることを重々理解して、負けたグループの気持ちも汲んで、上を目指したい。自分達がトップでありたい。その想いを存分に発揮したい。

「では、失礼します」

生徒会室から退出した私は、すぐさま『μ's』が練習している屋上へ向かおう

と足を早める。

その道中、私は思わず足を止めてしまった。

(……あれ、なんで私はここまでしているんだろう)

確かに『M.S』は好きだけど、こんなにも真剣に必死になるまでのことじゃない。そりゃあ、何にもない空虚な私を誘ってくれた『M.S』に恩返しをしたいと思う。けど、そこまでのものじゃないはず。

だったら……なんで……。

理由もわからず階段の途中で足を動かさずにいた。『M.S』が好きな理由、好きになった理由。それらを思い出そうとすると頭の中で強い痛みが奔る。

——『M.S』の楽曲が好きになったから？

違う。ファーストライブで使った『START:DASH!!』を耳にするまでに私は『M.S』のマネージャーとして加入していた。だったら、私は何に惹かれて『M.S』に入ったのだろうか。

頑張ってる思い出そうとすると、頭の片隅を過るのは何処か見覚えのある教室で涙ながらに少女達が会話をしている様子。そして、学校の屋上と思わしき場所で一

人の少女がとある女子に強烈なビンタを浴びせていたこと。

(あれは……穂乃果君と海未君……なの?)

——わからない。

何故、あの記憶の欠片に映る少女らを男子の穂乃果君と海未君だと思ってしまったのか。私の記憶が所々曖昧になっていて、何が正しいのかわからない。

「…ひ…かり…光莉ちゃん!？」

「え。あ、希先輩」

階段の途中で蹲る私の姿を彼はどう捉えてしまったのだろうか。なんて他人事のように現状を考えてしまう。きつと、一緒に暮らしている希先輩のことだ。心配で心配で堪らない状態だろう。もしそうじゃなかったなら、私が自意識過剰なわけだけど。今の希先輩の顔つきから察するにそれは杞憂だったとわかる。

「あはは……。心配かけてごめんね。でも、大丈夫だから」

「大丈夫なわけないやろ！ とりあえず保健室に送るけど、今日はもう帰ろ。ウチももう帰るところやし、『μs』の皆にはウチから言うから」

「うん……、そうする」

希先輩に導かれるように彼の腕に抱かれ、お姫様のように保健室へと送られる。けど、指一本すら動かさずにじっとしていることにする。他の人に見られるのは恥ずかしいけれど、今はずっとこうしていたい。

私はきつと悪い子だ。

「光莉ちゃん？」

しっかりと落ちないように力強く支えてくれている希先輩の袖を軽く握ってみる。どうしても聞かれても理由は答えられない。

急ぎながらも不思議に思ったのか、こちらへ怪訝そうな表情を向ける彼。

そんな慈愛に満ちた彼の表情が私は好きで、ずっと見ていたいと思う。……彼は本気で心配してくれているのに、こんな気持ちを抱いてしまう私はきつと――。



――白い微睡の中、心地良い空間にいる。

何にも捉われずあるがままに漂っているだけで、時間は過ぎていく。嫌なこと、悲しいこと。何も感じずに青空をゆったりと流れている雲のように流れに身を任せ
る。

少しずつ、ほんの少しずつ身体が消えていく気がする。

指先から感触が消却されていき、自然と無くなっていく。それと同時に頭の中からも知識が白濁に包まれていった。好きな食べ物や嫌いな食べ物。趣味や特技といった自己紹介で発表する機会が多いプロフィールですらも消去されていく。そんな感覚に最初は恐怖を感じずにいられなかった。が、今はもう気持ちが良い。どう足掻いても逃れることは不可能。だったら、もう逆らうだけ無駄だと諦めの境地に至った。

「でも、叶うならもう少しいたかったな……」

もう少しだけ、一緒にいたかった。これは紛れもない本音だけど、自分がいたら
彼は物語を楽しめなくなる。先が見えている物語や他人がしているゲームを傍

から静かに見ているのなんて、面白くないし。仮に自分だったら人に味わってほしくない。

「だから、僕は消えるよ」

これから先は、自分達の実力だけで物語を紡ぐんだ。決して、僕を頼ってはいかない。

(じゃあね。素敵な人生を送りなよ、『光莉』)

次回からは本格的にオリジナル要素が強くなります。

強いていうなら『光莉編』ですかね。そろそろ本格的に主人公に光を当ててみようかなと思ひまして。……“ひかり”なだけにw

と、まあ、くだらない冗談は置いておいて次回もよろしくお願ひします！
次回の更新はきつと11月1日になると思ひます。ではでは！。

第26話 一縷の希

「……熱は、ないね。よかった」

家へ帰宅した光莉と希の二人。

希が甲斐甲斐しく世話をした結果もあり、早期完治に終わった。しかし、一時ではあったものの熱が急激に上昇した実績があるので、本人は熟睡しているが、希は一切寝ようとしなない。

少女の額に置いてある濡れタオルが熱くなったら、冷水に浸し、水を絞ってから元の位置へ戻す。

「光莉ちゃんは本当にあの子と似てるよね」

幼少期に出会った一人の少女。

ただ会って少し話しただけと言えばそうなのだが、希には少女が忘れられなかった。親の仕事の都合で転校となることが多く、希も転校となるのが多かった。当時は何度目度重なる転校に嫌気が差していた。友達を作ってもすぐにいなくなる。正確に言えば、自分がいなくなるといけない。いけな。

別にもう友達なんていらぬや。そう思っていた自分の前に現れた少女がいた。綺麗な黒髪を携え、映し出す人の心すら洗い流すようなライトブルーの瞳が特徴的だった女の子。

『私は……っていうんだ。あなた、一緒に遊ぼう？』

その子の名前はなんと言っただろうか。

あの時はどうせいなくなる、一緒に遊べなくなるクラスメイトの一人と思って聞き流していた。それから幾度と遊ぶ仲になるのだが、今更名前を聞けなくて、いつも「キミ」って呼んでた。

『希君って言うんだ。じゃあ、のん君だね！』

そんな愛称を今まで付けてくれるような友達はいなかった。彼女が始めてで、その次に彼女と同じぐらい好きになった友人は絵里しかない。にこも普段から話す

仲ではあるけれど、そこまでじゃない。彼が一方的に距離を取っているような気がするけど。

当時はのん君と呼ばれることが若干恥ずかしかった。けど、彼女が自分を呼ぶ時にだけ使う特別な呼び名——そう考えたら嬉しかった。

もしかしたらその時から恋をしていたのかも知れない。

希の初恋——。

いつか少年の親友である絵里と二人で仕事の合間に話したことがあった初恋の話。

あのとときは自覚してなかったけど、少女に激似な光莉の姿を見て自覚した——。

あの名も知らない思い出の子に恋をしたんだ、と。

だからこそ、希は思った。

「キミじゃ、ないよね」

あの子がそのまますすくと成長していたなら、今の光莉ちゃんにそっくりだ。

ただ一点——瞳の色が違うだけ。

彼女は青く染まった瞳の色をしていた。例の少女はライトブルー。似て非なる色なために、希は違うと確信を持った。

瞳の色はカラーコンタクトでもない限り変わらない。外見を意識する心が若干欠けている光莉にカラコンをする可能性は皆無と言っていい。

「気のせいだよね」

光莉が規則正しい寢息を立てて、夢の中で滞在していることを確認した後、希はゆっくりと扉を閉める。

「光莉ちゃんが小腹空いた時用におかゆでも作っておいてあげよ」

生姜は身体に良いって聞くけど、意識的に遠ざけている節が光莉の挙動に現れていたので、嫌いとまではいかないにしても苦手なのだと思え、シンプルなおかゆにしようとキッチンに立つ。

一人暮らしをし始めて、料理を作りだした最初の頃はおかゆですらも苦労したなあとしみじみと思いつながら慣れた手付きで調理を行う。

トントン……。と、ノックの音が廊下に響く。しかし、中にいる人の返事はない。最前提として寝ている人なため、希は扉を片手で開けて中へ入る。

「起きてる？ 光莉ちゃん」

声をかけながら、少女の下へお粥を載せたお盆を持っていく。当然、起きるわけがないと思いつながらだけれど、夕食を何も食わずに寝ているお姫様がお腹を空かせたらいけないので、希は彼女の付近のテーブルの上にお盆を置いた。

——瞬間。

「……のん、君」

少女の口から紡がれた一言。それは、希の思考回路を麻痺させた。

ただ一言、名前というか愛称を口ずさんだだけ。それも良くある愛称だ。決して自分のことじゃない。希はそう自分に言い聞かせた。

「まさか……。ね。ただの偶然だよね」

希はそのまま退室し、扉を閉めた。

そのまま扉に背を預け、眩いた。

「光莉ちゃんがあの子だったなら、俺は……」

時期が来るまで『μs』を見守る位置に徹しようとしていたスタンスを根本から覆さなければならぬ。と思う。

もし、倍率が高い光莉ちゃんがあの子だったら、誰にも負けない。負けたくない。

——自分を変えてくれたあの子が、好きだから。

第27話 産みの親

「……今、何時？」

電気の消えた暗闇の中、私は目を覚ました。

倒れてからの記憶が完全にはないけれど、だいぶ気絶していたことだけはわかった。身近に置かれている小さな机の上には、お粥が作られていた。一目見て、希先輩が作ってくれたものだとわかり、一口食べてみる。

「あったかい……」

時間が経っているのに、温かいはずはない。けど、私には不思議とそう思えた。きっと彼の気持ちも籠っていたのが自然と理解出来たからなのかも。

希先輩はいつもそうだ。そうやって周囲に気を利かせて、より良い空間を作ろうとする。確かにその空間は居心地が良いけれども、希先輩が自我を殺してまで頑張って作るほどの空間ではない。

「本当に、不器用な人……」

いつも……？

私は何故、そんなにも一緒にいない希先輩に対してそんな表現をしたのだろうか。更に可笑しいことを挙げるとすれば、記憶が曖昧であること。私はこの世に生を受けてからもう十数年となるが、実際に記憶が残っているのはここ数日のみ。まるで、ここ数日の間に生を受けた感じに。

(まさか、ね……)

きっと私自身が忘れてしまっているだけ。

記憶の引き出しにぽっかりと空いてしまった穴。昨日までは思い出せたはずなのに、今はもう思い出せない。

「どう……して」

私は一体、誰なのー。

全く記憶がないわけではなく、過去の記憶のみが消えており、常識などは消えていない。その事実が私を不安にさせた。



「光莉ちゃん？ 大丈夫？」

前日に倒れたばかりだけでも今はピンピンとしていて、メンバーと共に練習をしていた。

拒否してもどうせ無理矢理参加するだろうと海未が言ったことでほぼ強引に参加させてもらうことになった。

そして、練習の合間に取っている小休憩の最中、スポーツドリンクを入れたボトルに口を付けながら各々で会話を行っていた。その時間に見かけに寄らず意外とメンバーのことを考えているリーダーこと穂乃果は私に心配の声を掛ける。

そんなにも辛そうな表情をしていたのかと不安に思いながら、穂乃果には大丈夫と返事をする。

他のメンバーから少し離れた場所で座り込むように休憩を取っていた私。別に疲れが溜まっているわけではない。

「そこまで心配しなくても大丈夫だよ」

笑みを浮かべながら穂乃果に対して訴える。そんなにも気に掛けなくても良いと。そこまで私は上等な人間じゃないよ。

「心配するよ！ だって、仲間なんだから」

「穂乃果……君」

君はいつもそう。人の話もまともに聞いたことはない。けれど、損はしたことはないし、させたことはない。何事にも一直線に突っ走り、思い付きであっても必ず実行する行動力を持っている。

そして、誰よりも周囲の人間を気にする。

自分の思い付きについて来てくれている大切な仲間だから。

「……ごめん。気にしないで」

会話と同時に休憩も切り上げ、練習開始の合図を出す。

見る人が見れば、これ以上追求されたくなくて練習に逃げたと予想が付くだろうが、実際にはその通り。私はこの話をこれ以上広げたくない。ここにいる人——それがたった一人にでも心配をかける必要性を感じないから。

自分の中の迷いを振り払うように練習に精を出す。とは言っても、練習を実行す

るのは私ではなくて μ S のメンバーであるけれど、文句はなかった。

誰もが丁寧に真剣に、私が言い出した練習メニューに取り組む。

こうして見れば、 μ S が人気急上昇ピックアップスクールアイドルになる理由がわかる気がする。

メンバーは皆個人的で特徴が類似している人は誰もいない。そして、全体的に歌のレベルが高い。歌だけで言ったら現段階でスクールアイドルの頂点に立つ A・R I S E に匹敵する程、上手いと私は勝手に思っている。だけど、後一步が踏み出せてない気がしなくもない。

もちろん、更に歌が上手くなるなら順位も自然と上がるだろうけど、手っ取り早く順位を上げるならもっと別のことに着手すべきだ。

(とりあえず練習をするのであれば、ダンスでしようね。ダンスはまだまだ上限があるし、 μ S に足りないものを挙げるとすればそれしかないから)

歌の練習時間を少し削って、ダンスの練習に当てるべきかな。今のままじゃ、 μ S のダンスに魅力は感じない。ダンスでも人を魅了したいのであれば、これではダメ。

(何処かにダンスの上手い人がいれば良いのだけでもー)

「光莉ちゃん。ちょっと良い？」

「希……先輩？」

少しだけ開けたドアの隙間から顔を覗かせる副会長。彼はこちらへ視線を向け、他のメンバーに声を掛けるわけでも、堂々と入ってくるわけでもなかった。だからこそ、彼は私にだけ用事があったのだと悟り、メンバーの誰にも見つからないように希先輩の所へ向かった。

「どうしたの？ 学校ではあまり接触しないでおこうって、希先輩が……」
「そうなんやけどな。一つだけ伝えておこう思って」

学校で一緒に住んでいることをバレてしまうのは良くないから、ボロが出ないよ
うにあまり接触しないようにしようと思った。

本当は家からずっと一緒に登校しているけれど、途中で待ち合わせして登下校を
共にしているという設定で。

屋上を後にし、数分間歩いて着いた場所は中庭のベンチスペース。

落ち着いた空間の中で会話をするならうってつけの場所だ。

「これを見て」

差し出して来た希先輩の携帯——スマートフォンを手に取る。その画面に映るのは、金色の髪をたなびかせながらキレの良いダンスを披露する生徒会長の姿が。

私は言葉を失ってしまったー。

今のμsの誰よりも上手く楽しそうな表情で踊る絵里先輩。

他にも一緒に踊っている人がいるけど、彼と共に踊っている希先輩の姿ぐらいしか目に入らない。それでも、希先輩よりも、凄く綺麗に踊り切ったのが絵里先輩だ。別に希先輩が下手なわけじゃなく、それ以上に絵里先輩があまりにも上手すぎるだけ。

「綺麗……」

「光莉ちゃんなら、そういうと思って見せようかなと」

直接言葉にはしていないけれど、今までの上昇と比べるとμsのランクは停滞気味だ。ここに至るまでの上昇率は異常だったかも知れないが、彼らの実力を考えれば当然だと思う。しかし、最後の一步が踏み出せない。それがダンスだと検討は

付いたけど、アテがなく打つ手なしだった私に希先輩は救いの手を差し出してくれたのだと悟った。

希先輩はやはりμ'sのことを気に入っている。絵里先輩は生徒会長として、本来に合理的な手段しか取らない人で、可能か不可能かわからない曖昧なスクールアイドル活動は認めないと言っているし、生徒会の手助けは受けられない。そう思っていたけれど、希先輩は違った。彼は生徒会サイドでも、こっちサイドでもない。云わば、傍観者。守り神とでも言ったら良いかな。

「光莉ちゃん」

おふざけが一切感じられない真剣な表情を浮かべて、私の名を呼ぶ希先輩へと視線を向ける。その際に再生していた動画は止めて希先輩にスマートフォンを返す。それを手で受け取り懐にしまいながら、私に告げる。

「エリチは不器用で人付き合いを積極的にするタイプじゃないけど、決して悪い人間じゃないから。学校が好きで好きで仕方なくて、この学校を守りたいだけで」

「わかってますよ。希先輩」

彼が本当に学校が大好きで、絶対に守りたい。そう思っているからこそ、未来が

見えないアイドル活動に対して否定的な意見を持っているだけ。もっと、合理的な方法で学校を救いたいと思っっている。学校を救いたいという思いは一緒なのにね。でも、そんな彼がアイドル活動を認め始めた。『音ノ木坂学院』の名前を背負って『ラブライブ』に出場しても良いと。だけど、ラブライブに出るためには私達のみ力だけでは一步足りない。その一步を踏み出す為にはやはり絵里先輩の尽力が必要だ。

「だからこそ、私は……絵里先輩に入ってもらいたいです」

「うん。光莉ちゃんならわかってくれると思ったよ。『μ's』は彼らでいないといけない」

その言葉で私は察した。

やっぱり『μ's』という名前を付けたのは希先輩だった。何となくというか、たぶんそうなんだろうなと思いつながら確信はなかったけれど、この言葉を聞いて確信を持った。

希先輩はきっと、『μ's』に賭けているんだ。『μ's』なら……穂乃果達なら何とかしてくれると。

「エリチはきつと否定するだろうけど、彼もやっぱり気になってるんだよ。何かとウチに聞いてくるんや。あの子らはどうなんだってさ。気になるんなら自分で見て来^きいやってね」

「まあ、絵里君らしいんじゃないかな」

楽しくアイドル活動をし、結果を出している彼らと違い、

一生懸命試行錯誤しているにも関わらず結果を出せていない自分が歯痒くて、MSに興味を持っていてるのに意地を張り続ける少年。

現在のMSメンバーにも似た人はいるけれど、リーダーを見習って欲しいよ。やりた^いからやる。

後のことはまた、その度に考えたら良い。

何事にも真っ直ぐ進む彼に一人、また一人とついで行くのだから。

改稿後

プロローグ

読者の皆様、お久しぶりでございます。

すみません。仕事が忙しく執筆が出来る状況ではありませんでした。

そして、もう一点。

続きを書こうとしたのですが、何処までいったっけなあ。という感じで最初から見直していくと、今更になってあれ、これちょっと物語上おかしくないかにかやあ？という結論になったので、新しく書き直すことにしました。

以前の物はそのまま残しておきますので、何処か変わったか見比べてみてくださいいな。

——俺は今、絶賛後悔している。

俺こと『片桐光』かたぎりひかるは若干十五歳にして、交通事故に巻き込まれて死亡してしまっ
た。

死因である交通事故だが、それも信号が変わる際にブレーキを掛けようとしたト
ラックが、何故か操作不可な状態に陥り、横断中の少女に突進しようとしているの
を目の当たりにしてしまい体が勝手に動いてしまったのだ。その少女を庇うように
突き飛ばし、彼女が大きな怪我をしていないことを確認し、俺の意識は無くなった
。

そんな理不尽な死を突き付けられた俺だったが当然、納得出来るわけがなく、ま
だ生きていたかった。俺が大好きな『ラブライブ！』をもっともっと堪能したかつ

た。死ぬなんて嫌だよ。

この願いを神様が聞き届けてくれたのか。何故なのかは知らないが、気付けば俺は再度生き返っていた。

トラックに当たってグチャグチャになったであろう五体は、充分に動かすことが出来るし、ちゃんと景色も見えるし、嗅覚も、味覚もしっかりとしている。

ただ……一つだけ。

——何故か、俺は女になっていた。



「初めまして。今日からこの音ノ木坂学院に転入してきました『片桐光莉』かたぎりひかりです。よろしく願います」

俺、『片桐光』改め、『片桐光莉』は音ノ木坂学院にやって来た。

この世界が『ラブライブ！』だと頭が理解した後の俺の行動は凄まじく早かつ

た。母親に必死に頼み込んで、音ノ木坂学院に転入させてもらうことにした。というのも、理由もなしに頼んだわけではない。今はまだ限られた人にしか知られてないが『*M's*』の一人と一緒に、父親が転勤を伴う仕事をしているので、必然的に家族皆で引っ越しという話になっていた。が、俺は絶対に『ラブライブ!』の舞台となる神田町から出たくないと思っただけで、引っ越しを断った。

それでも食い下がって来る両親を説得させる為に出した切り札が、音ノ木坂学院への転入だったわけだ。

そもそも何故、これが切り札なのかと言うと、音ノ木坂学院の理事長とは母親が旧知の仲であり、信頼の置ける人物だと言っていたし、今住んでいるアパートからこの学校が一番近いのだ。

尚且つ、音ノ木坂学院は女子校。断られる原因がない。

「……まあ、そういうことなら仕方ないわね。取り敢えず掛け合ってみるわ」
妙に渋った表情を浮かべる母親。

当時はそんな表情を浮かべた理由が皆目見当もつかない俺であったが、今ならばはっきりとわかる。

本当ならここで追求するべきだったのだと数日後の俺は後悔する事となる。

その間の数日間は憧れの音ノ木坂学院へ入れると舞い上がっていた。まあ、ぶっちゃけ本当は男として転生させてくれた方があわよくば『M.S』の誰かと恋仲になんて事を考えていた俺だけでも、逆の発想で女であるが故に『M.S』が通っている音ノ木坂学院に転入出来るじゃん。そこで普通のカップルという夢は潰えたけれど、ユリの花を咲かせることは出来る。という結論に至った。

その舞い上がっていた俺の脳内では致命的な矛盾点を見出す事が出来なかったのだ。

まず第一にさっき言った母親の態度。

そして、次に理事長が直々に家まで来て対談した際の会話。この時は原作というかアニメと同じで「理事長、やっぱり綺麗だなあ」とか脳内で考えていた為に気にしていなかったが、制服のデザイン一覽に目を通してどれが良いかという話だった。——女子校なら、女子の制服は一つに定められているだろうという当たり前な考えが浮かばなかったこと。

それらの矛盾点に気付かぬまま、数日の夜を過ごし、『ラブライブ！』の世界に

置ける物語が今、始まった。

「片桐光莉さんは、音ノ木坂学院の共学化のテスト生として転入して貰います。なので、皆さん。粗相のないように」

担任の先生の紹介を受けた俺は目の前に広がる光景に、口角を微かに上げながら苦笑を浮かべる事しか出来なかった。

そう、俺は『音ノ木坂学院』のテスト生だ。しかも、共学化の。

この世界に置ける『音ノ木坂学院』は女子校ではなく、男子校であったこと。物語に必要な廃校寸前という問題は同じだが、在籍する生徒の性別が逆であったことが何よりも俺を失望させた。

そりゃあ、『M.S』の誰かと恋仲になりたいとか考えていたけどさ、そういう意味じゃないんだよ。俺が男で、『M.S』メンバーが女の子であることが大切なんだよ。

(ここって本当に音ノ木坂学院で、『ラブライブ!』の世界で合ってるんだよね……)

恨むよ、神様)

「片桐、君の席はあそこだ」

そういつて担任の教師が指差したのは、アッシュ色の髪を携えたかなりの美少年の隣の席。

何となく俺はこの美少年が誰なのか、把握してしまった。

自分の席までの道程を歩こうとした際、担任に腕を握られ引き留められた。

「ま、そんなわけだが、色恋に積極的なお前らのことだ。この美少女に質問したいだろう？ ってことで、今の時間から一時間目終了までは、転入生への質問コーナーとする」

別に一時間目は私の授業だし、いけるだろう。と楽観的に言い放った担任だったが、俺からすれば冗談じゃない。

どんな質問が投げかけられるのかも、女の子らしい答えも何もかも理解してないのに、適切な回答なんて出来ないんだからやめてよ。

『はいはい!!』

教師の一言によつて、教室中の男子生徒の手が挙げられた。

「そうだな。じゃあ、最初は高坂からいこうか」

……高坂。この音ノ木坂学院で、二年生でありつつ、高坂という苗字を持つ人を俺は一人しか知らない。

『ラブライブ!』で本人は皆がリーダーでセンターと言っているが、メンバー全員がリーダーと認める『μ's』のリーダー。

「俺、高坂穂乃果こうさかほのかね」

そういつて席を立った橙色に寄っているような茶髪を短く切り揃えている美少年が声をあげた。

やはり『μ's』のリーダーで発起人である高坂穂乃果なんだね。てか、前世の俺よりもイケメンでちょっと泣きそう。この世界に置ける俺は、今の自分が言うのはなんかナルシストっぽく聞こえるから嫌なんだけど、結構可愛い容姿をしている。だから、別に気にしてはないんだけど。ちょっと、前世と比べちゃうからやだな。穂乃果でこの容姿なのだから、他の『μ's』のメンバーもそうなのだろう。

穂乃果からあまり視線を逸らさないように、少しでも教室内を見回すと、肩口まで綺麗な黒髪を伸ばしている少年やアッシュ色の髪でシヨタっぽい顔付きの少年がいた。おそらく彼らがそうなんだろうねと納得した俺は再び視線を穂乃果に戻す。「光莉ちゃんはさ、スクールアイドルって興味ある？」

「はい？」

男女逆転でもスクールアイドルがあることにビックリなんだけど。というか、初対面で良く名前呼びが出来るよね。……穂乃果だから、仕方がないか。

音楽室で真姫ちゃんと会った後、勧誘している際は西木野さんって呼んでたはずなんだけど、気のせいかな。初対面で女の子を名前呼びって、ちょっとプレイボーイ臭がするね。

「スクールアイドル、ですか？」

「そう。こちらで有名なのは『UTX学院』の『AァRライIイSスE』っていう男子三人で結成されているグループなんだけど」

やっぱり『AァRライIイSスE』のメンバーも男女逆転に巻き込まれているんだ。

これで俺の予想は当たっている可能性が高くなってきた。ここに転入してくる際

に理事長の姿を見たけれど、変わっていなかった。つまりはそういうことなのだろう。

言い方は悪いけれど、理事長は話に関わらない。『音ノ木坂学院』は女子高であったが、男子職員がいらないわけではなかった。だけれど、『Love Live』に出場する人は全員女子だった。

この世界では教員などは性別が変わっていないが、女子しか参加していなかった企画に参加していたグループはすべて性別が逆転していると考えられる。

「——光莉ちゃんさえ良かったら、俺達『μ's』のマネージャーになって一緒に廃校を阻止してくれないかな」

第1話 マネージャー

遅くなりました……。。

ですが、その遅れに見合った結果は出ていると思います。ということ、オンラインゲームに例えると大幅アップデートでございます。

改稿前と比べると内容が濃くなっており、尚且つ文章も変わっています。ってことで、もう一度じっくりと見ていただけると嬉しく思います。

——以上、作者からの前振りでした。

「お断りします」

担任の先生によって開催された悪夢質問タイムの時間の最中、俺に対する質問として『スクールアイドルを知っているか』という質問を行った『高坂穂乃果こうさかほのか』であったが、何故か俺の勧誘へと話がすり替わっていた。

おそらく彼的にはこっちが本題であると推測出来るので、間違っではないのだが、質問タイムとなっていて今では間違っていると云える。なので、俺はその勧誘を一刀両断する。

『ラブライブ！』の世界のスクールアイドルであったならば、性別が男であっても女であっても加入していたはずだ。だがしかし、この世界でのスクールアイドルに興味は惹かれない。万が一にもないが、俺が前世から「乙女ゲー楽しい!!」とか言ってる人であったなら、喜んでこの話を引き受けていただろう。……前世の俺が乙女ゲーを楽しんでプレイしている光景をちょっと想像してしまっただけでも、薔薇の花が咲き乱れている様子がパッと頭に浮かび上がってきて吐きそうではあるが。

——とにかく、ここではスクールアイドルはなしだ。

この世界では ボーイズラブ ガールズラブ BLやGLといったジャンルの恋愛ではなくて、普通の恋愛になるんじゃないの。と思うだろう。確かに外見的には俺は女だ。だけど、精神的には男のままなので、正直、男が恋愛対象になるなんてまっぴらごめんだ。

「……スクールアイドルなんて」

誰にも聞こえないように声を小にして呟いた一言。

冷たい声音で言い放った一言は質問者の穂乃果には届かなかったようで、すごすごと席につく。正直、納得しているかどうかは本人にしかわからない。けど、十中八九、納得はしていないように思う。あの穂乃果がこれぐらいの拒絶で引き下がるとは思えない。海末とことりの二人は納得しているだろうか……って、ことりさん？　なんで、そんな驚いたような視線をこちらに向けているんでしょうかね。

それからの質問タイムは少しの一波乱はあったものの、異性の転入生が来たらそりゃあ気になるよね。って思えるぐらいの質問しかなかったので、俺的には助かつ

た。その質疑応答の最中、ずっと穂乃果がこちらを見ていた事に一抹の不安を感じながら、問い掛けられた質問に対する答えを口にする。

「……さて、そろそろ終わりだ」

教師がそう口にした直後、校舎全体にチャイムが響き渡る。

そのチャイムが鳴り終わる前に担任は教室を後にする。どれだけ早く職員室に戻りたいんだよと心の中でツツコミを入れながら、俺は次の時間の準備に取り掛かる。

……その前に席を取り囲んでリンチでも行うのかという錯覚に陥るような量の男子生徒達を処理しないとね。

休み時間にこれだけの男子生徒に囲まれるのであれば、さっきの質問タイムは何だったんだろうな。と苦笑いを浮かべながら、我先にと質問を投げかけてきた男子生徒に対して答えを用意する。



「……なんで、あんなにもスクールアイドルが嫌なんだろう？」

「スクールアイドルが嫌というより、穂乃果の勧誘が急すぎる事に問題があります」
教室内で転入生ちゃんへの質問タイム延長線が行われているので、彼女に会話を聞かれたくないボクらは廊下に避難して、苦笑しながらも質問に答えている光莉ちゃんを視界に捉える。

海末君は穂乃果君の勧誘が急だったから拒否されたと思っているけど、ボク——
『南ことり』は違うと思う。たぶん、穂乃果君は直感で口にしたのだと思う。けれど、それが射てるはず。彼女がうっかりと呟いた一言……誰にも聞かれたくないのか小さな少女らしい声音だった。

『スクールアイドルなんて』

その時の彼女の表情は上手く形容し難いけど、とても儂くちょっと触れただけでも消えそうだった。だからかな。何時もの穂乃果君ならたった一度の勧誘が断られたからと言って諦めるわけがない。あの時はきっと本能でわかってしまったのだろ

う。今の光莉ちゃんに言ったらダメだと。

触れ方をほんの少しでも間違えてしまったら、おそらくあの小さな少女を傷付けてしまう事になると。そして、それが何を意味しているのかを。

「光莉ちゃん、入ってくれないかな……」

「そんなにも穂乃果は彼女がお気に入りなのですか？ あんなにきっぱりと断られたのに」

「確かに、望みを見せないぐらいの勢いで断われたよ。……でも、やっぱり俺はあの子が良い。一目見た瞬間『この子が良い』って思っちゃったから」

「……やっぱり穂乃果は穂乃果ですね。まあ、今回は納得しますよ。僕も思いましたから」

穂乃果君と海未君の言い分は良く分かる。

教室に入って来た際の立ち振る舞い。そして、ハキハキと喋っている姿。上手く笑顔を浮かべることが出来ないのかぎこちない笑みを浮かべるあの子を見て、ボクも同じ事を思ったから。

あの子がボクらと一緒に夢を追い掛けてくれたら、ボクらと一緒にいてくれたら、それはきつと楽しい事だろうなって。

……それでもボクは。

「ことり君は？」

「えっ？」

「光莉ちゃんがマネージャーになってくれたら、良いと思うんだ。あんなに可愛い子だし」

「そうだね。美少女が応援してくれるってシチュエーションだけでも、くるものがあるよね。ボクは良いと思うよ」

いつものように誰かに便乗し、自分の意見は隠す。

それがきつとボク達にとっては良い判断だと思うから……。

「じゃ、放課後にまた誘ってみよう」

「……ですね。考えていても仕方ないですし」

そう言って二人は先に教室へと戻っていく。

二人の後ろ姿を目で捉えながら、ボクは呟いた。

「……本当にこれで良かったのかな」

話し合いの結果、放課後にもう一度声を掛けてみる事に決定した。それでも、本当にそれが正解なのかかわからない。昔から穂乃果君は本能のままに動くけれど、彼について回って損をしたなんて思う事は一度としてなかった。だからこそ、今回もそれが正解なのだと思って、ボクは便乗した。

それが正解なのか不正解なのか、蓋を開けてみないとわからない。もしも、この選択が不正解だったら……？あの少女の笑顔をボクらが奪ってしまう事になる。そう考えると胸に激痛が走る。

「光莉ちゃん……」

この胸の痛みを必死に隠しながら、ボクは放課後まで笑顔という名の仮面を被る。穂乃果君の……ボク達の出した答えが正解だと、そう信じて――。



「……で、なんで私なの？ 自慢じゃないけど、力仕事は無理だよ」

悪夢の質問タイムを無事に終え、今日一日のカリキュラムを全てこなした放課後――。
『μs』の現メンバーである『高坂穂乃果』、『園田海未』、『南ことり』の三人は再び俺の前にやってきた。

あっちの『ラブライブ！』でも思ったけど、やっぱり三人一緒にいたらここは花園かって雰囲気があるよな。皆が皆、可愛いって意味で。

こっちだと、花園は花園でも薔薇が咲き乱れていそうだけどね。

海未やことりも穂乃果と一緒に、髪の色や瞳の色は全く一緒だけど、やっぱり髪型とか長さは変わっていた。あのままの髪型だと確かにおかしいけど、正直こんなにもカッコイイ人じゃなかったら気付かなかったよ。……キャラ補正って大事だね。うん。

「大丈夫だよ。光莉ちゃんに頼みたい仕事に力仕事はないから」

「……穂乃果。ちゃんと順序を守って丁寧の説明しないと伝わらないよ」

「あはは。まあまあ、海未君、穂乃果君はいつもこんな感じじゃない。光莉ちゃんに頼みたいことってというのはね。……あ、光莉ちゃんって呼んでよかった？」

「あ、うん。いいよ」

穂乃果のスクールアイドルに対する熱意はわかったけれど、勢いだけで向かってくる穂乃果はやっぱり怖いね。何事に対しても思い付いたら一直線だし。

それを上手いこと制御するのが男子にしては少し長めに切り揃えている黒髪の美少年——園田海未。

そして、どちらに付くわけでもなく中立に立ち、上手くバランスを取っているの

がシヨタ顔でアツシユ色の髪をふんわりとヘアースタイリングしている、これまた美少年が南ことりだ。

「光莉ちゃんに頼みたいのは、もっとう別のことなんだ」

「別のこと？」

「練習メニューを組んだりとか、衣装のチェックとかお願いしたいんだ。ボクらよ
り女子の視点で見てもらった方がいいかも知れないからね」

女子の視点で見れもらった方がいいかも……ね。

俺は外面でいったら女子だけど、内面は完全に男子なんだが、言わない方がいい
よな。

「……後は作曲家を捕まえて欲しいけど」

「穂乃果。それは図々しいよ。大体、あの西木野の腕前を僕らは知らないんだから、
良いも悪いも判断出来ないですし」

「でも、穂乃果君の言いたいことはわかるよ。あの子が音楽室で聞き覚えのない自
作っぽい曲をピアノで弾きながら歌ってるの結構な人が耳にしているみたいだし」

「でしょでしょ！俺も彼の演奏や歌声を聴いて、『M.S』に入って欲しいって思っ

たし。でも、いきなり入ってくれていうのはあれじゃない？ ってことで、作曲して欲しいってお願いしたんだけどな」

お断りします。とでも断られたのかな。

普段から聴く曲はクラシックとかで、アイドル系の曲は一切聴かないから曲も作れないからって。アイドルの曲は軽くて嫌なんだよ。とか言ってるさだよ。こっちの真姫ちゃんは。……ちよつと待て。

「なんで、私が説得役にならなきゃいけないの？ 『M.S』はあなた達のグループでしょ」

原作でも穂乃果がどうかしてあのツンデレ娘を引き込んだんだから、こっちでも勝手にしてよ。

ぶっちゃけ『ラブライブ！』の世界だったなら率先して協力してたけどさ。なんちゃってなこの世界ではそこまで魅力を感じないんだよね。前の世界の俺と同じ性別を好きになんてならないし。外見的な意味で言ったら男女でピツタリなんだけど、精神的な事情で言えば俺は男に属するからね、同性愛を否定はしないが、実際

にしてみたらどう？と言われたら反射的に「いやだ」と断れる自信がある。

おそらく俺には断られると最初から思っていたんだろう。

穂乃果に対して海未が「ほれみたことか」といった様子で迫っていた。女子が三人揃ったら姦しいとは良く言うが、男子が三人揃っても姦しいんだな。

非協力的な人に必死に頼むぐらいなら別の人……それこそ男子に頼めば良いという海未だが、穂乃果は一向に引かない。何でここまで俺に拘るのか検討もつかない。二人で言い争いを続けており、ことりが仲裁に入っているがお互いに引く気がないようだ。

「ちょっと来て」

この言い争いは絶対に収まらないと悟ったのか、ことりは強引に俺の腕を引っ張り教室の外へと連れ出される。

「……ねえ、どこまで連れていく気」

廊下を二人で歩いて約五分ぐらい。

擦れ違う男子生徒から怪訝そうな眼差しを向けられ続けて、俺は少しイライラしていた。なんで、何にも悪いことしていない俺がそんな眼差しを向けられないとい

けないのさ、って。

イライラが限界に達したと悟ったのか、ここが目的地だったのか知らないが、こ
とりに連れられて来たのは、人気のない屋上だった。

「こんなとこに連れてきて何？」

俺の問いにことりは一切答えずに、何かを決意したかのように深く深呼吸をした
後、妙に据わった瞳をこちらに向ける。俺はそんなことりの様子に恐怖を感じ、一
歩ずつ近付いてくることりから距離を取るように少しずつ離れる。

一歩近付いてきたら二歩下がるといふ行動を何度も行っていると、何かにドンッ
と背中が当たった感触がした。

「っ!？」

チラッと後ろを確認した俺が目当たりにしたのは、背中に当たっている飛び降
り防止の為の柵と、そこから見える地表までの距離。

高所から下を見下ろしてしまった俺の足は自然と震えてしまい、恐怖のために体
が硬直してしまった。

(早く安全な場所に……)

一刻も早く高所から逃げようと扉まで行こうとした俺を止めたのは、紛れもない。同じクラスメイトでここまで一緒に来たことりだ。

このまま突き落とすんじゃないかと思われるぐらいの勢いで、俺はことりに押し倒された。押し倒されたといっても、柵に背が当たったままで、正確に言えば身動き取れなくされた。

顔のすぐ横には手をつかれ、左にも右にも動けない状態。

しゃがんで避けようと足を開けば、隙間に膝を入れられ、完全に身動きの取れない人形のようなだった。

今の自分に出来るのは、高所から下の景色を見下ろさないように、ことりの顔を睨み付けることぐらい。目を背けようとしたら景色が目映ってしまう。ならば、物凄く近いことりの顔を睨み付けて、絶対に屈しないという気持ちを伝えるしか今の俺には出来ない。

ことりとの距離がほんの少ししかない今、彼の身体から放たれている良い香りが鼻腔を擦り、至近距離で目に入ってしまう彼の真剣な表情に、少し変な気分になってしまいう。だからこそ、俺としては早く解放されたかったので、「離してよ」と

声を発しながら彼の身体を全力で押し返そうと胸板の辺りを押すが、一向に動く気配がない。というか、あんまり運動をしないことりですら、結構良い体をしている事を脳が理解してしまい、更に恥ずかしくなってしまった。

「いやだよ。どうしても離して欲しかったら、マネージャーになってよ」

「それも私じゃなくていいじゃない。力仕事が出来る男子の方が絶対にいいと思うよ」

俺は衣装作りが上手いわけでも、作詞作曲の才能があるわけでもない。何も無いんだから。

「ボクは君が良いんだ。君以外の誰かがマネージャーなんて考えられない」

「……っ！」

真っ直ぐ目を見て真剣な顔付きで言い放ったことり。

その想いに嘘偽りがないことに気付いた俺は、どうしようもなく恥ずかしくなり、ことりから少しだけ視線を逸らす。

(……なんだよ、これ。必要とされたことが嬉しいのかな。凄くドキドキして恥ず

かしい)

「光莉ちゃん、お願い」

顔を背けたことで、より近くなった俺の耳に直接ことりが囁くように呟いた。

「……わ、わかったから。『M.S』のマネージャーやるから離れて！」

心臓がバクバクと凄い勢いで脈打ち出し、このままの状態が続けばどうにかなっちゃいそうだったので、降参の意を示す言葉を口から漏らす。

俺の許可を得たことりは嬉しそうに「二人に伝えてくる」と言って、屋上から去っていった。

ことりがいつ気付いたのかは定かではないが、俺の体が震えている事を理解したことりは、屋上から去る前に俺を校舎への入り口の壁に凭れ掛けて、自身が羽織っていたブレザーを体に掛けてくれる始末。

まだ春とはいえ、若干風は冷たい。その寒気がキツカケで体が震えていると察して上着を掛けてくれた事は凄く嬉しいよ。でもね。その運び方が嫌だった。何が悲しくてお姫様抱っこされなきゃいけないんだよ。生まれて初めての経験だよ。

(……でも、嫌な気がしなかったのはなんでだろ。ドキドキが止まらないし)

自分に掛けられたブレザーをギュッと握り締め、俺は思った。

「暖かいなあ……」

何処まで『μS』のために出来るかわからない。

才能のない自分だけど、ほんの少しでも力になれるのであればなりたいな。と
さっきまでの俺なら一切考えないことを思い始めていた。

ことりがしたのはセクハラに当て嵌まる行為だったかも知れない。けど、それも
これも穂乃果や海未が、『μS』が大好きだから。

大切にしたいと思っっているモノを護るために、仕方のない手段だったのかもと考え
えると怒りもなくなつた。

「私も、好きになれるのかな」

——この世界の『 μ S』を。

——自分自身を。

あれ? これって『ラブライブ!』だよね

著者 片桐 奏斗

発行日 2021年7月24日

ハーメルン-SS・小説投稿サイト-
<https://syosetu.org/novel/56951/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。
